

### 3. 4 鳥類

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

分類群	絶滅 (EX)	野生 絶滅 (EW)	絶滅危惧Ⅰ類		絶滅危惧 Ⅱ類 (VU)	準絶滅 危惧 (NT)	絶滅のおそれ ある地域個体群 (LP)	情報 不足 (DD)	合 計	
			I A類 (CR)	I B類 (EN)						
初版1996	5		10	—	—	14	38	0	5	72
改訂第2版 2005	5	0	17	6	11	19	28	4	3	76
改訂第3版 2017	5	0	21	8	13	30	29	0	5	90

※初版のカテゴリーのうち、絶滅種は現行のカテゴリー名の絶滅と野生絶滅を集約することで示し、このほか絶滅危惧種は絶滅危惧Ⅰ類、危急種は絶滅危惧Ⅱ類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー名に変換して示した。

#### (1) 本改訂でのおもな留意点

1. 本改訂は現行版における掲載種を基本にして、県内における各種のこれまでの生息現状と最新の生態や生息分布に関する知見と情報、現地調査の結果等を加味して、掲載の見直しやその掲載内容の変更および新たな掲載種の選定、掲載ランクの見直しなど、全体的な見直し作業を行った。
2. 種および亜種のカテゴリーや県内での生息状況等は、日本鳥学会編（2012）による「日本産鳥類目録 改訂第7版」に準拠している。今回の改訂版では県内に生息する亜種レベルでの評価を基本としている。
3. 環境省編（2014）のレッドデータブックも参考にして選定と掲載を検討し、特に渡り鳥についてはその繁殖地だけでなく、渡来地としての中継地や越冬地も保護し、種の保全を図る必要性からその主な渡来種については選定し掲載を行った。なお、環境省編（2014）は日本鳥学会編（2000）の「目録改訂第6版」に準じている。
4. IUCNによる最新のレッドリストのランク（2016年10月1日評価版）も参考にして選定を行った。なお、IUCNのレッドリストは種のレベルで評価しているが、県内に生息する亜種を独立種（例えば、ホントウアカヒゲやリュウキュウキビタキなど）として評価している場合もあり、これは該当種ごとに特記事項等で明示し、今後の参考とした。

#### (2) 本改訂で明らかになったこと

本改訂版で掲載した本県の絶滅のおそれのある種の総数は90種となり、前回（2005）より14種増加した。なお、今回のリスト掲載種は、亜種に細分される場合は原則として亜種単位として評価している。その内訳は、絶滅（EX）が5種、絶滅危惧Ⅰ類（IA類+I類）21種（亜種）、絶滅危惧Ⅱ類（VU）が30種（亜種）、準絶滅危惧（NT）が29種（亜種）、絶滅のおそれのある地域個体群（LP）が該当種なし、情報不足（DD）が5種（亜種）となった。以下にそのランクごとに解説を加えた。

1. 大東諸島の固有亜種とされる「ダイトウノスリ」は、日本鳥学会編（2012）による「目録改訂第7版」では「絶滅（EX）」とされたことから、これに準拠し、これまでの絶滅危惧ⅠA類（CR）から今回絶滅（EX）にそのランクを変更掲載した。
2. これまで絶滅（EX）とされていた亜種「ダイトウグイス」は、本亜種と形態的に区別できないとする個体群が奄美諸島や沖縄諸島で発見され、日本鳥学会編（2012）による「目録改訂第7版」ではこの個体群を亜種「ダイトウグイス」として扱い、「絶滅（EX）」の扱いを停止している。同改訂第7版では沖縄諸島でも「留鳥」として生息していることが記述され、野外観察でも森林地域を中心に普通に生息している。このことから本書では「目録改訂第7版」に準拠し、本亜種を絶滅（EX）から一転して見直し、絶滅のおそれはないものと判断して、本書での掲載を行わなかった。しかしながら、本亜種は大東諸島では「絶滅」であろう。また、奄美諸島や沖縄島産の「ダイトウグイス」とされる個体群は将来的には別亜種に区分される可能性もある。
3. これまで八重山諸島の特産する亜種とされていた「ウスアカヒゲ」は、日本鳥学会編（2012）による「目録改訂第7版」では「絶滅」とされている。しかしながら、本書では絶滅（EX）ではなく、八重山諸島に繁殖個体

群があった可能性も考えられるため、環境省編（2014）に準拠して当面、情報不足（DD）として掲載することにした。

4. 八重山諸島仲の神島で繁殖している「アナドリ」を新規に準絶滅危惧種（NT）として選定掲載した。本種は伊豆諸島や小笠原諸島、硫黄列島などでの繁殖地が知られる他、奄美諸島ハンミヤ島、宮崎県枇榔（びろう）島などでも繁殖地が知られている。県内でも本種の数少ない繁殖地のひとつを保護し、本種の保全を図る必要があることから、今回選定し掲載した。
5. 今回の改訂で掲載を見直した種は、留鳥のリュウキュウサンショウクイ、夏鳥のリュウキュウアカショウビンとリュウキュウサンコウチョウ、旅鳥のヤツガシラと冬鳥のオオバン、そして、前述したように前回まで絶滅種（EX）とした「ダイトウグイス」の合計6種である。

留鳥のリュウキュウサンショウクイは、これまで琉球列島の特産亜種（あるいは固有種という考え方もある）とされているが、最近九州南部から四国地方に分布を拡大し、本州の神奈川県でも記録されるなど生息域がかなり広範に広がってきている傾向が見られる。県内での生息状況は森林地域から市街地近くの公園まで広く分布し、住宅地近くで繁殖例も見られる。したがって、当面絶滅のおそれは少ないものと判断した。前記夏鳥の2種については、森林地域に普通に渡来し、数も多いことから当面絶滅のおそれは少ないものと判断した。

旅鳥のヤツガシラは、ユーラシア大陸中緯度地域とアフリカに広く生息しており、日本周辺ではウスリーやアムールから朝鮮半島周辺で繁殖し、冬季には中国南部以南で越冬する。県内では毎年のように海岸近くの草原や農耕地、グラウンドなど開けた場所に旅鳥として飛来し、その生息環境は人為的な環境を多く利用し、滞在もごく短期で一時的である。したがって、本種の保護と合わせて、特にその渡り期における生息環境の保護を推進する必要性が他種よりも重要とは思われないため、当面絶滅のおそれは少ないものと判断した。オオバンは最近渡来数が格段に増加の傾向が認められ、本土でもごく普通種で数が増えている傾向にあり、絶滅のおそれは少ないものと判断した。

#### 6. ランクを上げた種

- ・ ヨナグニカラスバトは特に繁殖期における現地調査の結果、繁殖個体数は少ないものと判断され、これまでのENからCRにランクを上げた。
- ・ ヤンバルクイナはその生息地の外来種（特にマングース）の駆除効果が上がったことから個体数は回復傾向にあるものと考えられるが、現状ではマングースの根絶の見込みはたっておらず、野生化したイヌやネコ、交通事故等個体群に影響をあたえる要因の完全な除去にはまだ至っていないため、CRとした。
- ・ コウノトリやヘラシギ、オオヨシゴイ等の希少な渡り鳥についても、渡来機会の多い種を中心に環境省版に準じて選定した。そのランクは概ね環境省版に準じた。
- ・ オオクイナは宮古諸島まで生息分布は広がったが、その個体数は少ないものと考えられ、これまでのVUからENとした。リュウキュウキビタキは琉球列島の特産亜種であるが、森林環境への依存度は高いものと思われ、森林環境の改変で個体数が減少することが予想されるため、これまでのVUからENとした。ミフズブラは外来種（イタチやマングースなど）の影響が大きいものと考えられ、生息個体が確認できない島も見られることから、これまでのNTからVUとした。留鳥として生息するシロチドリは繁殖地が限定され、その繁殖環境は脆弱であるため、絶滅の危険性は増大しているものと判断され、これまでのNTからVUとした。このほか、リュウキュウツミ、ベニアジサシ、エリグロアジサシ、亜種アカヒゲ（亜種ホントウアカヒゲ、亜種ウスアカヒゲ除く）のランクを上げることにした。
- ・ 地域個体群（LP）の扱いについては、これまで島嶼に生息する亜種ダイトウメジロや亜種ダイトウヒヨドリなどの島嶼地域個体群を保護する目的で選定掲載されてきたが、今回の見直しでは、これまでの選定種（亜種）はいずれも島嶼に生息する固有の亜種で、生息域が狭い範囲であることから、他の島嶼に生息する亜種と同様に保護を図る必要性から準絶滅危惧（NT）にランクを変更した。したがって、今改訂では該当種はなかった。

#### 7. ランクを下げた種

冬鳥のミサゴは普通に海岸線に渡来し数も多く見られるため、絶滅の危険性は低いものと判断され、これまでのVUからNTとしたほか、クロツラヘラサギとツクシガモのランクは環境省によるモニタリング調査の結果を踏まえてランクを見直すことにした。

8. 現状不明種（DD）に新たに希少な渡り鳥であるヘラサギと、沖縄島で繁殖する亜種ツミ、八重山諸島固有の亜種とされるが生息現状が不明であるウスアカヒゲを追加した。

### (3) その他今後の課題等

## <鳥類>

本書に掲載する根拠として、その個体数等の定量的データの有無が重要な基礎情報となるものである。しかしながら、天然記念物指定種や希少野生動植物種に指定され、その保護を目的に生息実態調査や保護増殖事業等が長年展開されてきたヤンバルクイナやノグチゲラなどの種については、ある程度その状況を把握することが可能であるが、未指定の種についてはその大部分は生息個体数調査が実施されておらず、その把握には困難さがともなう。そのためそのランクを決定する情報が十分ではない種が多く見られる。したがって、今後も一定期間のスパンを持ってその見直し作業を行うためには、計画的にその生息個体数調査等を継続的に実施する必要性がある。

今回選定した掲載種の種や亜種区分については、日本鳥学会編（2012）の分類にしたがったが、IUCNのレッドリストが採用している分類とは異なる場合が多く見られた。したがって、県内に生息する鳥類の保護の基準となる種（亜種含む）の分類単位については、今後分類学的な再検討を行う必要性がある。

執筆者 髙原 建二（元沖縄県立特別支援学校・校長）

## (4) 掲載種の解説

### 1) 絶滅(EX)

- 和名 : リュウキュウカラスバト  
 分類 : ハト目 ハト科  
 学名 : *Columba joiyi* (Stejneger, 1887)  
 英名 : Ryukyu Wood Pigeon  
 カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー : 絶滅 (EX)
- 形態 : 原記載では、翼長 253 mm、尾長 188 mm、露出嘴峰長 23 mm、ふ蹠長は 35 mm と記載している。全体的に黒色で頭頂はいくらか紫光沢がかかる。後頸は緑色でその下に白斑がある。腰や胸にも緑色の金属光沢がある。嘴は青色で先端は白っぽい。脚は暗赤色。
- 近似種との区別 : カラスバト *C. j. janthina* より大型で嘴の青色や後頸の大きな三日月白帯が大きな特徴。  
 分布の概要 : 沖縄諸島と北大東島に記録が見られる。沖縄諸島では 1887 年 2 月に沖縄島北部の Kun-chan (国頭) で 1 個体の採集記録 (タイプ標本 : 山階鳥類研究所蔵) がみられる他、その後那覇や首里など多数の捕獲記録が見られる。沖縄島周辺離島では、伊平屋島・伊是名島・屋我地島・座間味島などでも 1904 年 4~7 月にかけて採集された記録がある (Ogawa, 1905)。大東諸島では 1922 年 9 月に折居彪二郎氏によって南大東島から 12 個体、北大東島から 2 個体の捕獲記録が見られる。なお、折居氏が 1936 年に南大東島大池の中島で採集した記録が、本種の生存が確認された最後の記録となっている。
- 生態的特徴 : 主として常緑広葉樹林で生息していたと言われているが、詳しいことはわかっていない。  
 学術的意義・評価 : カラスバトの種分化や遺伝的変異を研究する上で貴重な存在である。  
 特記事項 : 日本の固有種であり、沖縄諸島と大東諸島のみ固有種。IUCN カテゴリー : Extinct (EX)。  
 原記載 : Stejneger, 1887. Am. Nat., 21: 583. (Kunchan, Ryukyu Is.).  
 参考文献 : 梶田 学, 2014. リュウキュウカラスバト. レッドデータブック 2014, 2 鳥類, “日本の絶滅のおそれのある野生生物”, 環境省編, ぎょうせい, 東京, p9.  
 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.  
 環境省編, 2002. リュウキュウカラスバト. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 2 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 30.  
 小林桂助, 1983. 原色日本鳥類図鑑. 保育社, 大阪, 174.  
 日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録 (改訂第 5 版). 学習研究社, 東京, 53-54.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 Ogawa, 1905. Notes on Mr. Alan Owston's Collection of Birds from the Islands lying between Kiushu and Formosa. Annot. Zool. Jap., Vol. V. 175-232+Pl. XI.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. リュウキュウカラスバト. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 292.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 2005. リュウキュウカラスバト. “改訂沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, p41.  
 斎藤郁子・高原建二, 2003. 折居彪二郎資料. “琉球及び大隅列島採集日誌 (1921)”, 沖縄大学地域研究所叢書, 那覇, 160.  
 斎藤郁子・高原建二, 2005. 折居彪二郎資料. “琉球列島採集日誌 (1936)”, 沖縄大学地域研究所叢書.  
 高野伸二, 1982. 日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京, 303.
- 執筆者名 : 高原建二

- 和名 : ダイトウノスリ  
 分類 : タカ目 タカ科  
 学名 : *Buteo buteo oshiroi* Kuroda, 1971  
 英名 : Buzzard (Daito islands subspecies)  
 カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー : 絶滅 (EX)

- 形態 : 頭、頸、背面にかけ黄褐色に富み、翼、尾の地色が栗色で規則的な横帯を持つ。亜種ノスリの羽斑に類似するが、亜種ノスリの標準的な羽色に比べ、頭から眉斑、耳羽、上胸 (素囊部) の地色は黄土色を呈し、亜種ノスリの一般型のバフ白色より著しく濃い。顎の暗色斑はかなり明るい。背面は赤味に富み、羽縁などの淡色部はバフ褐色、あるいは赤褐色である。羽毛基部や中雨覆最長列の羽縁はバフ白色、大雨覆外弁は黒褐色、内弁には黒帯があり、外弁の端は赤褐色帯がある。初列および次列風切や尾羽の羽弁の地色は錆褐色で赤味が濃く、規則的な黒帯がある (尾羽には 8 帯)。亜種ノスリでは、これらの部分は灰褐色でとくに尾羽は横帯を欠く。脇羽はセビア褐色にバフ色の羽縁が

あり、胸中央から腿羽、腹、下尾筒は淡バフ色、胸や腿羽には小斑があり、これらの部分は亜種ノスリと同様といえる。翼下面は淡バフ色で外方初列風切先端部は黒く、次で2列の色の薄い横帯がある。次列風切下面はバフ赤褐色で、外側に淡い暗色帯がある。蟬膜は淡緑黄色、口角黄色、嘴は黒色で基部は淡く青色を帯び、紅彩は淡褐色である。趾蹠前方は中趾のつけ根まで羽毛がある。

**近似種との区別 :** タイプ標本が無いので、亜種ノスリとの標本の比較や野外識別には困難さが考えられる。  
**分布の概要 :** 南大東島に留鳥として生息するとされていた(黒田, 1971, 日本鳥学会, 1974)。池原(1973)は1972年10月に北大東島で2羽を確認している。また同島で1973年9月の森岡弘之氏の調査で観察されているが、同島で繁殖するものなのか南大東島から飛来したものなのか不明とされた。1998年1月にディスプレイ・フライトが記録された(高木 未発表資料)。大阪市立大学の学生による南大東島における鳥類調査が始まった2001年から2016年に至るまで、3月から8月の繁殖期にノスリの生息は記録されなかった(高木 未発表資料)。

**近縁な種及び群との分布状況の比較 :** ノスリは北海道、本州、四国、九州などで繁殖している。世界に5亜種がありヨーロッパ全域、イギリス、アゾレス島、コルシカ島、コーカサス、トルコ、スペイン、シベリア南部、朝鮮半島、中国などに生息している(黒田, 1984)。冬場は南に移動し台湾や東南アジアではまれな渡り鳥として渡来する。県内でも稀な冬鳥として渡来記録がある。

**生態的特徴 :** 卵は鶏卵大、白色で円形に近く3個の記録がある。2卵が順次孵化し、他の1卵は約3時間遅れて孵化した。全卵孵化には、第1卵の殻が破られはじめてから約6時間を要した。

**生息地の条件 :** 記載された雛が発見された巣は、湿原地の池ノ沢の近く通称ドブカヤが密生した湿地でモクマオウの大木が林立している環境にあるモクマオウの地上約5mの枝上に作られた。巣の直径は50cm、深さ30cmで、人が座ることができる程度に頑丈なものであった。モクマオウの青葉が毎日新たに重ねられた。記載された個体の発見当時、南大東島には少なくとも3つがいのダイトウノスリが生息していた。また、現在60歳代の島民が、1960年代に湿地帯のモクマオウにつくられた巣から雛を捕獲し、飼育したという情報を得た(高木 未発表資料)。記載論文の記述と伝聞の一致からダイトウノスリの営巣場所は湿地帯のモクマオウであったと推察される。

**学術的意義・評価 :** 大東諸島固有亜種である。  
**生存に対する脅威 :** 大阪市大による調査が始まった2001年から現在に至るまでに、農地改良に伴う整備で樹林地の幅が各所で減じられている。ドリーネの多くが貯水池として開発され樹林地の減少は続いてきた。しかしモクマオウの大径樹は現在でも残存しており、また繁殖が確認されていた1960年代よりも樹林地の面積は減少しているものの樹木は生長している。したがって樹林地の収奪が絶滅の原因とは思われない。しかし本亜種は自然度が高かった入植前の南大東島の環境において形成されたと考え、開拓による個体数の減少が絶滅の渦を引き起こし、絶滅に至った可能性がある。1960年代までに大規模に行なわれた農薬の使用が餌を汚染し、高次捕食者であるが故、生物濃縮を経て直接的な死因、孵化率の低下を引き起こした可能性もある。

**特記事項 :** 環境庁(1991)によると研究された標本は当時飼育されていた模式標本ただ1点であり、ノスリは変異の多い種であるので、模式標本の特徴が本当に個体群の特徴であるかどうかは不明であるという。また本亜種の模式標本は雛として捕獲され、飼育中の生後6年5ヶ月のオスとされる成鳥であった。この個体はその後脱糶し、模式標本は存在せず模式標本以外の標本も一切ない。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種ダイトウノスリを選定している。

**原記載 :** Kuroda, 1971. *Tori*, 20: 125, 127. (Minami-daitojima, Daito Is.).  
**参考文献 :** Brazil MA, 1991. *The Birds of Japan*. Christopher Helm and A & C Black, London.  
 池原貞雄, 1973. 大東島の陸産脊椎動物. “大東島天然記念物特別調査報告”, 文化庁, 東京, 52-62.  
 環境省, 2014. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, 東京.  
 King B F & Dickinson E C, 1975. *A Field Guide to the Birds of South-East Asia*. Hough-ton Mifflin Company, Boston.  
 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
 黒田長久, 1971. 南大東島のノスリ新亜種について. *鳥* 20: 125-129.  
 黒田長禮, 1935. 大東列島の鳥類について. *植物及び動物* 3: 1369-1370.  
 Mackinnon J & Phillipps K, 1993. *A Field Guide to the Birds of Borneo, Sumatora, Java, and Bali*. Oxford University Press, Oxford.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. ダイトウノスリ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 296-297.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 琉球新報社編, 1983. 写真集沖縄の野鳥. 誠文堂新光社, 東京.  
 嵩原建二, 1992. 北大東島の鳥類について. 文化課紀要, 沖縄県教育庁文化課, 那覇, 7: 88-98.

**執筆者名 :** 高木昌興

**和名 :** ミヤコショウビン  
**分類 :** ブッポウソウ目 カワセミ科  
**学名 :** *Todiramphus miyakoensis* (Kuroda, 1919)  
**英名 :** Miyako Kingfisher

カテゴリー：絶滅 (EX) 環境省カテゴリー：絶滅 (EX)

形態：頭部と下面は橙褐色である。背面、過眼帯ともに暗青色。脚は赤色味を帯びる。測定値は翼長 105mm、尾長 80.5 mm、ふ蹠長は 17 mm、嘴峰長 (外鞘を欠く) 38 mm とされている。

近似種との区別：グアム島産のズアカショウビン *H. c. cinnamomina* の変異個体ではないかとの疑いがあり、分類学上の疑問が残されているという指摘が見られる。

分布の概要：日本の固有種で、宮古島にのみ記録されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較：グアム島やボナペ島、パラオ諸島に生息するズアカショウビンに羽の色が似ていて、特にグアム島産亜種に酷似しているとされるが、本種は脚が赤く、過眼線が頭を巻くように後頸でつながっていないことや目の上に小白斑があることなどの点が異なるという指摘がされている。

学術的意義・評価：きわめて分布域の狭い種としての重要性がある。

特記事項：日本産固有種であり、宮古島の固有種。学名は日本鳥学会編 (2012) に準拠した。

原記載：Kuroda, 1919. *Dobutsu. Zasshi*, 31: 229, 231. (Miyako I, Ryukyus).

参考文献：梶田 学, 2014. ミヤコショウビン. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 13-14.

環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.

環境省編, 2002. ミヤコショウビン. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 2 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 34.

小林桂助, 1983. 原色日本鳥類図鑑. 保育社, 大阪, 166.

日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録 (改訂第 5 版). 学習研究社, 東京, 61.

日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ミヤコショウビン. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 292.

沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 2005. リュウキュウカラスバト. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, p41-42.

高野伸二, 1982. 日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京, 316.

執筆者名： 嵩原建二

和名： **ダイトウヤマガラ**  
 分類： スズメ目 シジュウカラ科  
 学名： *Poecile varius orii* (Kuroda, 1923)  
 英名： Varied Tit  
 カテゴリー： 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー： 絶滅 (EX)

形態：アマミヤマガラ *P. v. amamii*、オリヤマガラ *P. v. olivaceus* と同型で、頭部の汚白部は濃く、脇の栗色は淡く、背面はオリーブ色を帯びる。

島嶼濃色亜種の測定比較 (mm)			
	翼長	尾長	露出嘴峰長
<i>owstoni</i>	74-84	48-60	15-16
<i>amamii</i>	69-78	48-54	12.5-13.5
<i>orii</i>	71-79.5	47-56	14-15
<i>olivaceus</i>	65.5-74	43-50	13-13.5

環境庁 (1991) を引用

近似種との区別：八丈島産 *P. v. owstoni* (濃色大型) に比較し、琉球産は小型淡色で、大東産 *P. v. orii* は奄美産 *P. v. amamii* よりも濃色で、後頸部の栗色部が多いとされる。また、ナミエヤマガラによく似ているが、測定値上は本亜種が小さいとの指摘が見られる。

分布の概要：南・北大東島に知られている。1922年に折居彪二郎によって採集された南大東島産オス 8羽、メス 4羽、北大東島産オス 2羽から黒田長禮 (1923) により記載された亜種である (黒田標本 No. 7359, オスの基型標本は 1945年の戦災で焼失した)。現在黒田標本 No.7356, No.7358 の 2点のみが現存する (山階鳥類研究所蔵)。絶滅の原因は不明とされる。

学術的意義・評価：ヤマガラが最も遠距離にある島に隔離された島嶼性の亜種として、分布上重要である。また、分布域がきわめて狭い亜種であり、分類学上不明な点も多く、学術上重要である。

特記事項：日本固有亜種であり、大東諸島産固有亜種。学名は日本鳥学会編 (2012) に準拠した。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)\* \*IUCNは *Sittiparus varius* Temminck & Schlegel, 1848 として掲載し、種として評価。本県改訂は亜種ダイトウヤマガラを選定している。

原記載：Kuroda, 1923. *Bull. Brit. Orn. Club*, 43: 121. (Mnami-daitojima, Daito Is.).

参考文献：池原貞雄, 1973. 大東島の陸産脊椎動物. “大東島天然記念物特別調査報告”, 文化庁, 東京, 52-62.  
 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.

環境省編, 2002. ダイトウヤマガラ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデー

タブッカー 2 鳥類”，自然環境研究センター，東京，42。  
 西海 功・梶田 学，2014. ダイトウヤマガラ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編，ぎょうせい，東京，21。  
 日本鳥類目録編集委員会編，2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会，帯広，345pp。  
 日本鳥学会編，2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会，三田，438pp。  
 沖縄県環境保健部自然保護課（編），1996. ダイトウヤマガラ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータおきなわ”，沖縄県環境保健部自然保護課，沖縄，294。  
 山階鳥類研究所編，1975. この鳥を守ろう. 霞会館，東京。

執筆者名： 嵩原建二

和名： **ダイトウミソサザイ**  
 分類： スズメ目 ミソサザイ科  
 学名： *Troglodytes troglodytes orii* Yamashina, 1939  
 英名： Wren (Daito island subspecies)  
 カテゴリ： 絶滅 (EX) 環境省カテゴリ： 絶滅 (EX)

形態： 背面は濃く（本州・九州産より濃く八丈産に近いとされる）、腰や翼の黒点と縞は太く濃い。尾の縞は細くて多い。下面は本州産のように淡いが黒斑はほとんどない。嘴は屋久島産より短い。翼長 47 mm、尾長 32 mm、露出嘴峰長 11 mm、ふ蹠長 16.5 mm。

近似種との区別： 本州産 *T. t. fumigatus* より背面濃色で下面は似るが黒斑が淡い。八丈産 *T. t. mosukei* より下面が淡く背面の黒斑が濃い（ただし尾の斑は細かいとされる）。嘴が細く短い点为本亜種の特徴とされる。

分布の概要： 南大東島のみ分布していたことが知られている。1939 年に山階芳麿博士が近隣地方産 114 標本と比較して記載した亜種で、タイプ標本（山階鳥研 No.25476, オス. 折居彪二郎氏採集）のみで知られている。1972 年 10 月の池原（1973）の調査や 1974 年 5 月の日本野鳥の会（1975）の調査でも確認されていない。

学術的意義・評価： 分布域のきわめて狭い亜種としての貴重さが指摘されているが、他亜種との系統関係や分化の程度など分類学上の不明な点も多く学術上重要であることが指摘されている。

特記事項： 日本（南大東島）固有亜種。通常飛翔することの少ない留鳥（漂鳥）と考えられるミソサザイが、最も近い琉球列島から約 400 km も離れた大東諸島に拡散した例として重要性が指摘されている。しかしながら、最近沖縄島や久米島（朝鮮産亜種：嵩原ら，2001）などで種ミソサザイの冬季における観察例が増え、県内では本種は稀な冬鳥（もしくは迷鳥）と考えられる。したがって、大東諸島にも冬季に本種が飛来する可能性が十分考えられる。1938 年の採集以降、まったく記録されておらず、本亜種の記録はわずか冬季（1 月）の採集例 1 例のみであり、その繁殖の様相も知られていないため、冬季の迷行個体の可能性もある。IUCN カテゴリ： Least Concern (LC)\* \*IUCN は種として評価。本県改訂は亜種ダイトウミソサザイを選定している。

原記載： Yamashina, 1938. *Tori*, 10: 227. (Minami-daitojima, Daito Is.)  
 参考文献： 姉崎 悟・嵩原建二，2001. 南大東産鳥類目録. 沖縄県立博物館紀要 27:51-75。  
 姉崎悟・嵩原建二・松井 晋・高木昌興，2003. 大東諸島産鳥類目録. 沖縄県立博物館紀要 29:25-54。  
 池原貞雄，1973. 大東島の陸産脊椎動物. “大東島天然記念物特別調査報告”，文化庁，東京，52-62。  
 梶田 学，2014. ダイトウミソサザイ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編，ぎょうせい，東京，16。  
 環境庁編，1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-脊椎動物編. 日本野生生物研究センター，東京。  
 環境省編，2002. ダイトウミソサザイ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-2 鳥類”，自然環境研究センター，東京，38。  
 日本鳥類目録編集委員会編，2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会，帯広，345pp。  
 日本鳥学会編，2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会，三田，438pp。  
 日本野鳥の会，1975. 大東諸島. “特定鳥類等調査（環境庁委託調査）”，環境庁，東京，270-298。  
 沖縄県環境保健部自然保護課（編），1996. ダイトウミソサザイ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータおきなわ”，沖縄県環境保健部自然保護課，沖縄，293。  
 沖縄県環境保健部自然保護課（編），2005. ダイトウミソサザイ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータおきなわ”，沖縄県環境保健部自然保護課，沖縄，42。  
 嵩原建二・前原一統・嘉手苺初子・松田史郎，2001. 久米島で最近確認された鳥類. 久米島自然文化センター紀要(1): 1-19。  
 山階鳥類研究所編，1975. この鳥を守ろう. 霞会館，東京。

執筆者名： 嵩原建二

## 2) 絶滅危惧 I A 類 (CR)

和名： ヨナグニカラスバト

- 分類学名** : ハト目 ハト科  
*Columba janthina stejnegeri* (Kuroda, 1923)  
 Japanese Wood Pigeon (Yaeyama Islands subspecies)  
**カテゴリー** : 絶滅危惧 I A 類 (CR)      **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧 I B 類 (EN)
- 形態** : 本亜種はカラスバト *C. j. janthina* の体色に酷似するが、総体的に淡色である。  
**近似種との区別** : 沖縄諸島産のカラスバト *C. j. janthina* に類似しているが、体の金属光沢は弱い。またキジバトやキンバト、ズアカアオバトに比べて体は大きく、黒色であり区別は容易である。
- 分布の概要** : 宮古諸島と八重山諸島（石垣島、西表島、与那国島）に周年生息する。  
**近縁な種及び群との分布状況の比較** : 本亜種の生息数はキジバトやズアカアオバトに比べると極めて少なく、殆ど観察されない。
- 生態的特徴** : 本亜種の生態は全般的に不明であるが、基亜種のカラスバトに類似すると思われる。  
**生息地の条件** : 常緑広葉樹林に好んで生息する。  
**現在の生息状況** : 宮古島、多良間島、石垣島、西表島、与那国島に留鳥として生息する。宮古島では生息個体は多いが、石垣島、西表島では生息個体はきわめて少数と思われる。与那国島の立神岩で4~6月にかけて集団で繁殖が行われる。2004年には最大羽数が41羽であった（宇山, 2011）が、2015年の著者の調査では14羽しか観察できなかった。また7月頃には稲刈り跡の水田に若鳥を含めた本亜種が集団で落ち穂を採餌している。秋から冬にかけて目撃例は減るものの1年と通して観察されている（宇山, 2011）。宮古島でも繁殖期のピークは5~6月だがほぼ一年中繁殖している（砂川, 2011）。宮古島ではしばしばサツマイモの収穫を終えた畑に10羽ほどの集団で採餌することがある。
- 学術的意義・評価** : 宮古諸島と八重山諸島のみ分布している貴重な固有亜種である。生態も十分解明されていない。今後の詳細な調査研究が必要である。
- 生存に対する脅威** : 森林伐採や開発などによる生息環境破壊は脅威である。  
**特記事項** : 国指定天然記念物（1971年）。国内希少野生動植物種（1993年）。IUCNカテゴリー : Near Threatened (NT)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は種カラスバトの亜種ヨナグニカラスバトを選定している。
- 原記載** : Kuroda, 1923. Bull. Brit. Orn. Cl., 43: 107. (Yonakuni I., Ryukyus).  
**参考文献** : 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京, 137-138.  
 清棲幸保, 1978. 日本鳥類大図鑑 II (増改). 講談社, 東京, 485-488.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ヨナグニカラスバト. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 300-301.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 2005. ヨナグニカラスバト. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 58-59.  
 The Ornithological Society of Japan, 1974. Check List of Japanese Birds Fifth and Revised Edition. Gakken Co., Ltd., Tokyo.  
 山階鳥類研究所編, 1975. この鳥を守ろう. 霞会館, 東京, 160-170.  
 宇山 大樹, 2011. 野鳥の記録「与那国島」2002年3月-2007年1月の678日の観察記録 文一総合出版 223pp.  
 与那国町教育委員会 2012年 与那国島の自然と動植物. 374pp.  
 砂川栄喜, 2011. 宮古の野鳥—亜熱帯の水辺, 山野の鳥—ボーダイ Ink 238pp.
- 執筆者名** : 原戸鉄二郎
- 
- 和名** : コウノトリ  
**分類学名** : コウノトリ目 コウノトリ科  
*Ciconia boyciana* Swinhoe, 1873  
**英名** : White Stork  
**カテゴリー** : 絶滅危惧 I A 類 (CR)      **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧 I A 類 (CR)
- 形態** : 全長120cm。嘴と風切り羽、大雨覆が黒く、それ以外は白色。脚は赤い。  
**近似種との区別** : 大型のツル類やサギ類に似るが、飛行時首を伸ばして飛び、その飛行形が大きく、嘴の太さや風切と大雨覆が黒色であることで容易に区別できる。
- 分布の概要** : ロシア極東南部のウスリー地方やアムールから中国東北部で繁殖し、主に中国の揚子江の中流域や韓国、日本などで越冬する。江戸期には全国的に普通に留鳥として生息していたが、明治期以降の乱獲や農業等の影響により1971年に日本産コウノトリの野生個体は絶滅した。県内には大陸産コウノトリの野生個体が飛来し、沖縄諸島や宮古・八重山諸島で記録が見られる。通常は1個体の例が多いが、与那国島では1994年3月に11個体の越冬個体の飛来例が見られる（江崎・宮良, 1995）。
- 生態的特徴** : 3~4月に3~4個の卵を産む。約30日間抱卵する。ふ化後約2ヶ月で巣立つ。大木の枝上に枯れ枝を利用して大きな巣をつくる。
- 生息地の条件** : 採餌場所は川やその周辺の湿地、沼、池、水田等である。餌は魚類、両生、爬虫類、小型の哺乳類等の小動物である。
- 個体数の動向** : ごく稀な飛来種であるため、その個体数の動向に関することについては、情報が不足している。  
**現在の生息状況** : 沖縄を含め日本列島各地で見られる一部の個体は、中国大陸などからの野生個体である。



〈鳥類〉

- 学術的意義・評価 : 極東地域の個体数はきわめて少なく絶滅が心配されている。
- 生存に対する脅威 : 重要な生息地である湿地帯が人間の経済活動の拡大等によって減少してきている。また農薬や化学肥料等で餌となる水生小動物も少なくなっている。
- 特記事項 : 1971年に日本産野生コウノトリは野生絶滅したが、兵庫県豊岡市を中心に国内各地で保護増殖事業が進められている。特に豊岡市にある兵庫県立コウノトリの郷公園では、2005年から人工飼育個体が放鳥されている。2013年までに32羽が放鳥され、75羽が生息し野外で確認されている。2015年から2016年の冬期には県内で初めてコウノトリの郷公園で巣立った個体が飛来した。また、2015年12月に渡来した野生個体はそのまま越夏し、約1年3ヶ月沖縄島北部で滞在した。国指定特別天然記念物(1956年)。国内希少野生動植物種(1993年)。IUCN カテゴリー: Endangered (EN)。
- 原記載 : Swinhoe, 1873, Proc. Zool. Soc. London, 513. (Yokohama, Japan.)
- 参考文献 : 江崎保男・宮良全修, 1995. 与那国島におけるコウノトリ *Ciconia boyciana* の集団越冬. 山階鳥研報 27:92-97.
- 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.
- 環境省編, 2002. コウノトリ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 52.
- 小林桂助, 1983. 原色日本鳥類図鑑. 保育社, 大阪, 74.
- 日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録(改訂第5版). 学習研究社, 東京, 12.
- 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.
- 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.
- 大迫義人, 2014. コウノトリ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 37.
- 大迫義人, 2016. コウノトリの10羽の集団による長距離移動の例. 野生復帰 4:69-73.
- 沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. コウノトリ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 44-45.
- 沖縄県環境保健部自然保護課(編), 2005. コウノトリ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 295-296.
- 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.
- 高野伸二, 1982. 日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京, 211-212.
- 榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版, 647pp.
- 嵩原建二・平安山英義・大城亀信・細川太郎・新垣裕治, 2016. 名護市及び沖縄島における希少鳥類及び希少繁殖事例についての記録, 2014年春から2015年秋まで. 名桜大学紀要(21): 97-109

執筆者名 : 嵩原建二

- 和名 : オオヨシゴイ
- 分類 : ペリカン目 サギ科
- 学名 : *Ixobrychus eurhythmus* (Swinhoe, 1873)
- 英名 : Schrenck's Bittern
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)
- 形態 : 全長約 40 cm. 上面が暗栗色をした小型のサギ類。オス成鳥では上面は暗栗色で、雨覆は淡色を呈し、風切と尾羽は黒褐色。下面は黄白色で前頸に1本の暗色縦斑がある。メスは背と雨覆が暗栗色の地に白色小斑を散布し、前頸に数本の縦斑がある。
- 近似種との区別 : 近縁のリウキュウヨシゴイによく似ているが、上面の雨覆や風切が赤褐色である点で本種と異なる。
- 分布の概要 : 繁殖はサハリン、千島列島南部、北海道、本州中部、佐渡、隠岐、東シベリア(南部)、ロシア極東(南部)、朝鮮半島、中国等とされる。越冬分布は中国(南部及び台湾)、インドシナ半島、マレー半島、インドネシア、フィリピン。
- 生態的特徴 : 本土では夏鳥であるが、県内では春と秋に通過する数少ない旅鳥もしくは迷鳥。繁殖期は5~8月で、草原の地上に枯れた草本を集めて皿上の巣をつくる。1腹産卵数は3~5個。抱卵日数は16~18日。雌雄交代で抱卵育雛する。餌は小魚、甲殻類、等脚類、昆虫類、両生類などである。
- 生息地の条件 : 低地の湿原や河川沿いなどのヨシ原や湿地性の草原等に生息し、ヨシゴイよりも乾燥した草原を好むとされる。
- 現在の生息状況 : 県内では繁殖せず、上記の繁殖地から越冬地に向かう際、通過する数少ない旅鳥もしくは迷鳥である。県内における観察記録は沖縄島や座間味島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島、南大東島で記録が見られる。
- 学術的意義・評価 : 県内では数少ない渡り鳥であり、本種の渡りを考える上で重要である。
- 生存に対する脅威 : 通過時の生息地となる低地にある湿地の埋め立てが進み、また河川改修等でアシ原が減少している傾向がある。
- 特記事項 : 数少ない旅鳥としての渡来種であるが、数が少なく、中継地としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリーに準拠した。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 原記載 : *Ixobrychus eurhythmus* (Swinhoe, 1873)
- 参考文献 : 平岡 孝, 2014. オオヨシゴイ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2

鳥類. 自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 34-35.  
 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
 高原建二・砂川栄喜・大城亀信・柳沢紀夫・天野洋佑・土方秀行, 2003. 沖縄県内における最近の希少な鳥類の渡来記録について. 南島文化 (25) : 33-46.  
 砂川栄喜, 2011. 沖縄宮古の野鳥, 亜熱帯の水辺. ボーダーインク. 那覇. 238pp.

執筆者名 : 高原建二

和名 : ヤンバルクイナ  
 学名 : ツル目 クイナ科  
 英名 : *Gallirallus okinawae* (Yamashina & Mano, 1981)  
 方言名 : Okinawa Rail  
 名 : アガチー, ヤマドゥイ, シジヤドゥイ  
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR)                      環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 全長約 35 cm, 体重約 450 g. 嘴は太く赤い色で先端は白っぽい。黒い顔に赤い目の後方からのびる白帯斑が目立つ。翼は丸くて短く胸筋も発達していないため、飛翔力はほとんどない。脚は太めで赤く、地上をすばやく走ることができる。頭部から背上面は暗オリーブ褐色で、胸から腹にかけて黒と白の細い横縞がある。雌雄ともに同色である。雄の全頭長が雌より大きく、約 89 mm を基準に、ほぼ確実な雌雄判別ができる。

近似種との区別 : 腹に縞模様を持つオオクイナは石垣島、西表島、竹富島、小浜島、黒島、宮古島に留鳥として分布。沖縄島の記録もあるが迷鳥。やんばる地域ではシロハラクイナが水辺を中心に分布しているが、形態や鳴き声が違う。喜如嘉などの水田に生息するバンを一般の人がヤンバルクイナと間違えて報告する場合がある。ヒクイナは小型で全体に赤みを帯びている。

分布の概要 : 沖縄島北部やんばる地域 (国頭村、大宜味村、東村) のみに分布し、留鳥である。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種はフィリピン・セレベス・ニューギニアなどに分布するムナオビクイナ *G. torquatus* の近似種と考えられているが、本種は嘴と脚が赤色でやや大きく、翼と尾が比例して短いことや最外側の初列風切羽 (第 10 羽) が最短であることが異なるとされる。分子系統学的解析においても、本種とムナオビクイナが近縁であることが示されている (Kirchiman, 2012)。

生態的特徴 : 巣はシダや灌木、草本などの生い茂った地上に枯れ葉などで粗末な浅い皿状の巣をつくる。卵数は 3 から 5 卵。卵の長径は約 50 mm、短径約 35 mm。全身黒色の初毛につつまれた雛は、孵化するとまもなく巣をはなれ、自力で餌をとることもあるが両親からの給餌を受ける。音に敏感で、何かを察知すると近くの森林内へ親子ともども逃げ込む。テリトリー宣言と思われる声は「キョキョキョキョー」とけたたましく 500 m 離れていても聞こえる。ペアでのデュエットの場合は 20 秒以上も鳴き続ける。「クリリーヤ」と聞こえる声は、つがい相手への呼びかけなどに使われている (池長・儀間, 1993)。地上性だが夜間は樹上でねぐらをとるがこの習性は八重山に生息するオオクイナでもみられ、ヘビ類の捕食をさける効果があると考えられる (Harato & Ozaki, 1993)。七里ら (2016) による、交通事故等により死亡した個体の胃内容分析では、カタツムリ類、ミミズ類、ダニ類、ムカデ類、ヤスデ類、昆虫類、植物種子・果実など、地上付近に見られる様々な種群がヤンバルクイナの餌として利用されており、ヤマモモ、ハウロクイチゴ、アカメガシワ等のいくつかの植物については、本種が種子散布に寄与している可能性が示唆されている。自動撮影カメラを用いた調査では、全長の 2 倍近い長さのリュウキュウアオヘビを捕食した事例が報告されている (小高・大城, 2016)。

生息地の条件 : 常緑広葉樹林やその周辺の草原を主要な生息地とするが、リュウキュウマツ林や、採草地などの人為的に手が増えられた環境や海岸付近の集落周辺でも観察される。近年は道路上にも頻繁に出現し、側溝にたまった腐葉土の中や路上のミミズ類等を採餌し、道路沿いの樹木でねぐらをとる様子が観察されている。侵略的な外来種であるフィリマングース (以下マングース) の高密度地域には分布しない。マングースをはじめ、ネコやイヌなど、従来沖縄島に生息しなかった外来捕食者による捕食圧のかからない環境が生息地の条件として重要である。

個体数の動向 : 1985 年から 1986 年に行われた環境庁の調査報告では、大宜味村の塩屋湾から東村の平良以北に生息しており、約 1,800 羽と推定された (花輪・森下, 1986)。しかし、1995 年頃より大宜味村で減少、2000 年より東村での減少が確認されるようになった。2000 年から 2001 年に行われた調査では、15 年間に南限と考えられるラインが約 10km 北上し、生息域の面積は約 25% 減少したと推定されることが報告された (尾崎ら, 2002)。2000 年当初に行われた沖縄北部ダム事務所による捕獲調査では、大保川流域において多数のマングースの生息が確認された。この生息域の北への押し上げは、やんばる地域へのマングースの生息域拡大と一致していた。2005 年の調査では、これまでで最も少ない約 720 羽と推定され、その後、推定生息数は 1,000 羽前後で推移していたが、2014 年時点では約 1,500 羽と推定されている (環境省ウフギー自然館ホームページ [http://www.ufugi-yambaru.com/torikumi/kish-you\\_kuina.html](http://www.ufugi-yambaru.com/torikumi/kish-you_kuina.html) [2017 年 3 月閲覧])。推定生息数の増加傾向は、やんばる地域におけるマングースの減少傾向と対応しており、沖縄県や環境省によるマングース対策事業の効果と考えられる。2004 年に種の保存法に基づく保護増殖事業計画 (文部科学省、農林水産省、国土交通省、環境省) が策定され、2009 年より飼育繁殖技術確立のために飼育下繁殖が開始された。2015 年 2 月時点の飼育個体数は 68 羽である。

〈鳥類〉

- 学術的意義・評価** : 新種として1981年に山階鳥類研究所報に記載された。ほぼ無飛力と考えられ無飛翔性のクイナ類としては最北に分布するとされる。世界のクイナ類の動物地理学や無飛翔性の進化の観点から、本種は学術的に重要な種である。沖縄県や環境省の実施するマングース対策(専従作業員による捕獲、北上防止柵の設置、マングース探索犬の導入など)や、地元自治体やNPOによるネコの適正飼養条例をはじめとする本種の保全についての取り組みは、沖縄島のような大きな島嶼における無飛翔性鳥類の保護及び生息する生態系の保全についての先進事例であり、保全生態学的意義も極めて高い。日本固有種。
- 生存に対する脅威** : 捕食者となるマングースの分布拡大は、ネコ、イヌなどによる食害とともに、本種の存続を直接脅かす原因であり、本種の保護上極めて重大な問題である。これまでに本種の生息地では林道建設や森林伐採・農用地の拡大・ダム建設等により生息地が減少、分断化されてきた。常緑広葉樹林の分断化は本種の分布回復の障害となると考えられる。在来種であるがハシブトガラスによる捕食の増加も指摘されている。ハシブトガラスは、家庭ごみや畜産廃棄物などの人間の活動に由来する餌に依存して個体数を増やすことがあるため、本種の増加の人為的要因を抑制する必要がある。ネコに関してはヤンバルクイナたちを守る獣医師の会が中心となり、国頭村、東村、大宜味村で飼い猫へのマイクロチップの埋め込みなどを行っている。また5月にはネコなどのペットを捨てないキャンペーンも行われている。交通事故や雛の側溝への転落も毎年のように起こっており、国頭村の安田にヤンバルクイナ救急救命センターが2005年3月に設立され、NPO法人どうぶつたちの病院による運営が開始された。
- 鳥類のうちでクイナ科の鳥は最も絶滅しやすいとされる。さらに17世紀以降絶滅した18種及び亜種のクイナは無飛翔力で島嶼性であった点を考慮すれば、分布域や個体数が限られ、地上性の本種は環境変化や人為的に移入された捕食者の出現に対する耐性は、きわめて弱いと考えられる(黒田ら, 1984)。特に外来動物であるマングース、ネコ、イヌに関しての対応は緊急に行わなければ、近いうちに絶滅する可能性がある。このほかに、近年やんばる地域への侵入が危惧されている外来種タイワンスジオも、本種の生存に対する脅威となることが指摘されている。
- 本種の保全のための緊急の課題であるマングース北上防止柵の北側からのマングースの根絶状態の実現とともに、中長期的な課題として、沖縄島全域からのマングースの排除が望まれる。
- 特記事項** : 国指定天然記念物(1982年)。国内希少野生動植物種(1993年)。
- 原記載** : IUCN カテゴリー: Endangered (EN) \* \*IUCNは *Hypotaenidia* 属として分類。  
Yamashina Y. and T. Mano, 1981. A New Species of Rail from Okinawa Island. J. Yamashina Inst. Ornith., 13(3): 1-6.
- 参考文献** : 阿部慎太郎, 1994. 沖縄島の移入マングースの現状, チリモス, 5(1): 34-43.  
Allen, D., Oliveros, C., Espanola, C., Broad, G. and Gonzalez, J. C. T., 2004. A new species of Gallirallus from Calayan Island, Philippines. Jour. of Asian Ornith., 20: 1-7.  
千木良芳範・池原貞雄・高原建二, 1993. ヤンバルクイナ *Rallus okinawae* の繁殖に関する若干の知見. 文化課紀要第9号, 沖縄県教育庁文化課, 那覇.  
Diamond, J., 1991. A new species of rail from Solomon Island and convergent evolution of insular flightlessness. Auk, 108: 461-470.  
Harato, T. & Ozaki, K., 1993. Roosting Behavior of the Okinawa Rail. Journal of Yamashina Institute for Ornithology, 25: 40-53.  
池原貞雄, 1991. 沖縄島における外来哺乳類・鳥類の分布状況. “南西諸島の野生生物に及ぼす移入動物の影響調査”, WWFJ, 31-41.  
池長裕史, 1983. 日没時におけるヤンバルクイナの水場への出現とその際の若干の行動観察. Strix, 2: 1-11.  
池長裕史・儀間朝治, 1993. ヤンバルクイナの鳴き声とデュエットについて. 山階鳥研報, 25: 28-39.  
花輪伸一・森下英美子, 1986. ヤンバルクイナの分布域と個体数の推定について. “昭和60年度環境庁特殊鳥類調査”, 環境庁, 東京, 43-61.  
黒田長久・真野 徹・尾崎清明, 1984. クイナ科の保護についてーヤンバルクイナの発見に因んでー. “山階鳥研報鳥類研究所50年のあゆみ”, 36-57.  
東京動物園協会, 1989. 世界の動物, 分類と飼育「ツル目」ミフウズラ・ツル・クイナ・ノガン. どうぶつ社, 178pp.  
環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー脊椎動物編, 自然環境研究センター, 東京.  
環境省編, 2002. ヤンバルクイナ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー2鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 106-107.  
河内紀浩・佐々木健志, 2002. 沖縄島北部森林地域における移入食肉目(ジャワマングース, ノイヌ, ノネコ)の分布及び食性について. 沖縄生物学会誌, 40: 41-50.  
Kirchman J. J., 2012. Speciation of flightless Rails on Islands: A DNA-Based Phylogeny of the Typical Rails of the Pacific. Auk 129(1):56-69.  
小高信彦・久高将和・高原建二・佐藤大樹, 2009. 沖縄島北部やんばる地域における森林性動物の地上利用パターンとジャワマングース *Herpestes javanicus* の侵入に対する脆弱性について. 日本鳥学会誌, 58(1): 28-45.  
小高信彦・大城勝吉, 2016. 絶滅危惧種ヤンバルクイナによるリュウキュウアオヘビの捕食. 九州森林研究, 69: 125-126.  
小高信彦・澤志泰正, 2004. ヤンバルクイナのロードキル. 山階鳥研報, 35: 134-143.  
Kuroda, N., 1993. Morpho-anatomy of the Okinawa Rail. Journal of Yamashina Institute for Ornithology, 25: 12-27.  
真野 徹・尾崎清明・伊澤雅子・小高信彦・ウェニンガー. P・山岸 哲, 2005. 特集I「ヤンバルクイナに明日はあるか」(発見から命名まで, 分布域と個体数の減少, ノネコマングースによる捕食, 交通事故死, グラムクイナの保護20年, 本種を守るために). 生物の科学 遺産, vol. 59,

- 2, 23-54.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本獣医師会・三学会・沖縄県獣医師会, 2002. ペットの野生化防止と絶滅危惧種の保護. 移入動物問題を考える公開合同シンポジウム, 17pp.  
 日本野鳥の会やんばる支部, 1997. 沖縄島における貴重動物と移入動物の生息状況及び移入動物への影響, 86pp.  
 小倉剛ら, 2002. 沖縄島北部に生息するジャワマングースの食性と在来種への影響. 哺乳類科学, 41: 53-62.  
 沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. ヤンバルクイナ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 298-299.  
 尾崎清明, 2010. ヤンバルクイナの保全生物学的研究. 東邦大学大学院理学研究科博士学位論文, 92pp  
 尾崎清明, 2014. ヤンバルクイナ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 44-45.  
 尾崎清明・馬場孝雄・米田重玄・金城道男・渡久地豊・原戸鉄二郎, 2002. ヤンバルクイナの生息域の減少. 山階鳥研報, 34: 136-144.  
 七里浩志・小高信彦・中田勝士・長嶺隆・中谷裕美子・大沼学・澤志泰正・三宅雄, 2016. ヤンバルクイナの胃内容物. 九州森林研究, 69: 59-64.  
 山階鳥研報鳥類研究所, 1995. ヤンバルクイナシンポジウム—研究・保護の現状と将来の展望—山階鳥類研究所, 48pp.  
 山階鳥研報鳥類研究所, 1999. ヤンバルクイナの放鳥及び追跡調査事業. 沖縄県自然保護課, 76pp.

執筆者名 : 原戸鉄二郎・小高信彦

和名 : **ヘラシギ**  
 分類 : チドリ目 シギ科  
 学名 : *Eurynorhynchus pygmeus* (Linnaeus, 1758)  
 英名 : Spoon-billed Sandpiper  
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 全長 14~16 cm. 小型のシギ類で、トウネンとはほぼ同じ大きさ。嘴は黒く、ヘラ状となっている。繁殖羽は頭部から胸は赤褐色で、胸には黒褐色の縦斑がある。非繁殖羽は頭部から上面が一樣に灰褐色で、喉から下面は白色。

近似種との区別 : トウネンやミュビシギは大きさが似るが、本種は嘴がヘラ状であることで、他種とは明確に区別できる。

分布の概要 : 日本には秋春の渡り期に通過する旅鳥である。繁殖地はチュコト半島南部やカムチャツカ半島北部など極東ロシアで、インド東南部・スリランカからバングラデシュ、中国南部、インドシナ半島など東南アジアで越冬する。

生態的特徴 : 秋春の渡り期に河口ちかくの砂質の干潟、砂浜海岸、埋め立て地の水溜まりなど、少し水につかる場所で嘴を水につけて左右に動かし、昆虫類や甲殻類、植物種子などを食べる。

生息地の条件 : 砂質の広い干潟、砂浜海岸など。

現在の生息状況 : 県内では秋春の渡り期に通過する数少ない旅鳥であるが、越冬例も知られている。最近沖縄島では泡瀬海岸や糸満市の海岸などで確認例が見られる。

生存に対する脅威 : 通過移動中の休息地や餌場となる河口干潟や砂浜海岸の埋め立てによる減少傾向で、渡りを行うエネルギー供給に影響が出ることが予想される。

特記事項 : 数少ない旅鳥や冬鳥としての渡来種であるが、数が少なく、中継地や越冬地としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリに準拠した。IUCN カテゴリ : Critically Endangered (CR)。

参考文献 : 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
 藤井 幹, 2014. ヘラシギ. レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 榛葉忠雄 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.

執筆者名 : 高原建二

和名 : **カンムリワシ**  
 分類 : タカ目 タカ科  
 学名 : *Spilornis cheela perplexus* Swann, 1922  
 方言名 : マヤダン  
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態 : 全長 50~54 cm、自然翼長 33~38 cm。翼や尾羽の幅は広い。成鳥は背面が黒褐色、腹面は茶褐色から灰褐色で白い斑が多い。頭部は黒色で不規則に小白斑があり、後頭は冠羽状になるが普段は目立たない。目先と目の外縁の裸皮は黄色、嘴は青灰色、脚は黄色である。虹彩は主に黄色、まれに暗

〈鳥類〉

褐色の個体もいる。幼鳥の背面は白色に暗褐色の斑があり、腹面は白色である。

- 近似種との区別 : よく似た環境に旅鳥もしくは冬鳥として飛来するサシバは明確に小さい。
- 分布の概要 : 西表島と石垣島で周年生息し、繁殖が確認されている。多良間島海上、竹富島、小浜島、与那国島からも観察事例があるが、幼鳥や若鳥に多い傾向がある。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 種カンムリワシは、インド、スリランカ、中国南部、台湾、マレー半島、フィリピン、スンダ、スラウェシなど東南アジア一帯に広く分布する。島嶼に生息する亜種は比較的体サイズが小さく、八重山諸島に生息する本亜種は、台湾に生息する *S. c. hoya* や中国南部に生息する *S. c. ricketii* よりも小さい。本亜種を別種 *S. perplexus* とみなす見解もある。
- 生態的特徴 : 繁殖生態に関する報告は少ないが、3月下旬から4月上旬に産卵し、7月中旬以降に雛が巣立つ。雌は抱卵や育雛初期の付添を、雄は餌の運搬をそれぞれ担う。待ち型の採餌を行ない、カエル類、ヘビ類、トカゲ類などの両生類や爬虫類、カニ類などの甲殻類、ミミズ類、鳥類、ネズミ類、昆虫類、および魚類など多様な餌生物を利用する。
- 生息地の条件 : 低地では、山地と接する水田、牧場、牧草地などの開けた湿地・草地環境を採餌場として好む。特に、1~3月の非繁殖期の微風かつ潤湿、温暖な日の早朝に出現個体数は多い。一方で開けた湿地・草地環境を伴わない山地内でも飛翔や鳴き声も確認されるほか、海岸や干潟、マングローブ林で採餌することもある。林内だけでなく林縁部でも営巣することがあり、リュウキュウマツやイタジイなどの幹に厚く絡んだツル植物の上に皿型の巣を形成する。
- 現在の生息状況 : 生息数は石垣島と西表島で200羽以上と推定されているが、正確な評価はなされていない。以降、両島の低地において、個体数の増減傾向を把握するために、1~2月にルートセンサスが毎年継続されており、西表島では42~70個体、石垣島では24~52個体がそれぞれ記録された。また山間部でも観察されるが、生息状況は全く分かっていない。
- 学術的意義・評価 : 熱帯性のカンムリワシの分布において、中国や台湾とならび八重山諸島は北限にあたる。また本亜種は体サイズが小さく、カンムリワシの亜熱帯島嶼生態系への適応を理解する上で、貴重な位置にある。
- 生存に対する脅威 : カンムリワシが採餌場として利用する山林に接した水田、牧場、牧草地等の開放的な湿地・草地環境は、今後の農業人口や農法の変化に伴って、量的・質的に変化し、個体数に影響を及ぼす可能性がある。また国立公園等に指定されていない山林の開発は、生息・営巣環境の消失や分断を引き起こす。さらに、特定外来生物に指定されるオオヒキガエルやシロアゴガエルのほか、インドクジャクやコウライキジなどの移入種が、石垣島では定着しており、カンムリワシを含めた生態系に与える影響が懸念される。カンムリワシは、車道に沿った電柱や電線を止まり木として利用し、路上に出現する生物やその磔死体を捕食することがあり、交通事故により負傷や死亡するケースも後を絶たない。
- 特記事項 : 日本固有亜種、八重山民謡「鷲の鳥節」に歌われるなど、地域文化においても象徴的な動物である。国指定特別天然記念物(1977年)、国内希少野生動植物種(1993年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種カンムリワシを選定している。
- 原記載 : Swann, 1922. Synop. Accipitres. 135. (Iriomote I., Ryukyus.)
- 参考文献 : Ferguson-Lees, J. & Christie, D. A., 2001. Raptors of the World. Christopher Helm, London.  
原戸鉄二郎, 1987. 西表島におけるカンムリワシの食性と巣立ち雛の行動. 沖縄島嶼研究, 5: 49-58.  
環境省, 2016. 平成27年度石垣島におけるカンムリワシ生息状況等調査報告書.  
金井 裕, 2014. CR (絶滅危惧 I A 類) カンムリワシ. レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 2 鳥類, ぎょうせい, 東京, 42-43.  
環境省那覇自然環境事務所・東海大学沖縄地域研究センター, 2015. 平成26年度西表島におけるカンムリワシの生息状況等調査報告書.  
環境省那覇自然環境事務所・東海大学沖縄地域研究センター, 2016. 平成27年度西表島におけるカンムリワシの生息状況等調査報告書.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
佐野清貴, 2003. 石垣島におけるカンムリワシの繁殖生態. Strix, 21: 141-150.  
佐野清貴, 2012. カンムリワシ. Bird Research News, 9 (2), S4-S5.  
時田喜子・吉野智夫・大沼 学・金城輝雄・浅川満彦, 2014. 八重山諸島におけるカンムリワシの胃内容物. Bird Research, 10: S13-S18.  
Ueta, M & Minton, S. J., 1996. Habitat preference of Crested Serpent Eagles in southern Japan. J. Raptor Research, 30 (2): 99-100.

執筆者名 : 河野裕美・水谷 晃

- 和名 : **ダイトウコノハズク**
- 分類 : フクロウ目 フクロウ科
- 学名 : *Otus elegans interpositus* Kuroda, 1923
- 英名 : Daito Scops Owl
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)                      環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態 : 上面褐色で不明瞭な黒色や褐色がかつたまだら模様がある。耳羽は小さく虹彩は黄色である。
- 近似種との区別 : コノハズクはダイトウコノハズクより小型である。コノハズクの鳴き声は「ブッ・キョッ・キョー」と聞こえるのに対し、ダイトウコノハズクは「コッ・ポロ」と聞こえ、明瞭に異なることから野外での雄の識別は鳴いている場合は容易である。羽色に基づいた識別は難しいが、ダイトウコノハズクの羽衣の模様はコノハズクに比して大きく粗く見える。オオコノハズクは大きく虹彩の色がオレ

ンジ色で、黄色のダイトウコノハズクとは明らかに異なる。

**分布の概要：** 現在は南大東島にのみ生息する。

**近縁な種及び群との分布状況の比較：** 琉球列島全般に広く分布する亜種リュウキュウコノハズクと比較すると、生息面積が限定されているため個体数は相対的に少ない。

**生態的特徴：** モクマオウが大規模に植栽されている南大東島では、その樹洞を主な営巣場所としている。モクマオウが植栽される前は、ダイトウビロウが折れ内部が腐食した筒状の立ち枯れ木に営巣していたと思われる。現在でもそのような巣が確認される。また現在では巣箱での営巣が多くなり、南大東島のダイトウコノハズク個体群を維持しているのは巣箱営巣個体といえる状況になっている。3月中旬に最も早いつがいが産卵を開始する。最も遅い雛の巣立ちは7月下旬である。年一回繁殖で、卵や雛が捕食に遭遇した後に再営巣することはなく、成功後に二回目の繁殖をすることもない。成鳥の胃の内容物には、バッタ類が多く含まれる。巣内の幼鳥に運ばれる餌は、主にワモンゴキブリとアシダカグモで、成長した雛にはホオグロヤモリやオガサワラヤモリ、ムカデ類、ヒヨドリも与えられる。一腹卵数は2卵が最も多い。平均巣立ち雛数は約1.5個体で年変動が認められる。

**生息地の条件：** 成鳥が入り出し、抱卵と育雛をすることができる程度の樹洞（深さ30cm、直径20cm程度以上）を持つ樹林地が主に選好される。小中学校の体育館の排気ダクトや門柱に営巣した記録もある。

**現在の生息状況：** 生息可能全域に生息している。南大東島の北部および外周部の樹林地帯の密度は低く、南部および島の内側の樹林地帯では密度が相対的に密度は高い。

**学術的意義・評価：** 南大東島の面積は約30km<sup>2</sup>と小さく、最も近い同種の生息地である沖縄島もしくは徳之島とも約350km隔離されている。南大東島では約120年前の開拓により、在来の樹林地は皆伐に近い状態になった歴史を持つ。その過程で亜種ダイトウコノハズク個体群は個体数を激減させたと推察される。つまり遺伝的なボトルネックを経験した個体群と言える。遺伝的多様性に乏しい隔離個体群の存続メカニズムの解明は、個体数を減少させた他種の個体群の回復や存続を図る上でも貴重な資料となり、学術的に貴重な個体群と言える。

**生存に対する脅威：** 最大の懸案は、ネコとイタチによる巣内の卵と雛の捕食である。また、農地の改変に伴い、農地周辺の樹林地が徐々に侵食され面積が少なくなっている。また樹林地の縁にあるマント群落が刈られることにより樹林地が乾燥化し荒廃が進んでいる。農薬の散布量による昆虫類の減少や食物連鎖を介した生物濃縮の影響も考えられる。さらに人為的に移入されたタイワンカブトムシが、ダイトウコノハズクの潜在的営巣樹種である在来樹種ダイトウビロウの枯死を急増させている。樹林地が保護されなければ、本亜種の絶滅は必至である。開拓前は島全体がダイトウビロウで覆われた森林であったことを考えると、現在のダイトウコノハズクが利用可能な樹林地は極めて狭い。

**特記事項：** 北大東島における住民の聞き取り調査では1970年代にはすでに鳴き声の確認がなく、2001年から2016年まで確認できていない（高木他 未発表資料）。北大東島では絶滅したと考えられる。北大東島のダイトウコノハズクにとっての餌環境が南大東島と同様に十分良いことから、北大東島での絶滅因は、営巣場所の不足による個体数の減少と推察される。個体数の減少が、絶滅の渦を引き起こすきっかけとなったであろう。南大東島では2011年から巣箱を用いることで個体群の安定化が進んでいる。しかし、南大東島においては台風により主要な営巣樹であるモクマオウが倒木し、個体群の存続が危ぶまれる事態が生じた経緯を持っている。北大東島でも環境省の事業により、巣箱が設置された。南大東島個体群に対する甚大なダメージに対する対応策として、営巣環境が整った北大東島へのダイトウコノハズクの再導入が早急に望まれる。

IUCN カテゴリー：Near Threatened (NT)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は種リュウキュウコノハズクの亜種ダイトウコノハズクを選定している。

**原記載：** Kuroda, 1923. Bull. B. O. C., 43: 122. (Minami-daitojima, Daito Is.).

**参考文献：** 姉崎 悟・高原建二・松井 晋・高木昌興, 2003. 大東諸島産鳥類目録. 沖縄県立博物館紀要(29):25-54.

環境省, 2014. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, 東京.

沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. ダイトウコノハズク. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 301-302.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

高木昌興・赤谷加奈・松井 晋, 2005. 南大東島に隔離分布するダイトウコノハズク個体群の保全に関する研究. プロ・ナトゥーラ・ファンズ第14期助成成果報告書: 3-10. 日本自然保護協会. 東京.

高木昌興, 2007. 島々に生きるリュウキュウコノハズク. “フクロウ-その生態と行動の神秘を解き明かす”, 文一総合出版. 東京.

高木昌興・赤谷加奈・松井 晋, 2008. 南大東島に隔離分布するダイトウコノハズクの鳴き声を用いた個体識別となわばり個体の入れ替わり. プロ・ナトゥーラ・ファンズ第16期助成成果報告書, 日本自然保護協会, 東京, 161-169.

Takagi M, Akatani K, Saito A & Matsui S, 2007. Drastic decline of territorial male Daito Scops Owls on Minami-daito Island in 2006. *Ornithological Science* 6: 39-42.

Takagi M & Akatani K, 2011. The diet of Ryukyu Scops Owl *Otus elegans interpositus* owlets on Minami-daito Island. *Ornithological Science* 10: 151-156.

Takagi M., 2011. Vicariance and dispersal influenced the differentiation of vocalization in the Ryukyu Scops Owl. *Ibis* 153: 779-788.

Akatani K, Matsuo T & Takagi M, 2011. Breeding ecology and habitat use of the Daito Scops Owl (*Otus elegans interpositus*) on an oceanic island. *Journal of Raptor Research* 45: 315-323.

Takagi M, 2013. A typological analysis of hoots of the Ryukyu Scops Owl *Otus elegans* across island populations in the Ryukyu Archipelago and the two oceanic islands. *Wilson Journal of Ornithology* 125: 358-369.

執筆者名：高木昌興

和名：ノグチゲラ  
 分類：キツツキ目 キツツキ科  
 学名：*Sapheopipo noguchii* (Seebohm, 1887)  
 英名：Pryer's Woodpecker, Okinawa Woodpecker  
 カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態：全長約 30 cm、翼長約 15 cm、体重約 140 g。全体に茶褐色で、翼に白斑がある。下腹部は赤色味を帯びる。頭頂の羽毛は雄が赤色、雌が黒褐色で、幼鳥は雌雄ともに赤色である。

近似種との区別：沖縄島に生息するキツツキ類は本種と小型のリウキュウコゲラ（コゲラの沖縄県固有亜種）のみであり、識別は難しくない。

分布の概要：沖縄島北部に唯一の個体群が分布する、沖縄島の固有種である。主に大宜味村の塩屋湾（S）及び東村の平良（T）を結ぶ、S-T ライン以北の常緑広葉樹林を中心に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：本種は 1 属 1 種のノグチゲラ *Sapheopipo* 属と分類されているが、羽衣の模様や胴体部の解剖学的な特徴はアカゲラ *Dendrocopos* 属のキツツキと類似し、分子系統学的解析の結果から、アカゲラやオオアカゲラに近縁であることが指摘されている。アカゲラやオオアカゲラはヨーロッパから東アジアまで広く分布する広域分布種であるが、ノグチゲラの分布は沖縄島北部に限定され、本種は現生のキツツキ種の中で最も分布域の狭い種の 1 つである。

生態的特徴：留鳥。産卵期は 3 月から 5 月で、産卵数は、普通 2-5 個、最大 7 個（小高ほか 未発表資料）。産卵から孵化まで約 2 週間、孵化から巣立ちまで約 4 週間。雌雄ともに抱卵、給餌を行うが、夜間の抱卵や抱雛は雄が行う。巣立ち雛数は 2 羽が多く、最大 4 羽。一夫一妻制で年 1 回繁殖を行い、雌雄ともに 1 歳から繁殖可能である。11 年間つがい関係を維持したペアが観察されている。野外での寿命が 13 歳以上の個体が確認されている。雑食性で、枯れ木や倒木などをつつき中にあるカミキリムシの幼虫などの木材穿孔性の昆虫類を採餌するいっぽう、地上や木の幹の表面からバッタ類やコオロギ類などの直翅目の昆虫、ゴキブリ類、ムカデ類なども採餌する。さらにセミの終齢幼虫や地中性のクモなど、土壌中に生息する各種の節足動物を餌として利用する。地中性の節足動物（セミの幼虫やキムラグモの仲間）を、土を掘って採餌する行動は、主に雄に見られる。巣内雛への給餌内容には明瞭な性差がみられ、雄は地中性の餌を、雌は樹上で捕まえたものを主要な餌として雛に与える。タブノキ、ヤマモモ、イチゴ類、イチジク類、アカメガシワ、ハゼノキ、イタジイ（スダジイ）やマテバシイ、さらにタンカン等の柑橘類など、一年を通じて様々な植物の実を餌として利用する。ウヅルカンダの花蜜も餌とすることが報告されている（小林ら、2014）。

生息地の条件：主な生息地は、イタジイの優占する常緑広葉樹林の老齢林である。胸高直径約 20 cm 以上の心材が腐朽した大径木や立枯れ木などに営巣する。老齢林ではイタジイやタブノキなどに、若齢二次林ではセンダンやリュウキュウマツ、ハンノキなどが営巣木として利用される。主要な餌となるカミキリムシなどの木材穿孔性昆虫の幼虫などが多く生息する枯死木や倒木が多く、また、土壌動物相の豊かな湿潤な森林が重要である。老齢林を維持育成するとともに、地上での安全な採餌環境を維持するためファイリマングース（以下マングース）やノネコによる捕食圧の抑制が重要である。

現在の生息状況：明治以前は沖縄島中部の恩納岳まで生息していたとされるが、第二次大戦以降大きく分布域が縮小し、現在、沖縄島北部の老齢な常緑広葉樹林を中心に生息する。繁殖地の分布南限は福地川流域とされていたが、2015 年、名護市源河川流域の森林で 1 例の営巣が確認された（渡久地、2015）。営巣密度は、国頭村北部の西銘岳鳥獣保護区の老齢林では約 6.7 巣/100 ha、大宜味村大保川流域の約 50 年生の二次林では約 1.3 巣/100ha と、老齢林で営巣密度が高い。1990 年前後に行われたプレイバック法に基づく繁殖分布調査や営巣密度調査から、200 つがい未満の営巣数と、最大 500 羽程度の生息個体がいる可能性が示唆されている。近年、主要な生息地周辺の二次林への分布拡大がみられる。マツノザイセンチュウ病被害を受けたリュウキュウマツの混交する二次林や、2010 年に初めて沖縄県で確認されたタイワンハムシの大発生以降に生じたハンノキの立枯れ木を利用した営巣例が確認されている。特に 2012 年以降、ハンノキ枯れ木が人里近くの二次林における主要な営巣木として利用されている。

学術的意義・評価：沖縄島北部の特定地域のみ分布する極めて貴重な沖縄県の固有種である。巣内雛への給餌内容に見られる雌雄差、すなわち雄が地上、雌が樹上を主要な餌場とする雌雄の採餌場所の相違は他のキツツキ類からは報告されておらず、従来食肉目哺乳類の生息しなかった島環境で独自に進化した可能性が指摘されている。島嶼における生物進化やその個体群の維持機構を理解する上で重要な種である。

生存に対する脅威：第二次大戦以降、特に昭和時代の農地開発、ダム開発、木材生産、林道開設、ゴルフ場開発等を目的とした大規模な森林伐採により生息域が減少した。近年、木材生産のための伐採面積が減少し、二次林の森林蓄積の増加がみられるが、平成以降も、ダム開発、米軍北部訓練場内のヘリパッド建設等の開発が行われている。近年は、人里近くの道路沿いなどでも営巣が確認されるようになり、観察や撮影マナーが問題となっている。また、本種による果樹の採食が報告されており、特に台風被害の大きい年に被害の報告が多くなる傾向が指摘されており、有効な対策が必要である。1990 年代以降、ノグチゲラの主要な生息地へのマングースの侵入が確認されるようになったが、沖縄県と環境省によるマングースの対策事業が行われ、マングースの捕獲個体数が最大だった 2007 年ころと

比較して、マングースの捕獲個体数は減少し分布域は縮小している。しかし、本種の主要生息地からのマングース根絶のめどは立っておらず、今後のさらなる対策が求められる。近年沖縄島で個体数の増加傾向が指摘されているハシブトガラスによる本種の巣内雛の捕食や巣立ち雛を襲う様子が頻りに観察されている。ハシブトガラスの餌となるゴミなどの適正な管理を視野に入れた個体数管理が必要である。これまでにネコの糞やマングースの消化管からノグチゲラの爪や羽毛などが確認されている。本種は地上に降りて地面や地中にある生物を餌として多く利用している。本種の生息する地域には従来捕食性のほ乳類が生息しなかったことから、これらの行動が進化したと考えられる。このため、本種の保全を行う上で、地上における安全な採餌環境を維持するために、マングースやノネコ対策が重要である。

**特記事項：** 沖縄県の県鳥。東村の村鳥。沖縄県および環境省によるマングースを中心とした外来種対策事業が実施され、国頭村、大宜味村、東村では、ネコの適正使用のための条例が、東村では2010年、営巣地への立ち入り制限を盛り込んだ「ノグチゲラ保護条例」が施行された。2016年9月沖縄島北部地域がやんばる国立公園として指定された。国指定特別天然記念物（1977年）。国内希少野生動物種（1993年）。IUCN カテゴリー：Critically Endangered (CR)\* \*IUCNは *Dendrocopos* 属として分類。

**原記載：** Seebohm, 1887. Ibis: 178, pl. 7. ("Loo-choo Islands" = Okinawa).  
**参考文献：** 安座間安史・石田 健, 1997. ノグチゲラとやんばるの森. BIRDER, 125(1997-6): 32-36.  
 安座間安史・島袋徳正, 1984. ノグチゲラの育雛活動について. 沖縄生物学会誌, 79-90.  
 BirdLife International, 2000. The Threatened Birds of the World. Lynx, Barcelona, 852pp.  
 Fuchs J., Pons J-M, 2015. A new classification of the Pied Woodpeckers assemblage (Dendropicini, Picidae) based on a comprehensive multi-locus phylogeny. Molecular Phylogenetics and Evolution, 88:28-37.  
 Goodge W. R., 1972. Anatomical evidence for phylogenetic relationships among woodpeckers. Auk, 89: 65-85.  
 Goodwin D., 1968. Notes on woodpeckers (Picidae). Bulletin of the British Museum (Natural History). Zoology, 17:1-44.  
 Hargitt E., 1890. Catalogue of the Birds in the British Museum. XVII.  
 辺士名高校生物クラブ, 1991. 辺士名高校校区内（塩屋、平良以北）におけるノグチゲラの生息状況と個体数について. 辺士名高校, 沖縄. 10pp.  
 北部ダム事務所, 2010. 大保ダムにおけるノグチゲラ保全のとりくみ～ノグチゲラ保全の13年間の記録. 内閣府沖縄総合事務局, 沖縄. 35pp.  
 池原貞雄, 1981. 沖縄の自然とノグチゲラ. 汐文社, 東京.  
 池原貞雄, 1989. 沖縄島北部地域におけるノグチゲラ、ヤンバルクイナの生息分布について - 総括-. “特殊鳥類等生息調査II中間報告書”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 183-188.  
 池原貞雄, 1991. 沖縄島北部伊湯岳・玉辻山及びその周辺地域における特殊鳥類等調査報告 - 総括-. “特殊鳥類等生息調査IV中間報告書”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 123-127.  
 池原貞雄・高良鉄夫・安部琢哉・与那城義春・下謝名松栄・日越国昭・宮城進, 1977. ノグチゲラ *Sapheopipo noguchii* (SEEBOHM) 実態調査速報(3). 沖縄県教育委員会, 77pp.  
 環境省那覇自然環境事務所編, 2016. 平成27年度沖縄島北部地域マングース防除事業報告書. 南西環境研究所, 那覇, 306pp.  
 金城道男, 1991. ノグチゲラ. 週刊朝日百科 動物たちの地球, 29: 140-142.  
 小林峻・傳田哲郎・伊澤雅子, 2014. ノグチゲラ *Sapheopipo noguchii* (キツツキ科) によるウジルカンダ *Mucuna macrocarpa* (マメ科) の盗蜜. Strix, 30:135-140.  
 小高 信彦・久高 将和・嵩原 建二・佐藤 大樹, 2009. 沖縄島北部やんばる地域における森林性動物の地上利用パターンとジャワマングース *Herpestes javanicus* の侵入に対する脆弱性について. 日本鳥学会誌, 58(1):28-45.  
 小高信彦, 2009. リュウキュウマツ枯死木に営巣したノグチゲラの繁殖失敗事例. 九州森林研究, 62:98-99.  
 小高信彦, 2013. ノグチゲラによるハンノキ立枯れ木の営巣利用 - 沖縄島へのタイワンハムシの侵入と大発生の影響 -. 九州森林研究, 66:77-80.  
 小高信彦, 2014. ノグチゲラ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 86-87.  
 日本鳥学会編, 1996. 鳥をしらべる、鳥をまもる. 国際鳥学セミナー資料, 大阪.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. ノグチゲラ. “沖縄島の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 302.  
 沖縄県環境部自然保護・緑化推進課編, 2016. 平成27年度マングース対策事業報告書(概要版). 八千代エンジニアリング. 那覇. 208pp.  
 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
 玉城長正・中村 保, 1988. ノグチゲラ. あき書房, 宜野湾市, 112pp.  
 渡久地豊, 2015. ノグチゲラの親子. 沖縄やんばるの森にすむキツツキのおはなし. 小学館の図鑑NEOの科学絵本. 小学館, 東京, 39pp.  
 上田恵介・石田 健, 2001. やんばるの自然と鳥 - 米海兵隊ヘリパッド移設計画が招く危機 -. 遺伝, 55(6): 91-95.  
 Winkler, H., Kotaka, N., Gamauf, A., Nittinger, F. and Haring, E., 2005. On the phylogenetic position of the Okinawa Woodpecker (*Sapheopipo noguchii*). Journal of Ornithology, 146(2): 103-110.

**執筆者名：** 小高信彦

### 3) 絶滅危惧 I B 類 (EN)



- 和名 : オシドリ  
 分類 : カモ目 カモ科  
 学名 : *Aix galericulata* (Linnaeus, 1758)  
 英名 : Mandarin Duck  
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ : 情報不足 (DD)
- 形態 : 全長約 45 cm。雄の生殖羽は銀杏羽と呼ばれるオレンジ色でおうぎ状の羽を持つ。雌は全体が褐色味を帯びた暗灰色で地味な羽色である。雌雄とも翼鏡は濃緑色で、足はオレンジ色である。
- 分布の概要 : 北海道では夏鳥で、それ以外では留鳥として生息し、全国各地の山地近くの湖や沢に近い森林内樹洞で繁殖する。冬は平地の湖沼や溪流で見られるが、周囲に木が生い茂っている薄暗い場所を好む。東アジアの特産種で日本はその主要な分布地と考えられている。日本で繁殖するものと冬季に冬鳥として渡来し越冬するものがあるとされ、これは県内でも同様である。
- 生態的特徴 : 繁殖期には低地や低山帯の水辺ちかくの森林内で樹洞を使って繁殖する。主に植物食でドングリ類を好む。他に穀類、水生植物、カタツムリ類、魚類、昆虫類の幼虫なども食べる。
- 生息地の条件 : 採餌や休息地となるまとまった形の低地から山地の広葉樹林帯近くの池や沢が必要である。また営巣するためには、樹洞をもつような溪流沿いの大径木が数多く出現する林齢のすすんだ森林も不可欠と考えられる。
- 現在の生息状況 : 県内では日本鳥学会編 (2012) によると、沖縄島で繁殖分布し、冬鳥として沖縄島、伊平屋島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島に渡来する。また迷鳥として南大東島で確認されている。県内における最近の繁殖記録としては、沖縄島北部の森林地域が広がる国頭村や大宜味村での確認記録が見られる (比嘉, 1993、嵩原・安座間, 1995)。
- 学術的意義・評価 : 現在国内で最南の地域で繁殖する地域個体群として重要である。
- 生存に対する脅威 : 森林伐採、農地造成、ダム建設等の山地開発により生息地となる森林地域が漸減している。
- 特記事項 : IUCN カテゴリ : Least Concern (LC)。
- 原記載 : Linnaeus, 1758. Syst. Nat., ed. 10, 1: 128. (China)。
- 参考文献 : 比嘉邦昭, 1993. 沖縄島北部地域 (国頭村・大宜味村・東村) の特殊鳥類の生息分布調査. “特殊鳥類等生息環境調査VI”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 93-130.  
 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京。  
 環境省, 2014. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, 東京。  
 久貝勝盛・山本 晃, 1981. 宮古群島の鳥類目録. 沖生教研会誌, 沖縄生物教育研究会, 那覇, 14: 15-29。  
 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京。  
 Mark A. Brazil, 1991. The Birds of Japan. Christopher Helm and A & C Black, London.  
 日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録 改訂第 5 版. 学習研究社, 東京, 120pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. オシドリ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 304-305。  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 2005. オシドリ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇。  
 沖縄野鳥研究会編, 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会。  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添。  
 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄県の野鳥. 新報出版, 那覇。  
 嵩原建二・安座間安史, 1995. 大宜味村 (沖縄島) の鳥類相とその生息状況について. “大宜味村の自然”, 大宜味村教育委員会, 大宜味, 421-514。  
 八重山野鳥の会編, 1983. 10 周年記念誌. 八重山野鳥の会, 石垣。  
 琉球新報社編, 1983. 写真集沖縄の野鳥. 誠文堂新光社, 東京。
- 執筆者名 : 嵩原建二

- 和名 : アカオネツタイチョウ  
 分類 : ネットタイチョウ目 ネットタイチョウ科  
 学名 : *Phaethon rubricauda rothschildi* (Mathews, 1915)  
 英名 : Red-tailed Tropic Bird  
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN)
- 形態 : 体全体が白色で、黒色の過眼線があり、細長く赤い中央尾羽が目立つ。嘴は赤色で足は黒色である。
- 近似種との区別 : 赤色の尾羽が伸びていない幼鳥や若鳥の飛翔中の下面はシラオネツタイチョウと似て識別は難しい。しかし翼背面は初列風切羽がシラオネツタイチョウでは太く濃い黒色だが、本種では細いことで識別できる。
- 分布の概要 : 八重山諸島仲ノ神島には毎年夏季に少数飛来するが、島にはほとんど降りず、繁殖しない。
- 生態的特徴 : 外洋性島嶼の海岸から標高 300 メートルほどの崖や急斜面の岩や木の下に営巣する。主に魚類、特にトビウオ類とイカ類を採食するとされている。
- 現在の生息状況 : 仲ノ神島では、普通 1 羽から最大 8 羽の観察例もあるが、2000 年代には観察例が減っている。日本

では、小笠原諸島の西之島と硫黄列島の南硫黄島で繁殖の記録がある。  
**特記事項** : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種アカオネッタイチョウを選定している。  
**原記載** : Boddaert, 1783. Table Pl. enlum, 57 (Mauritius).  
**参考文献** : 千葉隼人・川上和人・鈴木 創・堀越和人, 2007. 小笠原諸島の海鳥繁殖分布. 山階鳥学誌 39:1-17 (英文).  
 川上和人・鈴木 創・千葉隼人・堀越和人, 2008. 南硫黄島の鳥類相. 小笠原研究 (33) :111-127. 2007. 06. 17-27 調査  
 川上和人・山本 裕・堀越和人, 2005. 小笠原諸島の鳥類相. Strix 23:159-166. 2004. 07. 10 調査.  
 河野裕美, 2014. EN (絶滅危惧 I B 類) アカオネッタイチョウ. レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 2 鳥類. ぎょうせい, 東京, 78-79.  
 河野裕美・安部直哉・真野 徹, 1986. 仲の神島の海鳥類. 山階鳥類研究所研究報告, 18(1) : 1-27.

**執筆者名** : 河野裕美・水谷 晃

**和名** : キンバト  
**分類** : ハト目 ハト科  
**学名** : *Chalcophaps indica yamashinai* Hachisuka, 1939  
**英名** : Emerald Dove (Ryukyu islands subspecies)  
**カテゴリー** : 絶滅危惧 I B 類 (EN) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

**形態** : 全長約 25 cm. 雄の額から後頸かけた側頭部は白色を呈するが、雌では灰褐色となる。頭上から後頭・後頸は青灰色、顔から喉・頸側・胸はブドウ色を帯びた赤褐色である。背と肩羽・雨覆は光沢のある金緑色で、肩に白斑がある。腹部は淡褐色、嘴は朱色、脚は赤紫色である。雌は雄より総じて明瞭さに欠け、雄にある光沢色が鈍く、総じて淡い色彩をしている。キンバトは、雌雄の体色に明確な性的二型を示す種である。

**近似種との区別** : 同所的に生息しているハト類 (キジバト、ズアカアオバト、カラスバト) との区別は、大きさが小さいことと色彩が全く異なり、容易である。

**分布の概要** : インドから東南アジア、台湾、南西諸島南部に広く分布する。先島諸島に広く分布する。

**近縁な種及び群との分布状況の比較** : 先島諸島には、亜種ヨナクニカラスバト、亜種チュウダイズアカアオバト、亜種リュウキュウキジバトが同所的に生息する。同所的に生息する階層構造が発達した森林では、亜種ヨナクニカラスバトは比較的樹冠に近い部分、亜種ズアカアオバトは中層部を利用するのに対し、亜種キンバトは地表と低木層を行動する。亜種リュウキュウキジバトと行動が重複することが多い。森林を主な生息場所とする。暗い林内、林縁、道路、農耕地等で採餌する。行動圏は樹林地で占められるが畑雑草群落と牧草地も利用した。主にタブノキやシヤマヤマハツの地上から平均 2 m の高さ上部解放型の皿形の巣で営巣する。ほとんどのつがいの一腹卵数は 2 卵であるが、稀に 1 卵のこともある。夜間は雌、昼間は雄が抱卵と抱雛を担当する明確な分業が見られる。宮古島における 2013 年の営巣成功率は約 25% だった。繁殖失敗は主にハンフトガラスによる捕食と推察された。ラジオテレメトリー法を用いた行動の追跡の結果、雄は巣を中心とした半径約 10 m の狭い範囲を周年の行動圏とした。一方、雌は繁殖期にも巣の周辺と離れた位置に行動圏を持ち、広いものでは 20 ha を持つ個体もあった。産卵期に雌雄がそれぞれ別行動することは、ハト類としては特徴的である。

**生息地の条件** : 常緑広葉樹林を愛好する。

**現在の生息状況** : 天然記念物に指定された 1970 年代には生息数が非常に少なく、1990 年代前半でも石垣島の特定の場所でしか観察できない状況にあった。しかし 1997 年に宮古島で繁殖が確認され、その後生息数が増加しはじめた。宮古島の犬野山林内では春から夏にかけての時期であればどこを歩いてもキンバトの鳴き声を確認することができ、繁殖個体数が多い。また、海岸林や残存する御嶽林などにも生息している。さらに市街地の孤立した樹林地などにも生息する。西表島や石垣島でも簡単に確認できるようになっている。宮古島では、冬季に観察例が減少するので、季節的な移動をしている可能性がある。

**学術的意義・評価** : 本亜種の分布域は種キンバトの分布北限であり、学術的に高い価値を有する。宮古島における生態の解明は進んでいるが、本亜種の主要産地である石垣島と西表島における生息状況や生態も解明される必要がある。

**生存に対する脅威** : 生息地に隣接する道路では交通事故が頻発している。宮古島では 1990 年代から個体数を増加させたが、近年は捕食による繁殖失敗が目立つ。宮古島では、亜種リュウキュウハンフトガラスが個体数を急増させており、その影響により繁殖成功率が低下しているものと推察される。また、西表島などでは建物の窓ガラスに衝突して死亡することがある。

**特記事項** : 国指定天然記念物 (1972 年)。国内希少野生動植物種 (1993 年)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種キンバトを選定している。

**原記載** : Hachisuka, 1939. Bull. B. O. Club, 59: 45. (Yonakuni, Ryukyus).

**参考文献** : 環境省編, 2002. キンバト. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 2 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 106-107.  
 環境省, 2014. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, 東京.

清棲幸保, 1978. 日本鳥類大図鑑Ⅱ (増改). 講談社, 東京, 494-496.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. キンバト. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 – レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 301.  
 砂川栄喜, 2001. きらめく生命・宮古諸島の野鳥. ニライ社, 那覇.  
 田中健太・大井沙綾子・櫻井有昌瑚・仲地邦博・岩崎哲也・高木昌興, 2016. 絶滅危惧 I B 類・天然記念物キンバトの繁殖生態. 自然保護助成基金成果報告書 24: 77-83. 第 24 期プロ・ナトゥーラ・ファンド助成 国内研究助成.  
 山階鳥類研究所編, 1975. この鳥を守ろう. 霞会館, 東京, 176-177.

執筆者名 : 高木昌興

和名 : **アカアシカツオドリ**  
 分類 : カツオドリ目 カツオドリ科  
 学名 : *Sula sula rubripes* Gould, 1838  
 英名 : Red-footed Booby  
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)                      環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態 : 本亜種の羽色は多型で、初列と次列風切羽の黒色を除いて全身白色の白色型、全身が灰褐色の褐色型、翼背面が暗色で他は白色あるいは頭部から翼背面までが暗色で腰から尾羽が白色の中間型がある。どの羽色型の成鳥も脚は赤色、嘴は青紫色である。幼鳥は成鳥褐色型と似るが、黒色の嘴と暗色の脚で識別できる。琉球列島へ飛来する個体は、幼鳥から成鳥への換羽中の羽色で、足色も暗色から薄い赤色であることが多い。

近似種との区別 : 飛翔中のアカアシカツオドリの白色型とアオツラカツオドリは似ているが、本種の尾羽が白色であるのに対し、後者では黒色であることで区別できる。

分布の概要 : 1975年と1977年に、八重山諸島仲ノ神島で各々1例の繁殖確認例がある。  
 生態的特徴 : 樹木や海岸性灌木の上に営巣し、高密度で大きなコロニーを形成する。休息時も樹上であることが多い。1雛を育てる。幼鳥は巣立ち後も親鳥による長い補助給餌期間を経て独立に至る。

生息地の条件 : 樹木や灌木の多い外洋性島嶼で繁殖する。  
 個体数の動向 : 唯一繁殖記録のある仲ノ神島では1977年以降、繁殖していない。  
 現在の生息状況 : 仲ノ神島へは毎年数羽から10羽以内が飛来し、夜間、ガジュマル樹上で休息するところが観察されるが、そのほとんどは羽衣の一部に幼羽を残した若齢鳥である。

学術的意義・評価 : 本種の繁殖確認例のある仲ノ神島では、近縁種のカツオドリが増加傾向を示しており、人為的な攪乱のない繁殖環境が維持されていると考えられるが、近年の飛来例は減少している。同島に飛来する個体の多くが若齢鳥であることを考慮すると、過去の繁殖例は偶発的な可能性がある。本種の若齢鳥の北上分散例は東北、北海道においても散見される。

特記事項 : 尖閣諸島での繁殖の可能性が示唆されているが、1990年代、2000年代の調査でも確認されていない。日本では、このほか小笠原・硫黄列島でも観察されているが繁殖確認には至っていない。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種アカアシカツオドリを選定している。

原記載 : Gould, 1838. Syn. Bds. Austr., 4, app., 7 (New South Wales).  
 参考文献 : 風間健太郎・佐藤雅彦, 2008. 北海道利尻島におけるアカアシカツオドリ *Sula sula* の飛来記録. 日本鳥学会誌, 57(1): 30-32.

Kohno, H., 2000. Visits of immature Blue-faced and Red-footed Boobies to Nakanokamishima, South Ryukyus, Japan. Bull. Inst. Oceanic Res. & Develop., Tokai Univ., (21): 111-117.

河野裕美, 2002. アカアシカツオドリ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 – レッドデータブック – 2 鳥類”, 環境省編, 自然環境研究センター, 東京, 88-89.

河野裕美, 2014. EN (絶滅危惧 I B 類) アカアシカツオドリ. レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 2 鳥類, ぎょうせい, 東京, 80-81.

河野裕美・安部直哉・真野 徹, 1986. 仲ノ神島の海鳥類. 山階鳥類研究所研究報告, 18(1): 1-27.

河野裕美・水谷 晃, 2013. 仲ノ神島におけるアオツラカツオドリとアカアシカツオドリの飛来状況 (1986-2013年). 沖縄生物学会誌, 52: 97(P-20).

水谷晃・村越未来・松崎 茂・山田智子・長嶺 隆・河野裕美, 2012. アカアシカツオドリ若鳥の保護と長期飼育後の放鳥. Strix, 28: 149-163.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 富田直樹・成田 章, 2012. 青森県蕪島におけるアカアシカツオ若鳥の観察記録. 山階鳥学誌 44: 18-19.

執筆者名 : 河野裕美・水谷 晃

和名 : **サンカノゴイ**  
 分類 : ペリカン目 サギ科  
 学名 : *Botaurus stellaris stellaris* (Linnaeus, 1758)  
 英名 : Eurasian Bittern

カテゴリー：絶滅危惧IB類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧IB類 (EN)

形態：全長68 cm。体全体が薄い黄色みを帯びた褐色で、不規則な淡い褐色と黒褐色のまだら模様が出る。頭頂と顎線は黒く、下面には縦斑がある。

近似種との区別：ゴイサギの幼鳥に似るが、本亜種に比べ体が小さく、顎線の黒い部分がない。

分布の概要：繁殖分布はユーラシア大陸に広がり、北のものは東南アジア、インド、アフリカで越冬する。日本では本亜種が北海道や茨城県、千葉県、滋賀県で繁殖する。繁殖地周辺では留鳥。北海道では夏鳥として渡来し、本州以南では冬鳥。県内では沖縄諸島の沖縄島や久米島、伊平屋島、宮古諸島では宮古島と伊良部島、多良間島、八重山諸島では石垣島や西表島、与那国島に冬鳥として渡来する。大東諸島では迷鳥である。

生態的特徴：生息地は広いヨシ原や湿地性草原である。餌は魚類や甲殻類、昆虫類などを食べる。5～8月頃、ヨシ原の地上で営巣する。一腹産卵数は4～5卵。抱卵日数は約25日。メスのみが抱卵。

現在の生息状況：県内には冬期に渡来(越冬)するが非常に少ない。これまで八重山地方での観察例が多いが、最近沖縄島における確認記録が増加し、2002年は国頭村と糸満市(3個体)、さらに石垣島アンパルで1個体、2012年は名護市、2016年の冬期から春期には金武町で越冬個体が確認されている。

生存に対する脅威：越冬地となる湿地環境やタイモ栽培地、水田等の減少により生息への影響が心配される。また、生息地の農薬汚染も心配される。

特記事項：数少ない旅鳥や冬鳥としての渡来種であるが、数が少なく、中継地や越冬地としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリーに準拠した。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種サンカノゴイを選定している。

原記載：Linnaeus, 1758. Syst. Nat., ed. 10, 1: 144 (Sweden).

参考文献：環境省編, 2002. サンカノゴイ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—2 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 90.

桑原和之, 2014. サンカノゴイ. レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 84-85.

黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.

宮古野鳥の会編, 2014. 宮古野鳥の会 40 周年記念誌. 106pp.

日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. サンカノゴイ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 316.

沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. サンカノゴイ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 53.

沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.

沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.

髙原建二・砂川栄喜・大城亀信・柳沢紀夫・天野洋佑・土方秀行 2003. 沖縄県内における最近の希少な鳥類の渡来記録について. 南島文化 25 : 33-46 沖縄国際大学南島文化研究所

髙原建二・平安山英義・奥 太志, 2014. 名護市内を含む沖縄島北部における希少な鳥類の記録について(2012年～2014年まで), あじまあ 18 : 1-15.

山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.

執筆者名：髙原建二

和名：クロツラヘラサギ

分類：ペリカン目 トキ科

学名：Platalea minor Temminck & Schlegel, 1849

英名：Black-faced Spoonbill

カテゴリー：絶滅危惧IB類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧IB類 (EN)

形態：全長 74 cm。雌雄同色。大型で全身が白色のトキの仲間。嘴は黒色で長く、先端はへら状になっている。嘴基部と眼先は黒い皮膚が裸出している。足は長くて黒い。繁殖期には後頭部に房状の黄色のかざり羽があり、胸も黄色くなる。幼鳥の嘴はピンク色味があり、外側初列風切及び次列風切の羽縁は黒色。

近似種との区別：へらサギ *P. lucorodia major* は、体がやや大きく、目と嘴は離れて見える。

分布の概要：朝鮮半島西北部と中国東北部で繁殖し、朝鮮半島南西部、日本、中国(台湾・香港)、ベトナムなどで越冬する。日本では九州と沖縄が主要な渡来地とされる。2015年から2016年の冬期には近縁種のへらサギとの混群も見られた。

生態的特徴：採餌場所は水辺(干潟・河口・池など)で生息し、餌は魚類、甲殻類などである。

生息地の条件：干潟や河口部、池などの水辺環境。

個体数の動向：県内においては数少ない渡来種であるが、最近の飛来個体数は30個体以上と増加している。最近における世界の総生息個体数は増加傾向にあるものとされ、2012年1月には約2,400個体とされている。国内では2012年に283個体が確認され、その内沖縄県内では14羽の飛来が確認されている。2015年の渡来数として、沖縄野鳥の会(私信)による集計で沖縄島では32個体が確認され、増加傾向であるように思われる。なお、モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査ニューズレター(環境省多様性センター・NPO法人バードリサーチ)による2015年冬季概要によると、冬季に

- 現在の生息状況 : おける全サイトの最大個体数の合計は470個体となっており、増加傾向が指摘されている。県内各地の干潟環境に冬季に飛来する。特に沖縄島南部（漫湖干潟・瀬長干潟・与根遊水地・豊崎干潟など）には10個体を越す飛来数が確認される。また、時には越冬個体が見られることがある。最近、国際的な保護をすすめる観点から、標識調査や人工衛星による追跡など渡りに関する調査から渡りルートの一部が解明され、越冬個体の一斉カウントなどが行われていて生息状況の把握がすすめられている。
- 学術的意義・評価 : 東アジアに局地的に分布する種で、学術的に貴重とされる。
- 生存に対する脅威 : 重要な生息地である海岸干潟や河川、湿地等が人間の経済活動の拡大等によって埋め立てが進行するなど減少傾向にあるため、生息地の減少と餌となる水生小動物の減少が考えられる。
- 特記事項 : 数少ない冬鳥としての渡来種であるが、数が少なく、越冬地としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリーに準拠した。宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。IUCN カテゴリー：Endangered（EN）。
- 原記載 : Temminck et Schlegel, 1849. In Siebold's Faun. Jap., Aves: 120, pl. 76(Japan).
- 参考文献 : 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.  
環境省編, 2002. クロツラヘラサギ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 2 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 54.  
高野茂樹, 2014. クロツラヘラサギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 86-87.  
黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. クロツラヘラサギ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 317.  
沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名 : 嵩原建二

和名 : オオクイナ  
 分類 : ツル目 クイナ科  
 学名 : *Rallina eurizonoides sepiaria* (Stejneger, 1887)  
 英名 : Slaty-legged Crake  
 方言名 : ファードゥル  
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)                      環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態 : 全長約 25 cm。成鳥雄では頭頂から体上面は一樣に暗オリーブ赤褐色、顔から胸にかけては鮮やかな赤褐色で、脇を含む下胸以下の下面は黒と縞のはっきりした横縞模様がでる。腮と喉は白い。嘴と脚は暗鉛色。虹彩は赤い。雌は頭部から顔や胸部は暗褐色で、雄のほうが色鮮やかである。
- 近似種との区別 : ヒクイナより大型で下胸下部から黒白の横帯が顕著である。ヒクイナは背面・下腹・下尾筒が暗オリーブ褐色、顔から腹にかけては一樣なブドウ色である。下腹と下尾筒に不規則な薄い白色横斑がある。また脚は赤い。
- 分布の概要 : これまで八重山諸島の石垣島・竹富島・小浜島・黒島・西表島・与那国島に留鳥として分布するとされてきたが、最近宮古島で繁殖が確認された。また沖縄島でも確認例も見られる。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : インドからフィリピンおよびセレベスにかけての南アジアなど熱帯から亜熱帯にかけて分布し6亜種に分けられている。インド・インドシナの亜種は冬期にスリランカ・マレー半島・スマトラ島・ジャワ島などにわたるとされる。日本産亜種は6亜種中最も大型とされる。
- 生態的特徴 : 常緑広葉樹林や草原などに生息する。森林部では立木や灌木の多い薄暗いような林で見かけられるが開けた環境でも見られる。人や敵に追われると木の上に飛び上がる習性がある。産卵期は5~6月、巣立ちは6~8月上旬という。夜間にはしばしば木にとまって眠ることがあるため夜間に観察される例が多い。主として夜間にファー、ファーと連続的に鳴く。
- 生息地の条件 : クイナ類では比較的陸生（森林性）の種で必ずしも湿地や水辺は必要でないと言われる。森林や林縁の地上で営巣するので、まとまった森林は必要である。宮古では夏季に貯水池によく水浴びで出現する。
- 学術的意義・評価 : 沖縄県の固有亜種である。
- 現在の生息状況 : 八重山諸島に分布。最近宮古島や多良間島でも数は少ないが留鳥として繁殖分布している。沖縄島では1回のみの観察記録が知られているが、繁殖はしていないものと思われる。
- 生存に対する脅威 : 敵に追われると木に飛び上がるが、本来地上性の鳥であることから、野生化したイヌやネコなどは脅威となる。なお、西表島ではイリオモテヤマネコによって捕食されることがある。
- 特記事項 : 宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。IUCN カテゴリー：Least Concern（LC）\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種オオクイナを選定している。
- 原記載 : Stejneger, 1887. Proc. U. S. Nat. Mus., 10: 395. (Yaeyama, Ryukyus).
- 参考文献 : 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.  
環境省編, 2002. オオクイナ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 2 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 170.

- 尾崎清明, 2014. オオクイナ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京.
- 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.
- Mark A. Brazil, 1991. The Birds of Japan, Christopher Helm and A & C Black, London.
- 宮古野鳥の会編, 2014. 宮古野鳥の会 40 周年記念誌. 106pp.
- 日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録 (改訂第 5 版). 学習研究社, 東京, 120pp.
- 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.
- 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.
- 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 2005. オオクイナ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇.
- 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. オオクイナ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 306-307.
- 沖縄野鳥研究会編, 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会.
- 坂口法明・村田 行・西平守孝, 1990. イリオモテヤマネコの糞内容物からみた食性の地域変異. 沖縄島嶼研究, 8: 1-13.
- Short, L., 1973. Notes on Okinawa birds and Ryukyu Islands Zoogeography. IBIS, 115: 264-267.
- 砂川栄喜, 2011. 沖縄宮古諸島の野鳥 (亜熱帯の水辺・山野の野鳥). ボーダーインク. 那覇. 238pp.
- 髙原建二, 1986. 国頭郡本部町伊豆味で「オオクイナ成鳥 1」. 野鳥, 日本野鳥の会, 473: 35.

執筆者名 : 岡 徹\*・髙原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における岡による記載内容を一部見直した。

和名 : アマミヤマシギ  
 分類 : チドリ目 シギ科  
 学名 : *Scolopax mira* Hertert, 1916  
 英名 : Amami Woodcock  
 方言名 : ヤマシジャー  
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態 : 全長約 36 cm. 後頭の黒い横斑が顕著なシギである。体上面に褐色・黒・灰色の細かい複雑な斑紋がある。3 列風切羽は暗オリーブ褐色で、羽縁に淡色の小三角斑がある。目の周りはピンク色、顔には 2 本の暗色の線が並行に走る。

近似種との区別 : 近似種ヤマシギは全体的に赤褐色身を帯びる。アマミヤマシギより額が急角度にせりあがり目は高く位置する。したがって顔の 2 本の線は角度があり目の側で開いている。さらにヤマシギでは赤褐色の 3 列風切羽にある偏平楕円形の暗色斑が目立ち、またディスプレイ・フライトを行う。しかしながら、本種とアマミヤマシギの飛翔個体については両者の区別は困難である。

分布の概要 : これまで奄美大島、徳之島、沖縄島、渡嘉敷島に分布するとされていたが、最近久米島と阿嘉島にも冬季に生息することが報告されている。最近の調査では、沖縄島北部地域で周年生息しているが、繁殖は確認されていない。また、沖縄島周辺離島では夏季の調査では確認されなかったことから、冬季に奄美諸島から飛来する個体がいる可能性が高い。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁種であるヤマシギ *S. rusticola* はユーラシア大陸の中部・北部に広く繁殖分布し冬は南に移動するものもいるとされる。国内では北海道、本州、伊豆諸島で繁殖し、他の地方では冬鳥として普通にみられる。沖縄県内でも冬鳥として 10 月頃から渡来し各地で普通にみられる。

生態的特徴 : ダムや林道わきの草地などで嘴を差し込んで餌をあさる。人には無関心な面があり驚かされたときもヤマシギが静かに飛び去るのと異なり、しばしば地上を歩きながら逃げ隠れる。ジシギ類に似た声を出して飛び立ってもすぐ近くに飛び降りるか急上昇して木の枝にとまる。2~3 月に地上で繁殖期のディスプレイを行う。奄美諸島では山地の地上に皿型の巣をつくり 3~5 月初旬に 2-4 卵を産むとされるが、詳しい生態はよくわかっていない。県内での繁殖確認はみられないが、夏場も観察されるので周年生息し、繁殖していることが考えられる。

生息地の条件 : イタジイを主体にした常緑広葉樹林帯を中心に生息し、その周辺にある農耕地や森林公園等で採餌することが多い。

個体数の動向 : 周年生息する個体数はわずかと思われる。さらなる県内における生態調査が不可欠であろう。

現在の生息状況 : 沖縄島北部で少数が周年生息する。最近の遺伝的研究によると、冬期に見られる一部の個体は奄美大島産と同じ遺伝子を有していることが報告されている。したがって、冬季には奄美諸島から飛来する一部の個体が越冬するものと思われる。最近、県内における分布状況について調査が行われ、それをもとにした具体的な保護策がとられることが期待される。

学術的意義・評価 : 長い間ヤマシギの 1 亜種 *Scolopax rusticola mira* と考えられ、ごく最近まで奄美大島のみが生息するとされていた。現在、琉球列島の奄美諸島と沖縄諸島に分布する日本固有種。

生存に対する脅威 : 県内では林道建設や森林伐採・農用地の拡大・ダム建設による生息地が漸減している。また、生息地の分断や孤立化、野性化したイヌやネコや外来種のマングースによる捕食などの影響と交通事故等が大きな脅威と考えられる。

特記事項 : 環境省編 (2014 年) ではランクが下げられたが、沖縄県内の生息状況はごく少数と考えられ、前回と同様のランクとした。沖縄県指定天然記念物 (1994 年)。国内希少野生動物種 (1993 年)。IUCN カテゴリー : Vulnerable (VU)。

原記載 : Hartert, 1916. Bull. Brit. Om. Club, 36: 64. (Amami-oshima).

参考文献 : Brazil M. A. and H. Ikenaga, 1987. The Amami Woodcock *Scolopax mira*: it's identity and identification. Forktail, 3: 3-16.

- 江田真毅・小池裕子, 2005. アマミヤマシギ (*Scolopax mira*) の mtDNA 制御領域による遺伝的構造の解析. アマミヤマシギ保護増殖事業に関わる生態調査報告書. 環境省自然保護局編. 東京.
- 石田 健, 1995. シリーズ「この鳥を守ろう」の現在. 第 1 回「アマミヤマシギは今」. 私たちの自然, 日本鳥類保護連盟.
- 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.
- 石田 健, 2014. アマミヤマシギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京.
- 環境省編, 2002. アマミヤマシギ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 2 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 112.
- 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.
- Mark A. Brazil, 1991. *The Birds of Japan*. Christopher Helm and A & C Black, London.
- 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.
- 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.
- 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 2005. アマミヤマシギ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇.
- 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. アマミヤマシギ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 299-300.
- 沖縄県教育委員会, 2005. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第 42 集 アマミヤマシギ生息実態調査報告書. 沖縄県教育委員会文化課.
- 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.
- 高原建二, 1989. 沖縄島におけるアマミヤマシギ *Scolopax mira* の夏季と冬季の分布について. 名護博物館紀要「あじまあ」, 名護博物館, 名護, 5: 17-22.
- 高原建二・池間幸男・兼城克男, 1995. 慶良間諸島の鳥類. 沖縄県立博物館紀要, 沖縄県立博物館, 那覇, 21: 101-128.
- 高原建二・久貝勝盛・瀬名波任, 1995. 久米島の鳥類について. “久米島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館, 那覇.

執筆者名 : 高原建二

和名 : コシャクシギ  
分類 : チドリ目 シギ科  
学名 : *Numenius minutus* Gould, 1841  
英名 : Little Curlew  
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態 : 雌雄同色。頭上は黒褐色で、頭中央線は淡褐色。眉斑は幅広く、淡黄褐色。嘴は黒色で短く、下に湾曲し、下嘴基部はピンク色を呈する。背と翼上面は黒褐色で、羽縁は淡褐色。腰から尾上面は淡褐色で、黒褐色の横縞がある。足は緑灰色。

近似種との区別 : チュウシャクシギの幼鳥によく似ていて、嘴も短く体型もよく似るが、本種のほうが嘴は短い。また、嘴の湾曲具合はチュウシャクシギのほうがより大きい。

分布の概要 : 繁殖地はシベリア東部で、オーストラリアやニューギニアで越冬する。国内では春秋の渡り期に旅鳥として通過する。県内でも同様に旅鳥として通過し、県内各地で記録が見られる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 県内ではダイシャクシギやチュウシャクシギは旅鳥もしくは冬鳥として普通に渡来し、数も多い。

生態的特徴 : 春と秋の渡り期に通過するだけであるが、海岸近くの草たけの低い草原や牧草地、埋め立て地、海岸近くの水田、休耕地などに立ち寄り、昆虫類などを餌として利用する。他に液果や植物種子なども利用することが指摘されている。

生息地の条件 : 海岸近くの草丈の低い草原、牧草地、埋め立て地、海岸近くの水田、休耕地など。

現在の生息状況 : 大東諸島を除く県内各地に数少ない旅鳥として渡来する。大東諸島では迷鳥とされている。

学術的意義・評価 : 数少ない渡来種で、本種の渡りを考える上で重要である。

生存に対する脅威 : 渡り期には海岸近くの草丈の低い草原、牧草地、埋め立て地、水田などを利用しているが、こうした環境の諸々の造成や宅地化等で適した環境は減少傾向にあるものと思われる。

特記事項 : 数少ない旅鳥としての渡来種であるが、数が少なく、中継地としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリーに準拠した。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

参考文献 : 藤井 幹, 2014. コシャクシギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 106-107.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

執筆者名 : 高原建二

和名 : リュウキュウツミ  
分類 : タカ目 タカ科  
学名 : *Accipiter gularis iwasakii* Mishima, 1962  
英名 : Ryukyu Sparrow Hawk

カテゴリー：絶滅危惧IB類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧IB類 (EN)

形態：全長雄26 cm、雌30 cm。形態的には亜種ツミ *A. g.gularis* とほとんど変わらないが、ツミに比べ翼長が短く、風切羽の長さに相違があることが指摘されている。また、雄の虹彩が橙黄色で、体下面は細かな橙褐色の横縞となることが多いとされている。飛翔時、初列風切の突出は5枚。

近似種との区別：ハイタカはやや大きく尾羽は長めで、飛翔時の初列風切の突出は6枚。アカハラダカのアイリングは目立たない。本種成鳥は翼下面の翼端が黒色で、下雨覆は無斑。初列風切の突出は4枚。

分布の概要：八重山諸島の特産亜種であり、日本固有亜種。亜種ツミのように渡りはしない。

近縁な種及び群との分布状況の比較：アカハラダカは秋期に通過する旅鳥。ハイタカは冬期に飛来する数少ない冬鳥で、農耕地周辺で見られることが多い。亜種ツミは冬期に渡ってくるということが知られているが、野外識別には困難さがある。

生態的特徴：生態的にはツミとほぼ同じと考えられている。平地から山地の森林に生息する。マツやホルトノキなど高い木立に皿形の巣を造り、2~5卵を産卵するとされている。主に小鳥類を捕食するが、昆虫や小型ほ乳類なども食べる。

生息地の条件：まとまった広葉樹林が不可欠。

現在の生息状況：八重山諸島の石垣島、西表島、小浜島、与那国島に留鳥として分布している。

学術的意義・評価：島嶼である八重山諸島に特産する亜種として、その分布や適応を考える上で重要。

生存に対する脅威：農耕地造成やリゾート開発等による森林伐採は生息地を減少させる要因になる可能性がある。

特記事項：本書では日本鳥学会編 (2012) に準拠して、八重山諸島産のツミを亜種リュウキュウツミ *A. g. iwasakii* として掲載した。沖縄島に留鳥として生息するツミ *A. g.gularis* は、本土に生息するツミと同じ亜種とされている (日本鳥学会編, 2012) が、リュウキュウツミと分類すべきである可能性も指摘されている。また、一部秋期に渡り個体も見られるため、今後分類学的な検討やさらなる生息調査等が望まれる。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種リュウキュウツミを選定している。なお、本亜種は宮古島市自然環境保全条例の保全種(2005)であるが、今回の改訂において本亜種は八重山諸島の留鳥個体群とした。

原記載：Mishima, 1962. *Tori*, 17(79/80): 219-221. (Ishigaki I., S. Ryukyus.)

参考文献：環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.

金井 裕, 2014. リュウキュウツミ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 90-91.

黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.

沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.

沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. リュウキュウツミ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 318. より引用.

沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 2005. リュウキュウツミ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 80-81.

高原建二, 2004. 小浜島における鳥類の記録について. 小浜島総合調査報告書. 沖縄県立博物館. 35-59.

高原建二・細川太郎・村田尚史・具志堅ひな子・山本英康, 2014. 沖縄本島北部 (名護市) におけるサンバ *Butasatur indicus* を含むワンタカ類の飛来状況について. やんばる学研究会会誌 (3): 80-87.

山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名：高原建二

和名：オリイコゲラ

分類：キツツキ目 キツツキ科

学名：*Dendrocopos kizuki orii* (Kuroda, 1923)

英名：Japanese Pygmy Woodpecker

カテゴリー：絶滅危惧IB類 (EN) 環境省カテゴリー：該当なし

形態：全長約15 cm。国内に生息するキツツキ類では最も小さい。頭頂から体の上面は黒褐色で、背と翼には白い横斑がある。下面は汚れたような白色で、頬にかけてと顎線は黒褐色、胸側面から脇に褐色の縦斑がある。雄の後頭部には赤い斑があるが、なわばり争いで興奮したときや風に吹かれるなどで羽毛が逆立つ状態にならないと野外での観察は難しい。沖縄諸島に生息する亜種リュウキュウコゲラ *D. k. nigrescens* に似るが、上面はリュウキュウコゲラより黒っぽい。

近似種との区別：本亜種の分布する西表島と石垣島には他のキツツキ類が生息しないため識別は容易である。

近縁な種及び群との分布状況の比較：コゲラは東アジアの一部だけに分布する種だが、日本では9亜種に区分され、全国的に留鳥として生息する。本亜種は最も南に位置するコゲラの亜種で、沖縄固有亜種である。分布域は極めて局所的であり、これまで西表島のみが生息するとされてきたが、最近石垣島でも確認されている (高原ほか 未発表)。なお、西表島でも本亜種が目撃例が少ないので、今後分布や個体数をなどの調査が必要である。

生態的特徴：雑食性だが、主に昆虫類やクモなどの動物質の物を食べる。繁殖のための巣穴は毎年掘り、入り口の直径約3 cm、深さ約15 cmで、生きた木の枯れ枝や、立ち枯れ木に作られる。常緑広葉樹林に生



<鳥類>

- 息する。
- 生息地の条件 : コゲラは体長に対して広い行動圏を持ち森林性が強いことから、まとまった森林を維持する必要がある。
- 学術的意義・評価 : 日本産コゲラの9亜種のうち最も南に生息する亜種であり、コゲラの亜種分化を考える上で重要であると考えられている。
- 生存に対する脅威 : 森林伐採、農地造成、ダム建設等の開発による生息地となる森林地域の減少。
- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC) \* \*IUCNでは本種を *pidoides* 属に分類し、種として評価している。本県改訂は種コゲラの亜種オリコゲラを選定している。
- 原記載 : Kuroda, 1923. *Yungipicus kizuki orii*, subsp. nov. Bull. Brit. Or. Cl. 43: 109 (Sonai, Iriomote Is.)
- 参考文献 : 石田 健, 1993. 日本全国のコゲラを比べる. BIRDER, 7巻第4号, 文一総合出版, 東京.  
日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
沖縄野鳥研究会編, 1986. 沖縄県の野鳥, 沖縄野鳥研究会.  
沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
高原建二・岡村麻生・比嘉邦昭・山崎仁也, 2014. 西表島の鳥類について. 沖縄県立博物館・美術館紀要, 7: 15-35.
- 執筆者名 : 小高信彦\*・高原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における小高による記載内容を一部見直した。

和名 : ホントウアカヒゲ  
分類 : スズメ目 ヒタキ科  
学名 : *Luscinia komadori namiyei* (Stejneger, 1887)  
英名 : Ryukyu Robin  
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態 : 背面は赤橙色、腹部は灰白色で、雄の顔から胸にかけて黒色。全長約 14 cm。
- 近似種との区別 : 基亜種アカヒゲ *L. k. komadori* の羽色は全体に明るく、雄の上嘴付け根から額にかけての黒色部が太く、脇に黒色部があることでホントウアカヒゲと区別ができる。基亜種と比較してホントウアカヒゲの翼は丸みを帯びている。
- 分布の概要 : 沖縄島北部の常緑広葉樹林を中心に唯一の個体群が確認されている。慶良間諸島では種アカヒゲの記録があるが、亜種ホントウアカヒゲの確実な生息確認はない。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 奄美群島以北で繁殖する基亜種アカヒゲが渡り時に沖縄諸島を通過し、先島諸島で越冬する。
- 生態的特徴 : 常緑広葉樹林を中心に生息する。林内の地上や樹上で主にミミズなどの環形動物や小形節足動物等を採食する。3月頃が番い形成期、木の根元や樹洞、岩棚などに営巣し、1腹卵数は2~4卵が多い。年に複数回繁殖する場合もある。
- 生息地の条件 : イタジイ(スダジイ)やタブノキなどの生育する常緑広葉樹林などの暗い森を主要な生息地とするが、人里近くの森林にも生息する。地上付近に営巣し、採餌も主に地上付近で行うことから、フリマングース(以下、マングース)やノネコなどの外来捕食者の影響を受けると考えられ。老齢な常緑広葉樹林の維持育成と外来捕食者対策を行い、地上の安全な採餌環境を維持することが本種の生息地としての重要な条件と考えられる。
- 現在の生息状況 : マングースの分布拡大に伴い、本亜種の繁殖分布の縮小傾向がみられ、かつての生息地である名護岳付近で生息が確認されなくなった。近年、大宜味村塩屋(S)ー東村平良(T)ライン以北では、マングースの捕獲数が最も多かった2007年前後と比較して本亜種の分布域の回復傾向がみられ、沖縄県及び環境省の実施するマングースの対策事業の効果がその一つの要因と考えられる。
- 学術的意義・評価 : 最近行われた分子系統学的研究では、本亜種と基亜種アカヒゲには大きな遺伝的分岐が起きていることが明らかとなり、今後、両亜種を独立種として分類する可能性がある。
- 生存に対する脅威 : 沖縄島北部の常緑広葉樹林に分布が限定され、唯一の生息地にマングースやノネコが侵入、これらの外来捕食者の消化管内容物から本亜種の羽毛が検出されている。沖縄県および環境省によるマングースの対策事業や、国頭村、大宜味村、東村におけるネコの適正使用に関する条例の効果が期待される。
- 特記事項 : 国指定天然記念物(1970年)。国内希少野生動物種(1993年)。主要な生息地となる沖縄島北部の常緑広葉樹林の一部が2016年に、やんばる国立公園に指定された。2012年に発行された日本鳥類目録第7版で、本亜種の分類はツグミ科からヒタキ科に、属名は *Erithacus* から *Luscinia* に変更された。IUCN カテゴリー : Near Threatened (NT) \* \*IUCNは本県改訂の亜種ホントウアカヒゲを独立種 *Larvivora namiyei* と分類して評価。
- 原記載 : Stejneger, 1887, Proc. U. S. nat. Mus., 9: 644. (Okinawa, central Ryukyus).
- 参考文献 : 環境庁, 1981. 昭和55年度特殊鳥類調査報告書. 環境庁編, 環境庁, 東京, 131pp.  
環境省那覇自然環境事務所編, 20016. 平成27年度沖縄島北部地域マングース防除事業報告書. 南西環境研究所, 那覇, 306pp.  
小高信彦・久高将和・高原建二・佐藤大樹, 2009. 沖縄島北部やんばる地域における森林性動物の地上利用パターンとジャワマングース *Herpestes javanicus* の侵入に対する脆弱性について. 日本鳥学会誌, 58: 28-45.  
宮城邦治・樋口広芳, 1990. 沖縄県北部地域におけるアカヒゲの繁殖生態. 平成元年度特殊鳥類調査, pp. 1-23. 環境庁, 東京.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

日本野鳥の会やんばる支部, 1997. 沖縄島北部における貴重動物と移入動物の生息状況及び移入動物による貴重動物への影響報告書. 日本野鳥の会やんばる支部, 国頭村. 86pp.

沖縄県文化環境部自然保護課, 2003. 平成 14 年度特殊鳥類等生息環境調査 (ホントウアカヒゲ生息実態調査) 報告書. 沖縄県文化環境部自然保護課, 12pp.

沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ホントウアカヒゲ. “沖縄島の絶滅のおそれのある野生生物 –レッドデータおきなわ–”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 312-313.

沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 2005. ホントウアカヒゲ. “改訂沖縄島の絶滅のおそれのある野生生物 –レッドデータおきなわ–”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, p60-61.

沖縄県環境部自然保護・緑化推進課編, 2016. 平成 27 年度マングース対策事業報告書 (概要版) . 八千代エンジニアリング. 那覇. 208pp.

沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.

Saitoh T, Sugita N, Someya S, Iwami Y, Kobayashi S, Kamigaichi H, Higuchi A, Asai S, Yamamoto Y, Nishiumi I, 2015. DNA barcoding reveals 24 distinct lineages as cryptic bird species candidates in and around the Japanese Archipelago. *Molecular Ecology Resources*, 15(1): 177-186

関 伸一, 2014. ホントウアカヒゲ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 122-123.

Seki, S-I, Sakanashi M, Kawaji N, Kotaka N., 2007. Phylogeography of the Ryukyu robin (*Erithacus komadori*): population subdivision in land-bridge islands in relation to the shift in migratory habit. *Molecular Ecology*, 16: 101-113.

与那城義春, 1978. 阿嘉, 慶留間, 屋嘉比島の鳥類. ケラマジカ実態報告Ⅲ, 沖縄県教育委員会, 那覇, 151-156.

執筆者名 : 金城道男\*・小高信彦 \*前回改訂版 (2005) における金城による記載内容を一部見直した。

- 和名 : リュウキュウキビタキ  
 分類 : スズメ目 ヒタキ科  
 学名 : *Ficedula narcissina owstoni* (Bangs, 1901)  
 英名 : Owston's Narcissus Flycatcher  
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態 : 全長約 25 cm。雄の上面は翼と尾も含めおおむね黒色で黄色の眉斑があり腰と上尾筒も黄色である。翼には大きな白斑がある。喉から腹は橙色から黄色をしている。雌は上面すべてオリーブ褐色、下面は汚白色である。
- 近似種との区別 : 基亜種キビタキ *F. n. narcissina* に似るが、少し小型で背面は著しくオリーブ色に富み、喉及び上胸は一般にキビタキのほうがあざやかな橙黄色である。また本亜種の雄は背中白色部がキビタキに比べて大きい。
- 分布の概要 : 本書は日本鳥学会編 (2012) に準じて、県内で留鳥として生息する亜種をリュウキュウキビタキとして扱った。本亜種の生息地とされている沖縄島北部では花輪ら (1989)、比嘉 (1993)、高原 (1993) などによって小数ながら確認記録が見られる。その出現地はまとまった森林地域と一致しているので森林依存性は高いものと思われる。最近、名護市内での生息も確認され (高原 2003)、森林の回復傾向とリンクするように生息分布が広がり、名護市は沖縄島における南限的な生息地となっている。また、八重山諸島の西表島や石垣島、小浜島での観察記録がある (八重山野鳥の会, 1984・高原, 2004)。さらに宮古島でも繁殖分布している (砂川, 2001)。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 種キビタキはカラフト、日本、中国南部、南千島などで繁殖し 3 亜種に分類されている。基亜種 *F. n. narcissina* はカラフト、北海道、本州、四国、九州に夏鳥として繁殖しインドシナ、海南島、ボルネオ、フィリピンなどに渡り越冬する。県内でも旅鳥として南下する個体がしばしば観察される。
- 生態的特徴 : 生態的には基亜種キビタキに類似すると思われるが、渡りを行わず留鳥である。森林に生息し樹洞等を使って繁殖する。安座間ら (1988) は本亜種が冬季の小鳥類の混群中で見いだされることを指摘している。
- 生息地の条件 : 採餌場所や休息地となるまとまった低地や山地の広葉樹林帯が必要である。また営巣するためには樹洞をもつような大径木が数多く出現する林齢のすすんだ森林も不可欠である。
- 学術的意義・評価 : 日本鳥学会編 (2012) に準ずると、国内におけるキビタキの 1 亜種であり、南西諸島特産亜種である。なお、Brazil (2009) は本亜種を琉球列島の「固有種」として扱っており、これに従うと琉球列島特産種となる。
- 生存に対する脅威 : 森林伐採、農地造成、ダム建設等の開発による生息地となる森林地域の漸減。
- 特記事項 : 最近の遺伝的研究 (DNA バーコーディング) では本亜種は基亜種であるキビタキとは遺伝的に大きく異なることが解明され、将来的に独立種となる可能性が指摘されている (西海, 2014)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC) \* \*IUCN は亜種リュウキュウキビタキを独立種 *Ficedula owstoni* と分類して評価。
- 原記載 : Bangs, 1901. *Bull. Mus. comp. Zool.*, 36: 265. (isjgakijima, south Ryukyus).  
 参考文献 : 安座間安史・嵩原建二・島袋徳正, 1988. 特殊鳥類等生息調査及びノグチゲラの営巣木調査. “特殊鳥類等生息環境調査Ⅱ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 99-122.  
 比嘉邦昭, 1993. 沖縄島北部地域 (国頭村・大宜味村・東村) の特殊鳥類の生息分布調査. “特殊鳥類等生息環境調査Ⅵ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 93-130.  
 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 –レッドデータブック– 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.

黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
 Mark A. Brazil, 1991. The Birds of Japan, Christopher Helm and A & C Black, London.  
 Mark Brazil, 2009. Birds of East Asia, China, Taiwan, Korea, Japan and Russia. Princeton University Press. 528pp.  
 宮古野鳥の会編, 2014. 宮古野鳥の会 40 周年記念誌. 106pp.  
 西海 功, 2014. 増えたり減ったり、日本の固有種の今昔. BIDER 28 (08) : 4-5  
 日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録 改訂第 5 版. 学習研究社, 東京, 120pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. リュウキュウキビタキ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 313-314.  
 沖縄野鳥研究会編, 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 砂川栄喜, 2001. きらめく生命, 宮古諸島の鳥類. ニライ社. 111pp.  
 砂川栄喜, 2011. 沖縄宮古の野鳥, 亜熱帯の水辺. ボーダーインク. 那覇. 238pp.  
 高原建二, 1993. 沖縄島北部地域 (国頭村・大宜味村・東村) の鳥類について. “特殊鳥類等生息環境調査VI”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 59-92.  
 高原建二, 2003. 名護市の鳥類. 名護市天然記念物調査シリーズ第 5 集, 名護市の自然. 名護市教育委員会, 157-198.  
 高原建二, 2004. 小浜島における鳥類の記録. 小浜島総合調査報告書. 沖縄県立博物館. 35-59.  
 高原建二・砂川栄喜・比嘉邦昭・宮城国太郎・高良淳司・金城輝男・仲地邦博・長嶺隆, 2008. 沖縄県内における 2003 年から 2006 年までの稀な鳥類の飛来と希少な繁殖記録について. 南島文化 (30) : 127-144. 沖縄国際大学南島文化研究所紀要.  
 高原建二・渡久地豊・平安山英義, 2013. 名護市内における最近の希少な鳥類と繁殖記録について, 名護市鳥類目録補遺 1, あじまあ 17 : 65-75.  
 高原建二・平安山英義・奥 太志, 2014. 名護市内を含む沖縄島北部における希少な鳥類の記録について (2012 年～ 2014 年まで), あじまあ 18 : 1-15.  
 高原建二・平安山英義・大城亀信・細川太郎・新垣裕治, 2016. 名護市及び沖縄島における希少鳥類及び希少繁殖事例についての記録, 2014 年春から 2015 年秋まで. 名桜大学紀要 (21) : 97-109.  
 八重山野鳥の会編, 1983. 10 周年記念誌. 八重山野鳥の会, 石垣.  
 琉球新報社編, 1983. 写真集沖縄の野鳥. 誠文堂新光社, 東京.

執筆者名 : 高原建二

#### 4) 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

和名	: ヒシクイ	環境省カテゴリー	: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
分類学英名	: カモ目 カモ科 <i>Anser fabalis serrirostris</i> Swinhoe, 1871 Bean Goose		
カテゴリー	: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省カテゴリー	: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
形態	: 全長 80~90 cm の大型のガン。雌雄同色で頭部から頸にかけて暗褐色。嘴は黒褐色で先端近くに帯状の橙褐色斑がある。上面は暗灰褐色で、羽縁は淡褐色。翼上面は暗褐色で、雨覆は灰色。胸から脇は暗褐色で、下腹から下尾筒は白く、尾は黒褐色で上尾筒は白色。脚は橙色。		
近似種との区別	: 類似する亜種オオヒシクイはより大きく、頸が長く、嘴も薄くて長い。		
分布の概要	: ロシアのツンドラ地域で繁殖する亜種ヒシクイの内、カムチャツカ半島南部の群れが日本まで渡るとされている。主に冬鳥として、北海道東部から道央、青森、秋田などを経て、宮城県化女沼まで渡り、越冬する。県内では毎年のごく少数が南下し越冬する。		
生態的特徴	: 夜間は湖沼などで過ごし、早朝にねぐらを飛び立ち、周辺の水田などでイネ科植物を採食する。沖縄では水田やタイモ栽培地などでイネ科植物や収穫後の稲モミなどを餌にしている。		
生息地の条件	: 冬場の越冬地となる水田やタイモ栽培地など。		
現在の生息状況	: 毎年のごく少数が県内各地の水田やタイモ栽培地などで越冬する。		
学術的意義・評価	: 県内における渡来数は少ないが、本種の渡りを考える上で重要である。		
生存に対する脅威	: 冬場の越冬地となる水田やタイモ栽培地などの減少傾向は、餌場の確保に困難さをきたすおそれがある。国内では国指定の天然記念物として保護されている。しかしながら、繁殖地であるカムチャツカ半島では、日本に渡るヒシクイの休猟区がカムチャツカ州により設定されていたが、最近解除され、狩猟圧の影響が心配されている (呉地, 2014)。		
特記事項	: 数少ない冬鳥としての渡来種であるが、数が少なく、越冬地の一部としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリーに準拠した。国指定天然記念物 (1971 年)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)* *IUCN は種として評価。本県改訂は種ヒシクイの亜種ヒシクイを選定している。		
参考文献	: 呉地正行, 2014. ヒシクイ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 146-147. 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp. 樺葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.		

執筆者名 : 高原建二

和名 : ツクシガモ  
 分類 : カモ目 カモ科  
 学名 : *Tadorna tadorna* (Linnaeus, 1758)  
 英名 : Common Shelduck  
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 全長 62.5 cm。頭部は緑色で体は白色である。肩羽と胸から腹部を通る縦の線は黒く、胸部から背中をとりまく線は栗色である。嘴は赤い。

近似種との区別 : マガモの雄は胸がブドウ色で嘴は黄色。ハシビロガモの雄は脇が茶褐色。カワアイサの雄は下面全体が白色で嘴も細い。

分布の概要 : ヨーロッパから中国東北部にかけて繁殖し、日本では主に九州地方に渡来し越冬する。県内では数少ない冬鳥もしくは迷鳥。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁な種としてアカツクシガモ *T. ferruginea* がいるが、いずれも県内においては数少ない冬鳥もしくは迷鳥であり、個体数が少ない。

生態的特徴 : 日本では繁殖しない。広い干潟にすむが海岸近くの水溜まりや水田等でも見られる。水辺のある土手の穴等に巣をつくる。1 巣の卵数は 5~11 個で抱卵日数は約 1 ヶ月である。

生息地の条件 : 主な生活の場所は湾内の干潟、河口部や湖沼である。

現在の生息状況 : 県内では数少ない冬鳥もしくは迷鳥として、ごく少数が水田や干潟、海岸などに飛来する。2016 年の冬期には沖縄島の海岸や湿地などで合計 17 個体が確認された。

学術的意義・評価 : 県内における渡来数は少ないが、本種の渡りを考える上で重要である。

生存に対する脅威 : 水田や干潟の減少によって渡来数が減少している。

特記事項 : 冬鳥としての渡来種であるが、数が少なく、越冬地の一部として本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリーに準拠した。なお、モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査ニュースレター (環境省多様性センター・NPO 法人バードリサーチ) による 2015 年冬季概要によると、全サイトにおける最大個体数の合計は 5,138 個体となっている。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原記載 : Linnaeus, 1758. Syst. Nat., ed. 10, 1: 122. (Sweden).  
 参考文献 : 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.  
 環境省編, 2002. ツクシガモ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック 2 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 94.  
 藤井 幹, 2014. ツクシガモ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 148-149.  
 小林桂助, 1983. 原色日本鳥類図鑑. 保育社, 大阪, 85-86.  
 日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録 改訂第 5 版. 学習研究社, 東京, 17.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ツクシガモ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 304.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ツクシガモ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄.  
 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
 高野伸二, 1982. 日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京, 220.

執筆者名 : 高原建二

和名 : シラオネッタイチョウ  
 分類 : ネットアイチョウ目 ネットアイチョウ科  
 学名 : *Phaethon lepturus dorotheae* Mathews, 1913  
 英名 : White-tailed Tropic Bird  
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 細長い吹流しのような中央尾羽は白色で、嘴は黄色である。

近似種との区別 : アカオネッタイチョウに似ているが尾と嘴の色で識別できる。

分布の概要 : 熱帯から亜熱帯海域に広く分布する。沖縄県では八重山諸島仲ノ神島周辺に、夏季、稀に飛来する。

生態的特徴 : 巣は岩の隙間、時に木の洞にも営巣する。一腹卵数は 1、抱卵日数は 40~42 日、70~85 日の育雛期間を経て巣立つ。食性は主にトビウオ等の魚類とアカイカ科のイカ類等。

生息地の条件 : 遠隔地の小さな海洋性島嶼で繁殖し、近づきにくく離陸しやすい崖などに営巣する。

現在の生息状況 : 観察例はほとんどが 1 羽であり、アカオネッタイチョウよりはるかに飛来数は少ない。日本での繁殖記録はない。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCN は種として評価。本県改訂は亜種シラオネッタイチョウを選定している。

原記載 : Mathews, 1913. Austr. AV. Rec., 2: 7 (Queensland).  
 参考文献 : del Hoyo, J., Elliott, A. and Sargatal, J. (eds.), 1996. Handbook of the Birds of the World. Vol. 1. Ostrich to

Ducks. Lynx Edicions, Barcelona.

河野裕美・安部直哉・真野 徹, 1986. 仲の神島の海鳥類. 山階鳥類研究所研究報告, 18(1): 1-27.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

執筆者名: 河野裕美・水谷 晃

和名: カラスバト  
分類: ハト目 ハト科  
学名: *Columba janthina janthina* Temminck, 1830  
英名: Japanese Wood Pigeon  
方言名: クルホート (読谷村)、フウバトウ (波照間島)  
カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態: 全長約 40 cm。全身が黒色で、頭部や後頸部・頸部から胸にかけて紫や緑色がかかる金属光沢がある。嘴は暗青色、脚は暗赤色である。幼鳥は金属光沢が少なく下面が褐色を帯びている。

近似種との区別: リュウキュウカラスバト *C. jouyi* は後頸に灰白色の三日月斑がある。オガサワラカラスバト *C. versicolor* は本種より大型で金属光沢が著しいとされる。なおリュウキュウカラスバトとオガサワラカラスバトはすでに絶滅したと考えられている。

分布の概要: 主として伊豆諸島・千葉県から紀伊半島までの本州太平洋岸の海岸部とその付属島嶼・九州の海岸部とその付属島嶼・隠岐・津島・屋久島・口之永良部島・薩南諸島・沖縄諸島に分布する。また佐渡・四国・五島列島・男女群島・種子島からも記録がある。韓国南部の海岸部とその付属島嶼・済州島・蔚陵島にも分布するとされる。なお台湾でも迷鳥(渡り?)としての記録がみられる。県内では沖縄島・伊平屋島・久米島・渡名喜島・慶良間諸島に分布している。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 日本鳥学会編(2012)では、八重山諸島と宮古諸島に亜種ヨナクニカラスバトが生息している。また小笠原諸島にアカガシラカラスバトが生息している。

生態的特徴: 本亜種は海岸近くや付属島嶼の広葉樹林と灌木林に生息し、本土の内陸部森林では見かけることがないとされる。食物はほとんど植物質でシイ・タブ・ツバキとそのほかの常緑広葉樹の堅果を好む。繁殖期にはテリトリーをつくる。ほとんど森林の中にいるので姿を見ることは少ない。

県内では低地の海岸林から山地の常緑広葉樹林帯およびリュウキュウマツと広葉樹の混交するようなまとまった森林内で見られる。9月頃から本種特有の「ウッー、ウッー」という鳴き声が盛んにきかれるようになり繁殖期の様相を呈する。12月下旬に卵殻をくわえて捨てる個体を目撃したことがあるので冬期でも繁殖している。伊平屋島では冬季の1月に鳴き声が多く聞かれ、森林上空を高く飛び回ったり、追尾する行動が見られ、繁殖期の様相が観察された。なお、1992年12月から1993年3月頃まで沖縄島北部の本部半島において最大で1,200~1,900羽の集団ねぐらが観察されており、本種の生態を考える上で興味深い報告が見られる(安座間・原戸, 1993)。さらに、海岸に集団で降りて塩類や小石類等の摂取を行う習性があることが知られている(渡久地ら, 1996)。

生息地の条件: 低地から山地にかけての常緑広葉樹林帯およびリュウキュウマツと広葉樹の混交する二次林などまとまった森林が不可欠である。

学術的意義・評価: カラスバト、ヨナクニカラスバト、アカガシラカラスバトの3亜種を含む種としてのカラスバトは、基亜種であるカラスバトが韓国にも生息しており、日本では準特産種とされている。この種はオガサワラカラスバトを分化させたように起源的にも古い種とされている。類縁種はフィリピン産の *Columba vitiensis* で、日本の鳥相の中でわずかなフィリピン系要素の一つであると考えられている。

生存に対する脅威: 天然林の減少。また1腹1卵とされ繁殖力が弱い。

特記事項: 国指定天然記念物(1971年)。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。IUCNカテゴリー: Near Threatened (NT)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は種カラスバトの基亜種カラスバトを選定している。

原記載: Temminck, 1830. Pl. Col., livr. 86, pl. 503. (Japan).

参考文献: 安座間安史・原戸鉄二郎, 1993. 本部町の鳥類相について(中間報告), “本部町動植物総合調査(動物調査中間報告)”, 本部町教育委員会, 本部町, 4-21.

環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.

黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.

Mark A. Brazil, 1991. The Birds of Japan. Christopher Helm and A & C Black, London.

日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録 改訂第5版. 学習研究社, 東京, 120pp.

沖縄野鳥研究会編, 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会.

沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.

沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. カラスバト. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 310-311.

沖縄県環境保健部自然保護課(編), 2005. カラスバト. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 72-73.

台湾野鳥資訊社・日本野鳥の会編, 1991. 台湾野鳥図鑑. 亜社図書有限公司, 台湾.

渡久地豊・金城道男・市田豊子, 1996. カラスバト *Columba janthina* の塩類摂取行動. STRIX (14): 186-189.

執筆者名: 高原建二

和名 : アホウドリ  
 分類 : ミズナギドリ目 アホウドリ科  
 学名 : *Phoebastria albatrus* (Pallus, 1769)  
 英名 : Short-tailed albatross  
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 嘴は淡桃色である。幼鳥の体色は黒褐色だが成鳥では翼の先と尾の先が黒色で残りは白色である。頭から後頸にかけて山吹色になる。成鳥羽になるまでに7~8年かかる。

近似種との区別 : アホウドリの幼鳥はクロアシアホウドリに似るが大きさと嘴の色が異なる。成鳥はコアホウドリに似るが大きさと翼の色で区別できる。

分布の概要 : 伊豆諸島鳥島と尖閣諸島南小島に加えて、最近、北小島でも繁殖確認されるようになった。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 北太平洋にはアホウドリ、クロアシアホウドリ、コアホウドリの3種が繁殖分布するが、沖縄県では前2種が繁殖し、コアホウドリは迷行例があるだけである。

生態的特徴 : 10月上旬に繁殖地の島に戻り10月下旬から11月半ばにかけて一卵産む。12月下旬から1月上旬にふ化し、5月後半に巣立ち、島を渡去するといわれる。親鳥は幼鳥を残し、先に繁殖地から渡去する。

生息地の条件 : 尖閣諸島南小島では、1971年の生息再発見、1988年の繁殖再発見以来、人の近づくことのできない高い断崖の中段にある狭い岩棚に営巣しているが、近年、同島頂上部の緩やかな斜面にも営巣するようになり、2001年12月には、新たに北小島の断崖上部の岩の露出した平坦地にも営巣するようになった。

現在の生息状況 : 伊豆諸島鳥島では、250番い以上が繁殖し、最近の巣立ち雛生産数も年150羽程度となり、個体数は推定1,400羽とされている。尖閣諸島南小島では50~55番いが繁殖し、個体数は250羽程度と推定されている。両繁殖地で個体数が増加傾向にあり、また繁殖分布域も拡大している。

学術的意義・評価 : アホウドリ類の中でもっとも数が少なく、世界的希少種である。また鳥島の繁殖早期に尖閣諸島から飛来したと考えられる標識されていない若鳥が観察されること、また両島の個体群の越冬海域が異なることを示唆する調査例や観察例が得られているなど、今後明らかにすべき学術的な意義は高い。

生存に対する脅威 : 主要繁殖地の鳥島は火山島であり、南小島が非火山島であることは重要である。

特記事項 : 国指定特別天然記念物(1965年)。国内希少野生動植物種(1993年)。IUCNカテゴリ : Vulnerable (VU)。

原記載 : Pallas, 1769, Spicil. Zool., 1(5) : 28. (Kamchatka).  
 参考文献 : アホウドリ基金(代表 長谷川博), 2002. 鳥島、63年ぶりに噴火! アホウドリへの影響は? オキノタユウ通信, (7) : 1-12.  
 Hasegawa, H., 1984. Status and conservation seabirds in Japan, with special attention to the Short-tailed Albatross. Status and Conservation of the World's Seabirds, ICBP Technical Publication No.2, 473-500.  
 長谷川 博, 1995. 風にのれ! アホウドリ. フレーベル館, 東京, 104pp.  
 長谷川 博, 1998. 2. アホウドリ. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック”, 水産庁編, (社)日本水産資源保護協会, 東京, 392-293.  
 池原貞雄・下謝名松栄, 1971. 尖閣列島の陸生動物. “尖閣列島学術調査報告書”, 琉球大学編, 琉球大学, 85-140.  
 百瀬邦和, 2002. アホウドリ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—2鳥類”, 環境省編, 自然環境研究センター, 東京, 134-135.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. アホウドリ. 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 295.  
 佐藤文男 2009. 鳥島初寝崎の新繁殖地でのアホウドリ繁殖つがい数の増加. 山階鳥類学雑誌, 40(2) : 139-143.

参考資料 : 沖縄テレビ放送, 2002. 尖閣諸島南小島と北小島における2002年2月25日-27日及び5月7日-8日の素材映像.  
 沖縄テレビ放送, 2003. 風にのって復活への離陸 尖閣諸島のアホウドリ. 2003年8月17日放映。

執筆者名 : 河野裕美・水谷 晃

和名 : オオミズナギドリ  
 分類 : ミズナギドリ目 ミズナギドリ科  
 学名 : *Calonectris leucomelas* (Temminck, 1836)  
 英名 : Streaked Shearwater  
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 該当なし

形態 : 体サイズは、高緯度よりも低緯度で繁殖する個体群の方が小さい傾向があり、また各個体群内の雄は雌よりも大きい。嘴は淡青色を帯びた桃色、足は淡紫桃色。頭部は白色で頭頂に黒縦点がある。背面は暗灰色で羽縁は白色。下面は翼下面を含めて白色。

分布の概要 : 主に日本で繁殖するミズナギドリで、北海道から沖縄まで繁殖地がある。県内では八重山諸島仲ノ神島、尖閣諸島南小島と黄尾嶼で繁殖することが知られている。

生態的特徴 : 仲ノ神島では、3月に周辺海域に渡来し、巣穴の掘削や修復を開始する。6月に1卵を産下、8月に

<鳥類>

- 孵化する。抱卵日数は50～55日とされている。成鳥は育雛期間を経て10月中旬までに幼鳥を残して先立って渡去する。幼鳥も11月上旬までに巣立ちし、仲ノ神島周辺海域から渡去する。
- 生息地の条件：一般に、樹木や灌木のある温帯森林性島嶼で繁殖する。仲ノ神島では矮性化したガジュマル以外の樹木はなく、主に草地の土壌層に巣穴を掘って繁殖する。ガジュマル群落の下床や海岸転石帯の岩の累積した隙間に露出して直接営巣産下する個体もいる。
- 現在の生息状況：仲ノ神島ではほぼ全域で営巣するが、平地や斜面では巣穴密度が局所的に高い。巣穴密度と利用率、面積をもとに、同島の繁殖成鳥数は約5,600羽と推定されている。尖閣諸島における近年の記録はない。
- 学術的意義・評価：仲ノ神島は最南端の繁殖地であり、体サイズは温帯で繁殖する個体群よりも顕著に小さい。亜熱帯海洋環境での本種の適応を知る上で、学術的意義は高い。

仲ノ神島におけるオオミズナギドリ の計測値. Yamamoto et al. 2015 より改変.

	体重 (g)	露出嘴峰長 (mm)	自然翼長 (mm)	フシヨ長 (mm)
雄 (n=43)	516±54 (410-632)	48.4±1.5 (44.8-52.9)	299±8 (273-323)	50.4±1.4 (47.6-54.1)
雌 (n=46)	443±56 (348-680)	44.4±1.4 (41.1-47.3)	290±7 (271-303)	47.3±1.3 (45.4-50.1)

- 生存に対する脅威：仲ノ神島は国の天然記念物に指定され、上陸が制限されているため、人為的攪乱等からは守られている。同島にはサキシママダラやクマネズミが生息し、本種の卵を捕食することもあるが、現状では海鳥の繁殖に脅威を与えていると判断されるほどの観察例はない。台風等による裸地化や降雨が、巣穴の崩壊と卵や雛の埋没をもたらすことがあり、年によっては大規模な巣穴崩壊に至ることも報告されている。

- 特記事項：IUCN カテゴリー：Near Threatened (NT)。
- 原記載：Temminck, 1835. Pl. col., 99 : pl. 587 (Japan).
- 参考文献：池原貞夫・下謝名松栄, 1971. 尖閣列島の陸生動物. “尖閣列島学術調査報告書”, 琉球大学編, 琉球大学, pp. 85-140.
- 河野裕美・安部直哉・真野 徹, 1986. 仲ノ神島の海鳥類. 山階鳥類研究所研究報告, 18(1): 1-27.
- 河野裕美・長谷川英男・子安和弘, 1995. 仲ノ神島海鳥繁殖地に棲息する野生ネズミの消化管内容物と寄生ぜん虫. 沖縄島嶼研究, (13): 29-39.
- 河野裕美・水谷 晃, 2016. 八重山諸島仲ノ神島. 月刊海洋, 48 (9): 421-425.
- Kohno, H. and Ota, H., 1991. Reptiles in a seabird colony : herpetofauna of Nakanokamishima Island of the Yaeyama Group, Ryukyu Archipelago. Island Studies in Okinawa, (9) : 73—89.
- 倉田 篤, 1966. 八重山群島西表島の鳥類. 山階鳥類研究所研究報告, 4(5) : 90-102.
- 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.
- 高良鉄夫, 1969. 尖閣列島の海鳥について. 琉球大学農学部学術報告, (16) : -13.
- 高良鉄夫, 1970. 琉球中ノ神島の海鳥. 山階鳥類研究所研究報告, 6(1/2) : 188-194.
- 山本誉士・河野裕美・水谷 晃・依田 憲, 2015. 仲ノ神島におけるオオミズナギドリの巣穴構造と繁殖個体数推定. 山階鳥学誌, 46: 67-81.
- Yamamoto, T., Kohno, H., Mizutani, A., Yoda, K., Matsumoto, S., Kawabe, R., Watanabe, S., Oka, N., Sato, K., Yamamoto, M., Sugawa, H., Karino, K., Shiomi, K., Yonehara, Y., Takahashi, A., 2016. Geographical variation in body size of a pelagic seabird, the streaked shearwater *Calonectris leucomelas*. J. Biogeography, 43: 801-808.

執筆者名：河野裕美・水谷 晃

- 和名：ミゾゴイ
- 分類：ペリカン目 サギ科
- 学名：Gorsachius goisagi (Temminck, 1836)
- 英名：Japanese Night Heron
- カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態：全長約50cm。雌雄同色。頭部から頸、側胸、上面は赤褐色で、頭上は暗赤褐色。後頭に短い冠羽がある。虹彩は橙黄色で、目の周囲と目先は水色。嘴は太く短め。前頸から胸は淡黄褐色で、喉から下面には暗褐色の縦斑がある。脚は緑黄色。翼上面の雨覆は赤褐色で、風切は黒褐色。翼先端は赤褐色で外側初列風切の先端に小さな白斑がある。

近似種との区別：近縁のズグロミゾゴイ成鳥の上面はより赤色味が強く、眼の周囲と目先は青色で、頭部に黒い冠羽がある。

分布の概要：繁殖地として知られているのは日本のみで、本州、九州、四国、伊豆諸島などで夏鳥として繁殖する。台湾や濟州島でも各1例ずつ繁殖記録があるという。冬期にはフィリピンや中国南部、沖縄や台湾などで越冬するとされる。

生態的特徴：繁殖地では夏鳥として渡来し、平地から低山帯の暗い林に好んで生息し繁殖する。サワガニやミミズ、昆虫類、魚類、陸産貝類などを餌にし、夜間採食性がある。大木の地上から7～20mの横枝にキジバトの巣のような皿形の巣を造り、3～4個の汚白色無斑の卵を産む。抱卵期間は20～27日で孵化し、その後約35日親に育てられ、巣立ちする。9～11月頃には越冬地に移動する。

生息地の条件：うっそうとした暗い森林地域および餌場となる河川や池沼、湿地などの環境。

- 現在の生息状況** : 県内各地にごく少数が旅鳥として通過、もしくはその一部が越冬しているものと思われる。うっそうとした森林地域の林道沿いで見られることが多いが、市街地のまとまった森林のある公園や農耕地近くの墓地林などでも見られることがある。また、通過の際に落鳥し保護される個体も県内各地でしばしば見られる。
- 学術的意義・評価** : 日本だけで繁殖する種として重要である。
- 生存に対する脅威** : 休息地となる森林部の人為的開発による森林伐採や餌場となる河川、湿地、池沼などの改変、改修。河川や湿地、林道沿いなど餌場となる環境での除草剤の使用。
- 特記事項** : 数少ない旅鳥や冬鳥としての渡来種であるが、数が少なく、中継地および越冬地の一部としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリーに準拠した。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。IUCN カテゴリー : Endangered (EN)。
- 参考文献** : 川上和人, 2014. ミゾゴイ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 140-141.  
環境省編 2016. ミゾゴイの保護の進め方. 自然環境局 野生生物課, 35pp.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
樺葉忠雄 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.

**執筆者名** : 高原建二

**和名** : **ズグロミゾゴイ**  
**分類** : ペリカン目 サギ科  
**学名** : *Gorsachius melanolophus* (Raffles, 1822)  
**英名** : Malayan Night Heron  
**カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

**形態** : 全長約 47 cm。成鳥は上面全体が赤褐色、下面は淡褐色で黒色の縦斑がある。頭頂部は黒く後頭に冠羽を持つ。幼鳥は全体に白色と黒色の斑紋が散在し、赤みはない。

**近似種との区別** : ミゾゴイは上面の赤みが少なく頭は暗赤褐色で黒くはない。冠羽が目立たない。嘴は短く、下面の縦斑が濃く明瞭であるなどの相違点がある。

**分布の概要** : インド、スリランカ、タイ、南中国、スンダ諸島、ボルネオ、フィリピンなどに分布。国内では宮古諸島と八重山諸島 (石垣島、竹富島、小浜島、黒島、西表島、与那国島) でも留鳥として生息している。

**近縁な種及び群との分布状況の比較** : ミゾゴイは少数が冬鳥や旅鳥として記録されている。

**生態的特徴** : 森林だけでなく校庭や民家の庭などにも現れ、池の魚やミミズ類を捕食している様子が観察される。森林の沢に面した樹上で繁殖している。

**生息地の条件** : 繁殖のための鬱蒼と茂った森林、湿地、草原など多様な自然環境。

**現在の生息状況** : 日本国内ではこれまで八重山諸島 (石垣島、小浜島、黒島、西表島、与那国島) にのみ留鳥として生息しているとされていたが、最近宮古諸島の宮古島や伊良部島、多良間島でも留鳥として生息確認がされている。また、新城島 (上地島) にも生息している。しかしながら、個体数は少ないものと思われる。

**学術的意義・評価** : 東洋区系の鳥類で、国内北限の個体群として重要である。

**生存に対する脅威** : 森林開発等での森林伐採など生息環境の悪化が懸念される。

**特記事項** : 2 月頃から早朝ボォー、ボォーと低い声で鳴き、生息がわかる。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

**原記載** : Raffles, 1822. Trans. Linn. Soc., London, 13: 326. (W. Sumatra).

- 参考文献** : 環境省編, 2002. ズグロミゾゴイ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック 2 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 228-229.  
川上和人, 2014. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 142-143.  
五百沢日丸他, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥. 文一総合出版.  
真木広造・大西敏一, 2000. 日本の鳥 590. 平凡社.  
宮古野鳥の会編, 2014. 宮古野鳥の会 40 周年記念誌. 106pp.  
日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ズグロミゾゴイ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 303.  
沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 2005. ズグロミゾゴイ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, p. 63.  
沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
高原建二, 2008. 第 3 章 宮古諸島の鳥類研究史と鳥類相. 宮古の自然と文化第 2 集-ミラクルに輝く八の島. ボーダーインク, 那覇, 45-55.  
砂川栄喜, 2011. 沖縄宮古諸島の野鳥 (亜熱帯の水辺・山野の野鳥). ボーダーインク. 那覇. 238pp.  
宇山大樹, 2011. 野鳥の記録与那国島 (2002 年 3 月~2007 年 1 月の 678 日間の観察記録). 文一総合出版, 223pp.  
山階芳麿, 1980. 復刻版 日本の鳥類とその生態 第 2 巻. 梓書房, 東京.

**執筆者名** : 庄山 守\*・高原建二(追補) \*前回改訂版 (2005) における庄山による記載内容を一部見直した。



- 和名 : ムラサキサギ  
 分類 : ペリカン目 サギ科  
 学名 : *Ardea purpurea manilensis* Meyen, 1834  
 英名 : Purple Heron  
 方言名 : サヤー  
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 該当なし
- 形態 : 全長約 79 cm。大型のサギ類で嘴と頸は細長い。成鳥は繁殖羽では頭部から頸にかけて茶色で、頭上は青色味のある黒色。後頭には細長い黒い冠羽が 2 本ある。喉は白色で上面は灰黒色。嘴は橙赤色で、虹彩と眼先は黄色。頬から側胸にかけて太い黒色の縦斑がある。背には青灰色と褐色のかざり羽がある。風切の殆どが灰黒色で、初列雨覆は黒く、その他の雨覆は灰褐色。幼鳥は全体が淡褐色で頸の黒色部や冠羽がない。
- 近似種との区別 : アオサギはやや大きく、全体的に白っぽい。飛翔時の雨覆と風切羽のコントラストが鮮明である。  
 分布の概要 : 沖縄県内では、以前は八重山諸島の西表島では留鳥とされていたが、最近、宮古諸島の池間島（湿原）で 2 巣繁殖し、隣接する宮古島でも普通に見られるようになった。おそらく、宮古島でも繁殖している可能性がある。沖縄諸島や大東諸島では迷鳥であり、沖縄島以北でも迷鳥として全国的に記録がある。
- 生態的特徴 : 河川や水田、湿地、牧草地、農耕地など開けた環境で餌を採ることが多い。日本ではアオサギのように繁殖コロニーを作らない。水田や湿地などで水性昆虫類、甲殻類、カエル、魚類などを捕食する。時には小型鳥類を捕食することもある。淡い青緑色の卵を 1 腹 4~5 個産み、雌雄で約 25 日抱卵、約 3 週間の育雛の後、雛は巣立つとされる。
- 生息地の条件 : 人が近づけないような池沼等に面した森林。広い湿地などの餌場。  
 現在の生息状況 : 日本鳥学会編 (2012) では、沖縄諸島（沖縄島・伊平屋島・渡嘉敷島・久米島）、宮古・八重山諸島（宮古島・石垣島・小浜島・与那国島）は冬鳥とされ、大東諸島は迷鳥としている。また、留鳥として繁殖している地域は池間島と西表島とされている。しかしながら、石垣島では繁殖し（髙原ほか未発表）、おそらく、小浜島でも留鳥であろう。こうした島々の河川、水田、牧草地、農耕地、湿地、マングローブ林などで見られるが、数は少ない。
- 学術的意義・評価 : 日本国内では西表島、石垣島のほか、宮古諸島池間島にのみ少数繁殖する大型サギ類である。  
 生存に対する脅威 : 営巣地や休息地となる森林伐採など生息環境の悪化が懸念される。  
 特記事項 : アオサギのように海岸や干潟に出ることはない。IUCN カテゴリ : Least Concern (LC)\* \*IUCN は種として評価。本県改訂は亜種ムラサキサギを選定している。
- 原記載 : Meyen, 1834. Nova Acta Acad. Caes. Leop. Carol., 16, Suppl., 102 (Philippines).  
 参考文献 : 五百沢日丸他, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥. 文一総合出版.  
 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
 真木広造・大西敏一, 2000. 日本の鳥 590. 平凡社.  
 宮古野鳥の会編, 2014. 宮古野鳥の会 40 周年記念誌, 106pp.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ムラサキサギ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 303-304.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 髙原建二・砂川栄喜・比嘉邦昭・宮城国太郎・高良淳司・金城輝男・仲地邦博・長嶺 隆, 2008. 沖縄県内における 2003 年から 2006 年までの稀な鳥類の飛来と希少な繁殖記録について. 南島文化 (30) : 127-144. (沖縄国際大学南島文化研究所紀要)  
 榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版, 647pp.  
 山階芳麿, 1980. 復刻版 日本の鳥類とその生態 第 2 巻. 梓書房.
- 執筆者名 : 庄山 守\*・髙原建二(追補) \*前回改訂版 (2005) における庄山による記載内容を一部見直した。

- 和名 : シロチドリ  
 分類 : チドリ目 チドリ科  
 学名 : *Charadrius alexandrinus* Linnaeus, 1758  
 英名 : Kentish Plover  
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU)
- 形態 : 全長 17cm。雄の繁殖羽は頭頂から後頭部は橙褐色。前頭には黒い斑があり、額は白く、眉斑までつながる。嘴は細長く、黒色で、過眼線は黒褐色。喉から後頸にかけては白く、胸には中央で切れる黒い帯がある。翼上面と背は灰褐色で、翼には白色の明瞭な翼帯がある。下面は白色で、脚はピンク味のある黒色。雌及び非繁殖羽は頭上や耳羽が灰褐色で、前頭の黒斑や胸の黒帯はない。幼鳥は雌に似ているが、頭部や背は淡褐色。バフ色羽縁があり、脚の色は淡い紅色。
- 近似種との区別 : コチドリは目の周りに黄色のアイリングがあり、やや小さい。イカルチドリは尾羽が長く、やや大きい。メダイチドリはやや大きく、後頸部が白くなく、嘴は太く短い。
- 分布の概要 : 全国的に留鳥として生息し、県内でも少数が繁殖している。冬期には渡来する個体も見られる。  
 生態的特徴 : 県内の海岸砂地や埋め立て地など荒地などで少数が生息し繁殖している。冬期には渡来する個体も見られ、数は格段に多くなる。

- 生息地の条件 : 海岸砂浜、海岸近くの埋め立て地やまばらな草原  
 現在の生息状況 : 海岸の砂浜や埋め立て地で、夏鳥のコアジサシと同所的に繁殖している。  
 学術的意義・評価 : 県内で繁殖する唯一のチドリ類である。  
 生存に対する脅威 : 人気の少ない砂浜や埋め立て地などで繁殖していることが多く、砂浜海岸への4WDの乗り入れや無人島の観光開発等による人為的利用により、営巣活動が影響を受け、数が減少していることが考えられる。
- 特記事項 : 留鳥として生息しているものについては、分類学的な検討も含め今後詳細な調査の必要性がある。  
 IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
- 原記載 : Linnaeus, 1758. Syst. Nat., ed. 10, 1: 150. (Egypt).  
 参考文献 : 守屋年史, 2014. シロチドリ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 170-171.  
 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
 日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. シロチドリ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 319.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版, 647pp.  
 山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京。
- 執筆者名 : 原戸鉄二郎\*・髙原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における原戸による記載内容を一部見直した。

- 和名 : セイタカシギ  
 分類 : チドリ目 セイタカシギ科  
 学名 : *Himantopus himantopus himantopus* (Linnaeus, 1758)  
 英名 : Black-winged Stilt  
 カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

- 形態 : 全長 37 cm。成鳥は頭頂から眼の周囲にかけて黒く、額から頬にかけて喉から下部の下面は白色。頭部全体が白色の個体もいる。嘴は黒色で細長く、先端は尖る。雄の上面は緑色光沢のある黒色で、雌の上面は黒褐色。背中央から腰、尾は白色。足はなかり長く、ピンク色を呈する。
- 近似種との区別 : 近縁種のソリハシセイタカシギは嘴が上方に反り返る。また、体上面はより白色部が多い。
- 分布の概要 : 国内では全国的に数少ない旅鳥や冬鳥としての記録が見られる。千葉県や東京都、愛知県、大阪府では繁殖記録が見られ、その一部千葉県では留鳥化している。県内では本土に比べ飛来する個体数は多い。国外ではフランスからイベリア南部、サハラ以南のアフリカ、マダガスカル、東及び中央アジア、中国北部から中央部、インド大陸、インドシナと台湾など広い範囲に分布している。
- 生態的特徴 : 繁殖期は5~7月で、植被率の低い乾燥した砂泥地に浅いくぼみを作り、小石や植物片などを敷いて3~4個の卵を産むとされる。雌雄交代で抱卵し、抱卵期間は22~25日で孵化。主に群れで行動し、繁殖もコロニー性を持つとされる。浅い水辺を歩き回り、昆虫類や小魚、甲殻類などを餌にしている。
- 生息地の条件 : 越冬期の生息地となる砂泥質の干潟や湿地、河川、水田、タイモ及びイグサ栽培地  
 現在の生息状況 : 県内に旅鳥及び冬鳥として、河川とその河口部、干潟、内陸湿地に飛来し越冬する。1998年には沖縄島南部の糸満市で繁殖記録がある。淡水性が強い。近年渡来数は増加もしくは安定傾向にある。なお、豊見城市と根遊水地には毎年のように渡来し、時には60羽以上が越冬する。また、しばしば越夏個体も見られる。
- 学術的意義・評価 : 県内における渡来数は県外に比較すると少なくないが、本種の渡りを考える上で重要である。  
 生存に対する脅威 : 越冬期の生息地となる干潟や湿地などの埋め立てや水田、タイモ及びイグサ栽培地などで畑地化が進行し、さらに放棄された水田等が目立ってきている。したがって、餌場となる環境の減少傾向が進行している。
- 特記事項 : 旅鳥や冬鳥としての渡来種(一部で繁殖例有り)であるが、中継地や越冬地の一部としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト2014のカテゴリーに準拠した。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は基亜種セイタカシギを選定している。
- 原記載 : Linnaeus, 1758. Syst. Nat., ed. 10, 1: 151 (S. Europe).  
 参考文献 : 天野一葉・前川聡編, 2003. 平成15年度環境省請負業務 モニタリングサイト1000事業. “シギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査報告書”, 世界自然保護基金ジャパン (WWFJ).  
 天野一葉編, 2004. 平成16年度環境省請負業務 モニタリングサイト1000事業. “シギ・チドリ類等調査 春期速報”, 世界自然保護基金ジャパン (WWFJ).  
 天野一葉編, 2004. 平成16年度環境省請負業務 モニタリングサイト1000事業. “シギ・チドリ類等調査 秋期速報”, 世界自然保護基金ジャパン (WWFJ).  
 環境省編, 2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 2 鳥類. 自然環境研究センター, 東京.  
 藤井 幹, 2014. セイタカシギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 184-185.  
 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京。

真木広造・大西敏一, 2000. 日本の野鳥 590. 平凡社, 東京.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.  
 沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. セイタカシギ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 320.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
 沖縄野鳥研究会編, 2010. 改訂版沖縄の野鳥. 新星出版, 那覇, 367pp.  
 榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版, 647pp.  
 山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名 : 小高信彦\*・嵩原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における小高による記載内容を一部見直した。

和名 : オオソリハシシギ

分類 : チドリ目 シギ科

学名 : *Limosa lapponica* (Linnaeus, 1758)

英名 : Bar-tailed Godwit

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 全長約 41 cm。夏羽では、雄は上面が赤褐色で、黒色の縦斑と白斑があり、顔から下面全体は赤褐色。雌は雄より大型で、下面の赤褐色が淡く、冬羽に近い個体もいる。冬羽では上面は灰褐色で黒褐色の縦斑があり、下面は淡褐色。嘴の基部はピンク色で先端は黒色を呈し、少し上にそる。脚は黒色で短め。

近似種との区別 : オグロシギの嘴はまっすぐで、脚と頸は長く、体型は細めに見える。

分布の概要 : ユーラシア大陸の北部で広く繁殖し、冬季にはアフリカ、東南アジア、オーストラリアなどで越冬する。国内では北海道から沖縄まで数少ない旅鳥として普通に見られる。

生態的特徴 : 国内では渡り期に干潟や海岸近くの水田、ハス田、タイモ栽培地などに生息し、少数が通過する。繁殖地はツンドラ地域の草地で、4卵を産み、雌雄で20~21日間抱卵する。餌は甲殻類、貝類、昆虫類などを利用する。

生息地の条件 : 干潟や海岸近くの水田、タイモ栽培地など。

現在の生息状況 : 干潟などの減少傾向により、環境省によるモニタリング調査では近年春期に大幅に個体数が減少していることが指摘されている(守屋, 2014)。県内でも旅鳥として、春と秋の渡り期に少数が通過する。

学術的意義・評価 : 県内における渡来数は少ないが、本種の渡りを考える上で重要である。

生存に対する脅威 : 干潟の埋め立てや海岸近くの水田、タイモ栽培地の畑地化など生息地の減少傾向がある。

特記事項 : 数少ない旅鳥としての渡来種であるが、中継地の一部としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト2014のカテゴリーに準拠した。IUCNカテゴリー : Near Threatened (NT)。

参考文献 : 守屋年史, 2014. オオソリハシシギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 178-179.

黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.

執筆者名 : 嵩原建二

和名 : ホウロクシギ

分類 : チドリ目 シギ科

学名 : *Numenius madagascariensis* (Linnaeus, 1766)

英名 : Far Eastern Curlew

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 全長約 61 cm。大型のシギで嘴は長く、大きく下に湾曲する。雌雄同色。全体は褐色で、下腹部から下尾筒は淡褐色。頭部から頸、胸、腹部にかけて黒褐色の縦斑がある。背および翼上面各羽の軸斑は太く黒褐色で、羽縁は褐色。翼下面は褐色で黒褐色斑がある。繁殖羽では全体的に橙褐色味がある。

近似種との区別 : よく似ているダイシャクシギは背中央から腰、上尾筒、尾上面が白色。腹部と翼下面も白色である。

分布の概要 : シベリア東部と中国北東部で繁殖し、冬季には東南アジアとオーストラリアで越冬する。日本では数少ない旅鳥として春秋に各地を通過する。

生態的特徴 : 渡り期に広い干潟や海岸近くの水田、埋め立て地の水溜まりなどで見られる。繁殖地では湿地や沼地で営巣し、2~3つがいの小コロニーを形成して繁殖する。卵数は4卵。餌として甲殻類や昆虫、カエル類などを食べる。渡り期には広い砂泥質干潟で長い嘴を深く差し込みカニ類やゴカイ類などをひっぱり出して食べる光景がよく見られる。

生息地の条件 : 広い海岸干潟やマングローブ林のある干潟、海岸近くの水田、埋め立て地の水溜まり。

現在の生息状況 : 全国的に観察される数が少ないとされ、県内でも春秋の渡り期にごく少数が旅鳥として通過する。

一部で越冬個体も見られることがある。なお、参考としてモニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査ニュースレター（環境省多様性センター・NPO 法人バードリサーチ）による2014年春期概要によると、全サイトの個体数合計は2013年春期で161個体、2014年春期で171個体となっている。

- 学術的意義・評価： 県内における渡来数は少ないが、本種の渡りを考える上で重要である。  
 生存に対する脅威： 海岸干潟の埋め立て、水田の畑地化などが進行し、生息環境が減少傾向。  
 特記事項： 数少ない旅鳥としての渡来種であるが、中継地の一部としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト2014のカテゴリーに準拠した。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。IUCNカテゴリー：Endangered (EN)。  
 参考文献： 黒田長久編，1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社，東京。  
 藤井 幹，2014. ホウロクシギ，レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編，ぎょうせい，東京，180-181。  
 日本鳥学会編，2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会，三田，438pp。  
 榛葉忠雄，2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.

執筆者名： 高原建二

和名： ツルシギ  
 分類： チドリ目 シギ科  
 学名： *Tringa erythropus* (Pallus, 1764)  
 英名： Spotted Redshank  
 カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態： 全長約32 cm。雌のほうがやや大型。夏羽では全身黒っぽく、背には白斑がある。雄は頭頂と下尾筒中央が黒色であるが、雌ではそれぞれ灰色と白色である。冬羽では上面は灰色で背面の羽縁は白色、その内側に黒褐色の斑がある。下面は白色で、頸から脇に灰褐色の斑がある。嘴は黒色で細長く、まっすぐである。下嘴の基部が赤色。足は赤色で長い。

近似種との区別： 良く似ているアカアシシギはやや小さく、嘴や足が短い。  
 分布の概要： ユーラシア大陸北部で繁殖し、アフリカや東南アジアで越冬する。国内では北海道から沖縄まで旅鳥として普通に見られる。

生態的特徴： 通過する際に干潟や海岸近くの水田、タイモ栽培地、ハス田などで生息する。繁殖地では森林近くの沼地や湿地の地上に巣をつくり、4卵を産む。餌は昆虫、カニ類、ゴカイ類の他、カエル類やイモリ、小魚を食べる。

生息地の条件： 干潟や水田、タイモ栽培地、湿地など。  
 現在の生息状況： 県内各地に数少ない旅鳥として普通に飛来し、通過する。  
 学術的意義・評価： 県内における渡来数は少ないが、本種の渡りを考える上で重要である。

生存に対する脅威： 干潟や湿地の埋め立て、水田やタイモ栽培地の畑地化など。  
 特記事項： 数少ない旅鳥としての渡来種であるが、中継地の一部としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト2014のカテゴリーに準拠した。IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)。

参考文献： 守屋年史，2014. ツルシギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編，ぎょうせい，東京，172-173。  
 日本鳥類目録編集委員会編，2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会，帯広，345pp。  
 日本鳥学会編，2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会，三田，438pp。  
 沖縄野鳥研究会編，1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版，浦添。  
 沖縄野鳥研究会編，2002. 沖縄の野鳥. 新報出版，那覇，335pp.

執筆者名： 高原建二

和名： アカアシシギ  
 分類： チドリ目 シギ科  
 学名： *Tringa totanus ussuriensis* Buturlin, 1934  
 英名： Redshank  
 カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態： 全長27~29 cm。雌雄同色。繁殖羽は頭上から上面は灰褐色で、黒褐色の縦斑が密にある。過眼線は暗褐色で、アイリングは白く明瞭。嘴は長く、その基部は赤味があり、先端は黒い。腹部は白く、脇に黒褐色縦斑がある。飛翔時、背中央から腰、尾上面と翼上面の次列風切、内側初列風切は白色。尾上面には暗褐色の横斑がある。非繁殖羽は頭上と上面は灰褐色で、羽縁は白色。脚は橙色か朱色。

近似種との区別： ツルシギの冬羽に似るが、ツルシギの嘴はアカアシシギよりも細長く、下嘴が朱色で、飛翔時はアカアシシギのように、腰や次列風切羽が白くないことで区別される。

分布の概要： 国内では北海道東部では夏鳥として繁殖するが、全国的には旅鳥として飛来する。  
 生態的特徴： 繁殖期は4~6月で、草地の草の根元に皿状の巣を造り、3~4個の卵を産むとされる。雌雄で抱卵し、22~29日で孵化し、孵化した雛は早成性ですぐに巣を離れる。巣外での育雛期は25~35日とされ、その後雛は独立する。繁殖地では複数のつがいが集まり、ルーズコロニーを形成するという。渡りの時期は、砂泥質の干潟や水田、イグサ栽培地、タイモ栽培地などに立ち寄り、その表面をつ

＜鳥類＞

いばんだりして、小動物を餌にしている。

- 生息地の条件： 渡りの時期は湿地や干潟、河口、水田、イグサ栽培地、タイモ栽培地など。  
現在の生息状況： 県内では湿地、干潟、河口部、水田、イグサ栽培地、タイモ栽培地などに冬鳥として越冬する。近年渡来数は増加傾向にある。  
学術的意義・評価： 県内における渡来数は少ないが、本種の渡りを考える上で重要である。  
生存に対する脅威： 干潟の埋め立てや水田、タイモ、イグサ栽培地の畑地化等が進行し、生息地の減少傾向があるため、渡りの中継地や越冬地として、エネルギー供給に影響がでる可能性がある。  
特記事項： 数少ない旅鳥や冬鳥としての渡来種であるが、数が少なく、中継地や越冬地の一部としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリーに準拠した。宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種アカアシギを選定している。  
原記載： Oberholser, 1900. Proc. U. S. Nat. Mus., 22: 207 (Ladak, Central Asia).  
参考文献： 天野一葉・前川聡編, 2003. 平成 15 年度環境省請負業務 モニタリングサイト 1000 事業. “シギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査報告書”, 世界自然保護基金ジャパン (WWFJ).  
天野一葉編, 2004. 平成 16 年度環境省請負業務 モニタリングサイト 1000 事業. “シギ・チドリ類等調査 春期速報”, 世界自然保護基金ジャパン (WWFJ).  
天野一葉編, 2004. 平成 16 年度環境省請負業務 モニタリングサイト 1000 事業. “シギ・チドリ類等調査 秋期速報”, 世界自然保護基金ジャパン (WWFJ).  
環境省編, 2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック 2 鳥類. 自然環境研究センター, 東京.  
藤井 幹, 2014. アカアシギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 174-175.  
黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. アカアシギ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 319-320.  
沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.  
日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.

執筆 者 名： 小高信彦\*・髙原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における小高による記載内容を一部見直した。

- 和名： タカブシギ  
分類： チドリ目 シギ科  
学名： *Tringa glareola* Linnaeus, 1758  
英名： Wood Sandpiper  
カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態： 全長約 21 cm。雌雄同色。夏羽は頭頂と上面は黒褐色で、白色の小斑がある。顔から胸、脇は白色で、黒褐色の縦斑が見られ、腹部は白色である。冬羽では背、胸の斑が不明瞭となる。飛翔時、翼下面が白っぽく、腰も白色になる。嘴は黒色でまっすぐ。脚は黄緑色。  
近似種との区別： クサシギの上面は暗緑褐色で、アイリングと眉斑はより明瞭。  
分布の概要： ユーラシア大陸北部で広く繁殖し、冬季にはアフリカ、インド、東南アジアに渡り越冬する。国内では北海道から沖縄まで旅鳥として普通に通過し、関東以南の地域で越冬する。県内では越冬個体が多く見られる。  
生態的特徴： 通過時や越冬地として水田やハス田、タイモ栽培地、イグサ栽培地、湿地などで生息する。広い干潟にはあまり出て行かない。繁殖地では森林に囲まれた湿地や荒地の地上に営巣し、4卵を産み、雌雄で約 22~23 日間抱卵する。餌は水性昆虫や小型無脊椎動物を食べる。  
生息地の条件： 水田やハス田、タイモ栽培地、イグサ栽培地、湿地。  
現在の生息状況： 環境省によるモニタリング調査結果を用いた研究では春期や秋期の個体数が大幅に減少していることが指摘されている(守屋, 2014)。県内では旅鳥としての通過個体もいるものと考えられるが、主に越冬個体が県内各地で見られ、数も多いように思われる。  
学術的意義・評価： 県内における渡来数は多いが、本種の渡りを考える上で重要である。  
生存に対する脅威： 水田やタイモ栽培地、イグサ栽培地の畑地化、湿地の埋め立てなど生息環境の減少傾向がある。  
特記事項： 旅鳥や冬鳥として普通に渡来する種であるが、中継地や越冬地の一部としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリーに準拠した。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC).  
参考文献： 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
守屋年史, 2014. タカブシギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 176-177.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版, 647pp.

執筆 者 名： 髙原建二

- 和名 : タマシギ  
 分類 : チドリ目 タマシギ科  
 学名 : *Rostratula benghalensis benghalensis* (Linnaeus, 1758)  
 英名 : Painted Snipe  
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態 : 全長約 24 cm。雄は頭頂から上面は暗褐色で頭に黄褐色の頭中央線がある。上面には灰色と白色の黄色斑がある。肩から背にかけて後ろからみるとV字状の黄褐色の線が見られ、肩から胸にかけては太い白いラインがある。目の周囲は勾玉状の黄褐色斑があり、喉から胸部にかけては灰色がかかる褐色をしている。下面は白色である。雌は雄に比べてやや大きく、目の周りは勾玉状の斑は白色。顔から胸にかけては赤褐色をしており、上面は細かい灰色と黒褐色の横斑がある。肩から胸にかけては雄と同様の白いラインになる。
- 近似種との区別 : 外見的にはタシギやオオジシギなどのジシギ類に似ているが、やや大きくためて尾羽がないように見える。また、眼の周りには勾玉状の淡色斑は見られない。飛びかたはシギ類よりゆっくりでクイナ類のように脚をぶらさげて飛ぶ。ジシギ類とは餌の採り方が異なり、嘴で左右を探りながら餌をあさる。
- 分布の概要 : 世界に2亜種があり、主に熱帯から温帯のアフリカ・アジア・オーストラリアなどに分布する。日本では主に本州中部以南で留鳥とされ、繁殖分布の北及び東の端は埼玉県や茨城県、千葉県などの関東地方とされている。県内では沖縄島や西表島、石垣島、与那国島に留鳥として分布するが、個体数はさほど多くはなく、観察される機会は少ない。県内で見られる個体の一部は、おそらく旅鳥や冬鳥としての渡来個体であろう。
- 生態的特徴 : 平地の水田や田イモ畑、河川などの湿地に生息する。繁殖期は4~9月とされ一妻多夫の繁殖生態を持つ。繁殖期には雌が夕方から夜にかけて「コッコー、コッコー」と連続してよく鳴く。なわばりを持ち、地上の草かげに枯れ草などを積み、巣をつくる。1腹3~6個の卵を産む。雄のみが抱卵し、19日から20日で孵化する。雛の世話も雄がみる。餌は主に貝類や環形動物、甲殻類、昆虫類などの動物食であるが、草の種子も食べる。うす暗い夕方よく活動するので幾分夜行性であると思われる、また泳ぐこともできる。イソシギのように尾羽を上下することがある。草かげに隠れるようにすんでいるため観察される機会は少ない。
- 生息地の条件 : 平地の水田・タイモ栽培地・い草栽培地・河床部に草地のある流れのゆるやかな河川などの環境が必要とされる。
- 個体数の動向 : 水田やイグサ栽培地の畑地化や休耕地化が進行し、さらに湿地の埋め立て等がすすんで生息地の減少傾向がある。また、沖縄島では外来種のマングースが定着しており、その捕食等で個体数が減少している可能性がある。
- 現在の生息状況 : 湿地や水田地域などに生息するが、個体数はさほど多くはない。沖縄島では1986年8月に金武町並里、2001年9月に大宜味村で、2005年7月に与那原町で、2009年10月に名護市で、2014年6月に金武町で繁殖例が見られるが、局所的である。
- 学術的意義・評価 : 本州では普通に見られるが、県内では個体数がかなり少なく、生息地域もかなり局所的である。
- 生存に対する脅威 : 生息地となる湿地の埋立てと水田やタイモ栽培地等の畑地化、休耕地化、河川部の改修などが進行し、生息地の漸減傾向が見られる。また外来種のマングースや野生化したネコなども脅威となっている可能性がある。
- 特記事項 : IUCN カテゴリ : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は基亜種タマシギを選定している。
- 原記載 : Linnaeus, 1758. Syst. Nat., ed. 10, 1: 153. (Asia).  
 参考文献 : B. F. King and E. C. Dickinson, 1975. A Field Guide to the Birds of South-East Asia. Houghton, Mifflin Company, Boston.  
 J. Mackinnon and K. Phillipps, 1993. A Field Guide to the Birds of Borneo, Sumatora, Java, and Bali, Oxford University Press, Oxford.  
 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.  
 守屋年史, 2014. タマシギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 168-169.  
 小林桂助, 1983. 原色日本鳥類図鑑. 保育社, 大阪.  
 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
 Mark A. Brazil, 1991. The Birds of Japan, Christopher Helm and A & C Black, London.  
 日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録 改訂第5版. 学習研究社, 東京, 120pp.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. タマシギ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 307-308.  
 沖縄野鳥研究会編, 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
 榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版, 647pp.  
 高原建二, 2002. 沖縄島で留鳥として生息する希少な3亜種の繁殖記録について. 沖縄県立博物館紀要, 28: 1-11.  
 高原建二・砂川栄喜・比嘉邦昭・宮城国太郎・高良淳司・金城輝男・仲地邦博・長嶺 隆, 2008. 沖縄県内における2003年から2006年までの希少な鳥類の飛来と希少な繁殖記録について. 南島文化

(30) : 127-144.

高原建二・平安山英義・大城亀信・細川太郎・新垣裕治, 2016. 名護市及び沖縄島における希少鳥類及び希少繁殖事例についての記録(2014年春から2015年秋まで). 名桜大学紀要, 21: 97-107. 琉球新報社編, 1983. 写真集沖縄の野鳥. 誠文堂新光社, 東京.

執筆者名 : 高原建二

和名 : ミフウズラ  
分類 : チドリ目 ミフウズラ科  
学名 : *Turnix suscitator* (Gmelin, 1789)  
英名 : Button Quail  
方言名 : ウジラー・ウザ・ウッサ  
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 全長 14 cm、小型でウズラに似た体型のチドリ目の鳥。頭部から上面は褐色で、顔から背にかけて白く細かな斑紋や黒褐色斑が混在する。嘴は短く、青灰色で、虹彩は淡黄色。胸は黄褐色で黒い横斑があり、腹部は橙褐色を呈する。雌は雄より大きく、頭部に灰色味があり、喉から前頸、胸部にかけて黒斑がある。脇は黒い横斑がある。脚は青灰色で趾(あしゆび)は3本。

近似種との区別 : 県内では極まれな冬鳥とされるウズラ *Coturnix japonica* は、全長 20 cm と本種よりやや大きく、全身褐色で、黄土色や赤色のまだら模様を呈し、頸や翼が短く、ずんぐりとした体型である。

分布の概要 : 薩南諸島から琉球列島に生息している。比較的乾いた荒れ地や農耕地に生息するが、群れを造ることはない。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ウズラはキジ目の鳥で、分類学的に大きくかけ離れている。本種は日本では本州中部以北で繁殖し、本州中部以南で越冬するとされている。ミフウズラは留鳥性が強く渡りを行わない。

生態的特徴 : 一妻多夫の変った習性を持ち、抱卵と育雛を行うのは雄の役目。サツマイモやキビ畑、牧草地など農耕地周辺を歩きまわりながら採食する。

生息地の条件 : 農耕地やまばらな草原など乾燥した場所を好む。

現在の生息状況 : 県内各地における農地整備事業により生息環境が単一化し、また、農薬使用の影響もあるものと思われる。個体数が減少していることが考えられる。さらに外来哺乳類のマンガースが定着した沖縄島とイタチが定着した宮古島や座間味島などでその捕食の影響が考えられ、個体数が減少傾向にあり、特に座間味島ではその生息が確認されていない(高原ら2012)。さらにまた、沖縄島や石垣島では定着した外来種であるキジと間で生息地や餌の競合が考えられる。

学術的意義・評価 : 南西諸島に特産する亜種としての重要性がある。  
生存に対する脅威 : 農耕地の整備事業による農耕地周辺の草地や小森林の消失、環境の単一化、外来哺乳類等による捕食や外来鳥類による生息地の競合による排除、餌の競合。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。  
原記載 : Gmelin, 1789. Syst. Nat., 1(2): 763. (Java).  
参考文献 : 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
中村登流・中村雅彦, 1995. 原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編), 保育社, 大阪, 220.  
日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.  
日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. ミフウズラ. “沖縄島の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 318.  
沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄島の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版, 647pp.  
高原建二・中村和雄・比嘉邦昭・奥太志・大坪弘和・上林利寛, 2012. 慶良間諸島の鳥類相について. 沖縄大学地域研究所・琉球野鳥研究会編, 沖縄大学地域研究所彙報, 第8号 : 1-43.  
山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名 : 岡 徹\*・高原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における岡による記載内容を一部見直した。

和名 : ツバメチドリ  
分類 : チドリ目 ツバメチドリ科  
学名 : *Glareola maldivarum* Forster, 1795  
英名 : Indian Pratincole  
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形態 : 全長約 26 cm。夏羽は上面が暗灰色褐色で上尾筒は白いが尾は黒い。喉は白色がかかる黄色で黒いラインで囲まれる。胸と脇は黄褐色で下雨覆は栗色、目先と脚は黒色である。冬羽では嘴のほとんどが黒色で喉は淡い褐色となり、黒い線も薄く不明瞭となる。

近似種との区別 : 飛翔性の昆虫などを空中で餌として採る様子はアジサシ類やアマツバメ類に似るが、本種は全体的に太めで翼の幅が広く長めに見える。また飛びながらキリリ、キリリと鳴く。飛翔しているとき二股状の尾羽と上尾筒及び尾の基部の白い斑が目立つ。ツバメ類よりかなり大きい。

**分布の概要** : 本州・四国・九州・伊豆諸島に旅鳥として渡来する。本州の静岡県・愛知県・鳥取県と九州の福岡県・宮崎県では局所的に繁殖しているとされていたが、北海道でも記録がみられるようになった。全国的には旅鳥であるが繁殖地では夏鳥である。

県内ではこれまで沖縄島・宮古島・石垣島・小浜島・与那国島などに主に旅鳥として渡来することが知られていたが、近年沖縄島と伊江島、久米島、津堅島、伊計島、宮古島、多良間島、石垣島などでは繁殖例が知られている。単独での観察は少なく、小群での目撃例が多い。

**近縁な種及び群との分布状況の比較** : ツバメチドリ類は世界に17種あるとされヨーロッパとアジア南部、オーストラリア、アフリカの開けた水辺近くの砂地や岩石地などを主な生息地としている。本種には亜種はなく近縁種としてオーストラリアで繁殖し、夏にはニューギニアやインドネシアなどに渡る *Siltia isabella* や、インドから中国南西部まで分布しビルマやタイ、カンボジア、ラオスなどでは留鳥として生息している *Glareola lactea* がある。

**生態的特徴** : 干潟・埋立地等やまばらな裸地のある草丈の低い草原などひらけた場所にすむ。繁殖期は小コロニーをつくる。巣は地上に浅くぼみをつくり小石、貝殻、枯れ草、木片などをわずかに敷く。1腹2~3卵を産む。卵は淡黄褐色で暗褐色の斑がでる。抱卵は雌雄交代で行い抱卵日数は約18日である。餌は飛んでいる昆虫を飛びながら捕らえるが地上でも採餌する。小さな群で見られることが多い。

**生息地の条件** : 干潟・埋立地・飛行場や牧草地の中の裸地のある草丈の低いまばらな草原、農地造成及び耕耘した後の休耕地などひらけた場所。

**学術的意義・評価** : アジアの温帯から熱帯で繁殖し、確認される範囲は東南アジア、インド、中国、海南島、台湾、大スンダ諸島、フィリピン、ニューギニア、オーストラリアなど分布域は広い。東洋区系の要素を持つ鳥類である。本種は亜種がない。数は少ないながら毎年のように県内に渡来し、局所的ではあるが繁殖している地域がある。

**生存に対する脅威** : 本来砂地や岩石の多い荒地に生息する種であるため、県内では埋立地や休耕地など繁殖期の生息地となる地域は人為的に開かれた場所である。したがって、その利用は一時的で継続的ではないため繁殖地として不安定である。また育雛期における繁殖地域内の野生化したイヌやネコも脅威となりうる。

**特記事項** : 宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。  
**原記載** : J. R. Forster, 1795. Faun. Indica, ed. 2: 11 (ex Latham, "open sea, in latitude of the Maldive Isles").  
**参考文献** : B. F. King and E. C. Dickinson, 1975. A Field Guide to the Birds of South-East Asia. Houghton Mifflin Company, Boston.

J. Mackinnon and K. Phillipps, 1993. A Field Guide to the Birds of Borneo, Sumatora, Java, and Bali. Oxford University Press, Oxford.

環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.

環境省編, 2002. ツバメチドリ. "改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 2 鳥類", 自然環境研究センター, 東京, 178.

藤井 幹, 2014. ツバメチドリ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 186-187.

小林桂助, 1983. 原色日本鳥類図鑑. 保育社, 大阪.

久貝勝盛・山本 晃, 1981. 宮古群島の鳥類目録. 沖生教研会誌, 沖縄生物教育研究会, 那覇, 14: 15-29.

黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.

Mark A. Brazil, 1991. The Birds of Japan, Christopher Helm and A & C Black, London.

日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録(改訂第5版). 学習研究社, 東京, 120pp.

日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. ツバメチドリ. "沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ", 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 308-309.

沖縄野鳥研究会編, 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会.

沖縄野鳥研究会編, 2010. 改訂版沖縄県の野鳥. 新星出版. 367pp.

榛葉忠雄 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.

高原建二・原戸鉄二郎, 1992. 伊江島の鳥類相について. 文化課紀要, 沖縄県教育庁文化課, 那覇, 8: 51-69.

高原建二・比嘉邦昭・山城勇人・盛長容子, 2011. 久米島における最近の鳥類記録及び傷病鳥保護の記録について. 久米島自然文化センター紀要(11): 15-36.

琉球新報社編, 1983. 写真集沖縄の野鳥. 誠文堂新光社, 東京.

**執筆者名** : 原戸鉄二郎\*・高原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における原戸による記載内容を一部見直した。

**和名** : **ズグロカモメ**

**分類** : チドリ目 カモメ科

**学名** : *Larus saundersi* (Swinhoe, 1871)

**英名** : Saunder's Gull

**カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

**形態** : 雌雄同色。尾は白色で翼背面は淡青灰色、下面は白色。成鳥の夏羽は頭部が黒色で目の周囲が白い。脚は濃赤色。嘴は太短く黒色。冬羽は頭部が白く、目の後方に黒色斑がある。



<鳥類>

- 近似種との区別 : ユリカモメ *Larus ridibundus* に似るが、本種より少し大きく、嘴が赤く細長い。
- 分布の概要 : 中国の渤海、黄海沿岸で繁殖し、朝鮮半島南西部、日本、中国南東部、台湾、香港、ベトナムで越冬する。日本では北海道から沖縄まで分布する。
- 生態的特徴 : 日本の越冬地では、北九州市曾根干潟では毎年10月中旬に渡来し、12月中旬～3月上旬まで安定して200羽程度が越冬する。その後、4月上旬までに渡去する。
- 生息地の条件 : 海岸、河口、干潟、湖沼に生息する。
- 個体数の動向 : 世界の総個体数は5,000羽以下(3,000羽近い)とされ、日本で越冬する個体数は1994～1997年の九州と四国の観察例で1,037～1,222羽であり、総個体数の20～30%を占めている。
- 現在の生息状況 : 九州、沖縄には毎年少数が渡来し、越冬する。沖縄県の漫湖には毎年10羽前後が渡来し越冬する。また冬季以外でも、八重山諸島西表島沖では4～5月に稀に観察されることがあり、漫湖では7月27日の観察例もある。
- 特記事項 : 中国国家環境保護局のカテゴリーでも絶滅危惧(VU)に指定。IUCNカテゴリー: Vulnerable (VU)。
- 原記載 : Swinhoe, 1871. Proc. Zool. Soc., London, 273, 421, pl.22 (Amoy, China).
- 参考文献 : Douglas W. Mc Whirter・池長裕史・五百沢日丸・庄山守・高原建, 1996. 最近の生息状況と参考記録を含めた沖縄県産鳥類目録。沖縄県立博物館紀要, (22): 33-152. (英文)
- 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版。日本鳥学会, 帯広, 345pp.
- 沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. ズグロカモメ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 320.
- 尾崎清明, 2002. ズグロカモメ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 2 鳥類 環境省編”, 自然環境研究センター, 東京, 180.
- 武石全慈, 1996. 4. ズグロカモメ. “日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅲ)”, (社)日本水産資源保護協会, 東京, 494-500, 533-534.
- 武石全慈, 1998. 12. ズグロカモメ. “日本の希少な野生水生生物に関するデータブック”, 水産庁編, (社)日本水産資源保護協会, 東京, 412-413.
- Wang, S. (Chief ed.), 1998. China Red Data Book of Endangered Animals. National Environmental Protection Agency, Science Press, Beijing・Hong Kong・New York, 346pp.

執筆者名 : 河野裕美

和名 : オオアジサシ

分類 : チドリ目 カモメ科

学名 : *Sterna bergii cristata* Stephens, 1826

英名 : Crested Tern

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態 : 翼背上面から尾羽は灰色で下面は白色。頭頂から後頭は黒色で冠羽状となる。嘴は黄色で脚は黒色。
- 近似種との区別 : 本種の繁殖地のある周辺海域には、下面が白く、上面から尾が灰色ないし黒褐色のアジサシ類は多く分布するが明らかに大型である。大型アジサシ類のオニアジサシの飛来記録も散見されるが、嘴が赤色で太いことで容易に識別できる。
- 分布の概要 : インド洋と太平洋西部の熱帯から亜熱帯海域に分布する。日本では、琉球列島尖閣諸島の北小島、小笠原諸島の西之島で繁殖する。
- 生態的特徴 : 北小島では上部の平坦な草地に、セグロアジサシのコロニーと隣接して営巣する。同島における繁殖期等の詳細は不明だが、およそ4月中下旬に渡来し、5月上中旬に産卵、6月上・中旬に孵化し、8月上旬以降に渡去を開始すると推察される。普通1卵を産下し、抱卵期間は21～30日。ふ化後2日齢で雛は巣場所を離れ、巣立ちまでの育雛期間は38～40日とされている。巣立ち幼鳥は親鳥と共に渡去する。八重山諸島では、毎年8～9月には幼鳥を伴った成鳥がエリグロアジサシやベニアジサシ繁殖地、あるいはサンゴ礁原の露出岩礁に飛来し、給餌行動が観察される。食餌生物は主に魚類、特にニザダイ科、カタクチイワシ科、サバ科、モンガラカワハギ科、ペラ科の魚類が採食されるとされている。
- 生息地の条件 : 外洋性島嶼の平坦な草地、あるいは海岸の小石帯、サンゴ洲島のサンゴ礫地等に営巣する。
- 現在の生息状況 : 1907年当時、南小島で本種のコロニーが撮影されているが、その後長く確認されず、1979年6月2日、北小島で2ヶ所のコロニーが確認され、抱卵中の成鳥250羽が観察されている。1991年5月24日にも同島の2ヶ所のコロニーで約370～380番いの営巣が観察された。2002年5月7日～8日には営巣していなかったが、岩礁上で休息する成鳥75羽が観察されている。最近の繁殖地での繁殖個体数等に関する報告はないが、8月頃には石垣島や西表島、その間の石西礁湖の属島、沖縄島西方沖の慶伊瀬島(ナガンヌ島・クエフ島等)において、尾羽が短い巣立ち幼鳥を伴った成鳥が観察されている。
- 学術的意義・評価 : 北小島と西之島は太平洋における本種の北限の繁殖地であり、共に近隣に繁殖地が無く孤立している可能性がある。
- 生存に対する脅威 : 尖閣諸島北小島は人間活動の場から遠く離れた海域にあり、繁殖生態や繁殖状況等の詳細な情報は蓄積されていないが、人為的攪乱による差し迫った影響は無いと思われる。
- 特記事項 : 宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種オオアジサシを選定している。
- 原記載 : Stephens, 1826. in Shaw's Gen. Zool., 13(1): 146. (China).
- 参考文献 : del Hoyo, J., Elliott, A. and Sargatal, J. (eds.), 1996. Handbook of the Birds of the World. Vol. 3. Hoatzin to Auks. Lynx Edicions, Barcelona.

Higgins, P. J. and Davies, S. J. J. F. (eds.), 1996. *Sterna bergii* Crested Tern. In : Handbook of Australian, New Zealand & Antarctic Birds, Vol.3, Snipe to Pigeons. Oxford, 605—621.

河野裕美, 1996. 5. オオアジサシ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料”, (社)日本水産資源保護協会, 東京, 574-578, 588-589.

河野裕美, 1998. 14. オオアジサシ. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック”, 水産庁編, (社)日本水産資源保護協会, 東京, 416-417.

河野裕美, 2014. VU(絶滅危惧II類)オオアジサシ. レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 2鳥類, 環境省編, ぎょうせい, 東京, 190-191.

Kohno, H., Sakaguchi, N. and Chiba, H., 1997. The breeding status of Crested Terns in Japan. J. Yamashina Inst., Ornithol., 29 : 91-96.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

白石 哲・荒井秋晴, 1980. 第2章 陸上動物調査 (2) (主に哺乳動物). “尖閣諸島調査報告書 (学術調査編)”, 沖縄開発庁, 47-85.

参 考 資 料 : 沖縄テレビ放送, 2002. 尖閣諸島南小島と北小島における 2002年2月25日-27日及び5月7日-8日の素材映像.

沖縄テレビ放送, 2003. 風によって復活への離陸 尖閣諸島のアホウドリ. 2003年8月17日放映.

執 筆 者 名 : 河野裕美・水谷 晃

和 名 : コアジサシ

分 類 : チドリ目 カモメ科

学 名 : *Sterna albifrons sinensis* Gmelin, 1789

英 名 : Little Tern

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形 態 : 頭頂から後頭部は黒色。体と翼背面は淡灰色で額、下面、尾羽は白色である。嘴は黄色で先端が黒色、脚は橙黄色である。

分布の概要 : 温帯から亜熱帯まで世界的に広く分布し、日本では沖縄県から青森県まで繁殖する。

生態的特徴 : 沖縄県に飛来する沿岸性アジサシ類の中では最も早く飛来し繁殖する。エリグロアジサシやベニアジサシの繁殖地周辺への飛来が5月中下旬であるのに対し、コアジサシは4月中旬頃で、6月中・下旬頃には繁殖地を離れはじめる成鳥と巣立ち幼鳥がいる。シロチドリと同所的に繁殖する事がある。コアジサシの1腹卵数は1~4、普通2~3卵である。抱卵日数は19~24日、育雛日数20~24日を経て巣立つ。繁殖期間中は主に小魚や甲殻類を採食する。

生息地の条件 : 海岸、内湾、サンゴ礁、河口、さらに内陸の河川などで採餌する。砂、貝殻、サンゴ礫の堆積した海岸や植生の貧弱な造成地や海岸埋立地、防波堤、あるいはサンゴ洲島やサンゴ礁原の砂州などで繁殖する。

現在の生息状況 : 県内では、これまで各地の造成地や海岸埋立地、あるいはサンゴ州島、サンゴ礁原のサンゴ州など十数ヶ所の繁殖地が確認されている。しかし集団性は弱く、1ヶ所の繁殖地で観られる成鳥数は100羽を越えることはなく、普通50羽以下である。営巣数は最大でも30~40程度と推定される。近年の県内における繁殖状況に関する情報はほとんどない。

生存に対する脅威 : 埋立地や造成地では植生遷移やその後の土地利用に伴い、営巣場所は減少または消失することが多い。また沖縄県の各地の海岸やサンゴ州島などは、開発や観光によって利用され、営巣可能な環境は減少する可能性がある。

特 記 事 項 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種コアジサシを選定している。

原 記 載 : Gmelin, 1789. Syst. Nat., 1(1) : 608 (ex Latham, China).

参 考 文 献 : del Hoyo, J., Elliott, A. and Sargatal, J. (eds.), 1996. Handbook of the Birds of the World. Vol. 3. Hoatzin to Auks. Lynx Edicions, Barcelona.

林 宏, 1995. 5. コアジサシ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料, (社)日本水産資源保護協会, 東京, 694-697, 714.

西表国立公園パークボランティア連絡会, 2003. 沖縄県におけるアジサシ類の繁殖状況調査. 公益信託 Takara ハーモニストファンド平成15年度研究活動報告”, 77-89.

環境省 編, 2014. レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 2鳥類. ぎょうせい, 東京.

環境省自然環境局生物多様性センター, 2016. 平成27年度 モニタリングサイト1000海鳥調査報告書.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. コアジサシ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 322.

山城正邦・桑原和之, 1993. 沖縄県におけるコアジサシの繁殖状況. 1993年度日本鳥学会大会講演要旨集, 132.

山城正邦・桑原和之, 1994. 沖縄島周辺におけるコアジサシの繁殖状況. 1994年度日本鳥学会大会講演要旨集, 119.

参 考 文 献 : 河野裕美・水谷 晃

〈鳥類〉

和名 : ベニアジサシ  
分類 : チドリ目 カモメ科  
学名 : *Sterna dougallii bangsi* Montagu, 1813  
英名 : Roseate Tern  
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 全長約 33 cm。雌雄同色。額から後頭にかけて黒色、翼背面は淡青灰色、上尾筒と尾羽は白色である。下面は白色で淡桃色を帯びる。尾は深い燕尾。嘴は繁殖期の初めは全体的に黒く、その後基部から徐々に赤色に変色する。

分布の概要 : 西部太平洋、インド洋、および大西洋の熱帯から亜熱帯海域に広く分布。日本では夏鳥として渡来し、福岡県三池島を北限として、奄美諸島、沖縄諸島、宮古群島、八重山諸島で繁殖する。オーストラリア・グレートバリアリーフのスウェイン礁で越冬することが報告されている。

生態的特徴 : 八重山諸島西表島における本種の繁殖生態の概要は次の通り。繁殖地周辺への渡来日は 5 月 22～29 日であり、産卵開始日は 6 月 9～29 日、繁殖地周辺海域からの最終渡去は 9 月 10～18 日である。普通 1～2 卵、稀に 3 卵を産み、各年の平均一腹卵数は 1.34～1.43 卵。抱卵日数は 20～26 日で平均 22.6 日。雛の巣立ち（初飛翔）日齢は平均 25.4 日で、幼鳥が繁殖地周辺から渡去するのは 30～51 日齢、平均 38.4 日齢である。この時期の台風、あるいは繁殖地への接近や上陸は幼鳥の巣立ちや渡去を早める傾向がある。繁殖期のベニアジサシは、全長 2～11cm のキビナゴ・トウゴロウ型魚類（トウゴロウイワシ科オキナワトウゴロウとニシン科ミナミキビナゴ等）を最も多く採食し、全食餌動物中の 85% 以上を占める。1999～2004 年の雛生産性は低く、孵化成功率は平均 21.1%、巣立ち成功率は平均 8.1% であった。孵化成功率が低い主な要因は抱卵放棄が 68.2% を占め、次いで台風の波浪による流失や水没が 14.6%、カラスによる捕食が 7.3% であった。

生息地の条件 : 主にサンゴ礁原や内湾、河口域にある小島や岩礁、沖合いのサンゴ洲島で繁殖する。県内では渡嘉敷村慶伊瀬島ナガンヌ島で記録された約 4,000 巣を最大として、主に百から数百巣のコロニーを形成する。また、エリグロアジサシのコロニーに 1～数十巣が混在することもある。海浜性の灌木の下床や草本が疎らに生える砂地やサンゴ礫地等で営巣する。年により繁殖地を変えることもあり、海外では移動距離 200～400 km という例も報告されている。

現在の生息状況 : 沖縄島周辺では 20ヶ所以上の繁殖地が知られる。1980～1990 年代の調査では約 600～4,300 巣が確認されてきたが、2000 年代の環境省モニタリングサイト 1000 による調査では、最大 1,600 巣程度であった。特にナガンヌ島では、1999 年まで平均 1200 巣であったが、2002 年以降は平均 270 巣にまで減少した。宮古郡島では 2009 年以降に 4 繁殖地で成鳥 536～849 羽が、八重山諸島では 2001 年以降に 11 繁殖地で成鳥 988～1,491 羽が各々記録された。島嶼間での繁殖地移動を行なっている可能性もあり、県内のみで個体群動態を評価すべきではないが、減少傾向にあると考えられる。

生存に対する脅威 : 繁殖地のある無人島では、宿泊を伴うマリンレジャー施設を含め、観光地化が著しい。その他の小島や岩礁も、潮干狩り、磯釣り、カヌーによる接近・上陸、ビーチキャンプなどに利用されるようになり、その頻度も増加している。こうした人の接近に伴う繁殖地放棄が毎年各所で生じている。ナガンヌ島ではアジサシ類繁殖エリアが県指定鳥獣保護区特別保護地区に、全島が慶良間諸島国立公園に指定されたが、本種は繁殖地を変えやすいため、包括的な保護措置には至っていない。卵や雛、成鳥の捕食者として、カラス、ハヤブサが知られるほか、西表島では越夏したオジロワシ若鳥により繁殖地の一斉放棄が生じた例も報告されている。

特記事項 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年) IUCN カテゴリー : Least Concern (LC) \* \* IUCN は種として評価。本県改訂は亜種ベニアジサシを選定している。

原記載 : Mathews, 1912. B. Austr., 2 : 364 (Foochow, Fukien and Ryukyus).

参考文献 : 環境省 編, 2014. レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 2 鳥類. ぎょうせい, 東京.

環境省自然環境局生物多様性センター, 2013. 平成 24 年度 モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書.

環境省自然環境局生物多様性センター, 2016. 平成 27 年度 モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書.

環境省自然環境局野生生物課, 2002. 鳥類標識調査によるベニアジサシの越冬地の確認について. 環境省報道発表資料 (平成 14 年 2 月 20 日).

河野裕美, 2004. 沖縄のベニアジサシ繁殖地に何が起きているのか? 自然保護, (481) : 14-15.

河野裕美・水谷 晃, 2003. 西表島網取湾におけるベニアジサシの繁殖段階の移行と繁殖期中の成鳥数変化. 日本鳥学会 2003 年度講演要旨集, 36.

河野裕美・水谷 晃, 2015. 仲ノ神島および西表島におけるオジロワシの初越夏と繁殖海鳥類への影響. Strix, 31 : 125-134.

水谷 晃・河野裕美, 2009. エリグロアジサシとベニアジサシのモニタリング手法の提案 -コロニー外からの観察による営巣数の計数と雛の齢査定に基づく産卵時期の推定-. 山階鳥類学雑誌, 40 : 125-138.

水谷 晃・河野裕美, 2011. 八重山諸島における海鳥類の現状. 海洋と生物, 194, 33(3) : 225-232.

O'Neill, P., Minton, K., Ozaki, K. & White, R., 2005. Three populations of non-breeding Roseate Terns (*Sterna dougallii*) in the Swain Reefs, Southern Great Barrier Reef, Australia. Emu, 105: 57-66.

尾崎清明, 2003. 人と鳥、水際のせめぎあい ベニアジサシに訪れた危機. Birder, 17 (7) : 38-41.

尾崎清明・米田重玄, 1992. 沖縄島周辺におけるベニアジサシの繁殖状況とコロニー間の移動. 日本鳥学会誌, 40 : 133.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 2005. 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 -レッドデータおきなわ-. 沖縄県文化環境部自然保護課, 沖縄.

執筆者名：河野裕美・水谷 晃

和名：エリグロアジサシ  
 分類：チドリ目 カモメ科  
 学名：*Sterna sumatrana* Raffles, 1822  
 英名：Black-naped Tern  
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態：全長約 30 cm。雌雄同色。全体が白色だが、後頭でつながる黒色の過眼線がある。翼背面と腰は淡青灰色、下面は淡桃色を帯びる個体もいる。尾は深い燕尾。嘴と脚は黒色。

分布の概要：西部太平洋とインド洋の熱帯から亜熱帯海域に分布する。日本では、奄美諸島、沖縄諸島、宮古群島、八重山諸島の沿岸で繁殖する。越冬地は不明。

生態的特徴：八重山諸島西表島における本種の繁殖生態の概要は次の通り。繁殖地周辺への渡来日は5月14～29日であり、産卵開始日は6月10日～7月4日、繁殖地周辺海域からの最終渡去は9月12～10月5日である。普通1～2卵、稀に3卵を産み、各年の平均一腹卵数は1.2～1.7卵。抱卵日数は21～26日で平均23.9日。雛の巣立ち(初飛翔)日齢は20～35日で、平均26.1日。幼鳥が繁殖地周辺から渡去するのは24～63日齢、平均38.6日齢である。この時期の台風、あるいは繁殖地への接近や上陸は、ベニアジサシと同様に幼鳥の巣立ちや渡去を早める傾向がある。繁殖期のエリグロアジサシは、全長2～11 cmのキビナゴ・トウゴロウ型魚類(トウゴロウイワシ科オキナワトウゴロウとニシン科ミナミキビナゴ等)を最も多く食べ、全食餌動物中の90%以上を占める。この他に、サヨリ類、ダツ類、トビウオ類、スズメダイ類の幼魚も採食する。1989～1990年、1999～2004年の孵化成功率は平均41.5%、巣立ち成功率は平均21.8%である。孵化成功率が低い主要因は、抱卵放棄が43.3%、台風の波浪による流失や水没が16.8%、カラスによる捕食が4.5%である。

生息地の条件：主にサンゴ礁原内や内湾、あるいは河口等の属島や岩礁、沖合いのサンゴ州島で繁殖する。座礁船や大型船舶の停泊ブイ、防波堤などの人工物で営巣することもある。県内では渡嘉敷村慶伊瀬島ナガンヌ島で記録された約300巣を最大として、主に10～30巣のコロニーを形成する。開けた環境を好み、岩礁のわずかな窪みやサンゴ礫場に営巣する。同所的に営巣するベニアジサシよりも水際に近い場所で営巣する傾向がある。年により繁殖地を変えることがある。

現在の生息状況：ベニアジサシよりも小規模に分散して繁殖しているため、個体群規模と動態の把握は難しい。沖縄島周辺ではこれまでに25ヶ所以上の繁殖地が確認され、2005年以降の環境省モニタリングサイト1000では、成鳥266～528羽115～304巣が記録された。同様に宮古群島では25ヶ所以上の繁殖地が知られ、成鳥343～511羽109～158巣(1繁殖地当たり平均5.2～7.8巣)が記録された。八重山諸島では2001年以降の調査で60ヶ所以上の繁殖地が確認されている。2001年の全域調査では、成鳥1,431羽621巣(1繁殖地当たり平均14.8巣)が記録された。2009年以降の環境省モニタリングサイト1000では、西表島と石垣島を中心に調査がなされ、成鳥492～705羽153～306巣(平均5.9～10.9巣)であった。繁殖期を通じて調査が実施される西表島では、2001年から2015年までに平均26.0巣から平均5.8巣まで大幅に減少した。

生存に対する脅威：ベニアジサシと同様に繁殖地となる無人島の観光化や、小島や岩礁のマリンレジャー利用などが顕著であり、人の接近や上陸による繁殖地放棄が毎年散見される。また水際近くに営巣することが多く、大潮の満潮時や台風の波浪による巣の流出が生じやすい。カラスによる卵や雛の食害も各諸島で報告されている。また西表島では越夏したオジロワシにより繁殖地の一斉放棄が生じたことも観察された。

特記事項：宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。  
 IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

原記載：Raffles, 1822. Trans. Linn. Soc. London, 13: 329 (Sumatra).  
 参考文献：環境省編, 2014. レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 2 鳥類. ぎょうせい, 東京.  
 環境省自然環境局生物多様性センター, 2013. 平成24年度 モニタリングサイト1000 海鳥調査報告書.  
 環境省自然環境局生物多様性センター, 2016. 平成27年度 モニタリングサイト1000 海鳥調査報告書.  
 河野裕美, 1996. 5. エリグロアジサシ. “日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料”, (社)日本水産資源保護協会, 東京, 501—506, 534—535.  
 河野裕美・水谷 晃, 2015. 仲ノ神島および西表島におけるオジロワシの初越夏と繁殖海鳥類への影響. Strix, 31: 125-134.  
 水谷 晃・河野裕美, 1999. 西表島網取湾におけるエリグロアジサシの繁殖生態 1. 繁殖段階の移行と成鳥数の変化. 日本鳥学会1999年度大会講演要旨集, 32.  
 水谷 晃・河野裕美, 2000. 西表島網取湾におけるエリグロアジサシの繁殖生態 2. 巣立ち成功ならびに雛の成長と渡去過程. 日本鳥学会2000年度大会講演要旨集, 24.  
 水谷 晃・河野裕美, 2001. 西表島網取湾におけるエリグロアジサシの繁殖生態 3. 一腹子数による雛の成長と巣立ち成功に影響する要因. 日本鳥学会2001年度大会講演要旨集, 74.  
 水谷 晃・河野裕美, 2003. 西表島網取湾におけるエリグロアジサシの繁殖生態 4. 食性と採食海域.  
 水谷 晃・河野裕美, 2009. エリグロアジサシとベニアジサシのモニタリング手法の提案 -コロニー外からの観察による営巣数の計数と雛の齢査定に基づく産卵時期の推定-. 山階鳥類学雑誌, 40: 125-138.

水谷 晃・河野裕美, 2011. 八重山諸島における海鳥類の現状. 海洋と生物, 194, 33 (3) : 225-232.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県文化環境部自然保護課(編), 2005. 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 - レッドデータおきなわ. 沖縄県文化環境部自然保護課, 沖縄.

執筆者名 : 河野裕美・水谷 晃

和名 : サシバ  
分類 : タカ目 タカ科  
学名 : *Butastur indicus* (Gmelin, 1788)  
英名 : Grey-faced Buzzard-eagle  
方言名 : タカ, チンミー  
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形態 : 全長は雄47 cm、雌50 cmで、翼開長は105~115 cmの中型の猛禽類。雄の頭部は灰褐色で、上面と胸は茶褐色。嘴は灰黒色で蟬膜(ろうまく)と虹彩は黄色。喉は白く中央に黒褐色の腮線(さいせん)がある。腹は白色で茶褐色の横斑がある。若鳥ではこれが縦斑になる。尾には黒褐色の太い黄帯が3本入る。翼下面は白色で、風切には暗褐色の細い横縞があり、初列風切先端は黒褐色。雌は頭部に灰色味が少なく、白色の眉斑が明瞭な傾向があるとされるが、雄でも眉斑が明瞭な個体もいる。幼鳥は上面が暗褐色で、淡色の羽縁がある。明瞭な眉斑があり、体下面は暗褐色の縦斑がある。虹彩は暗褐色。

近似種との区別 : ハチクマはより大きく、翼は長いが、頸は細長い。

分布の概要 : 日本、朝鮮半島、中国東部で繁殖し、南西諸島、中国南部、東南アジアなどで越冬する。日本では本州(東北地方南部)から四国、九州に夏鳥として渡来し、繁殖する。県内では旅鳥および冬鳥。

生態的特徴 : 繁殖地では平地から山地の森林と草原が混在する環境に生息する。特に水田と森林が混在する谷津田では生息密度が高いとされている。水田や草地に隣接した樹林部で営巣し、草地や湿地などでカエルやトカゲ、ネズミ類、バッタなどの昆虫類を餌にしている。3月下旬から4月上旬にかけて営巣地に飛来し、造巣を開始する。4月中旬から5月上旬にかけて2~4卵を産卵し、抱卵期間は約1ヶ月。育雛期間は5週間で、6月上旬から7月上旬に巣立ちを迎える。9月中旬から10月下旬が国内での渡り期間となる。県内では10月初旬から渡り個体が見られ、さらに南下して越冬する群れ個体と、そのまま滞りして越冬する個体に分かれる。

生息地の条件 : 渡り期の休息地となるリュウキュウマツ林や広葉樹林などまとまった森林が必要である。

現在の生息状況 : 渡り個体はこれまで宮古島における宮古野鳥の会による調査では、1980年代前半までは平均的に約3万8千羽が確認されていたが、1980年代後半から減少し、2000年代には2万羽以下の確認となっている。宮古諸島における過去29年間の年平均個体数は29,000個体とされている。なお、最近では2013年の秋期で約3万1千羽が確認され、幾分回復傾向が見られる。また、沖縄島北部名護市では2015年の調査で約4,000羽が確認されている。

しかしながら、県内における越冬個体の調査は実施されておらず、総個体数は不明である。越冬個体は森林部とサトウキビ畑や牧草地などの開けた農耕地に生息し、主にバッタ類、トカゲ類、カエル類などを餌にしている。

学術的意義・評価 : 県内における渡来数は多く、本種の渡りを考える上で重要である。また、越冬地では食物連鎖の頂点に位置している。

生存に対する脅威 : 渡り期の休息地となるマツ林や広葉樹林の減少傾向。越冬個体の主な生息地である農耕地における農業使用による餌となる両生・爬虫類などの減少や昆虫類の農業汚染。

特記事項 : 全国的に繁殖期の分布調査でその減少傾向が指摘され、県内における渡り調査でも全体的に減少傾向が見られる。このことから、環境省編(2012)では絶滅危惧II類(VU)に新規に選定掲載された。旅鳥や冬鳥として普通に渡来する種であるが、中継地および越冬地である本県でも保護を図るため環境省レッドリスト2014のカテゴリーに準拠した。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。IUCNカテゴリー : Least Concern (LC)。

参考文献 : 金井 裕, 2014. サシバ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 156-157.  
環境省編, 2014. レッドデータブック 2014-改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 1, 2 鳥類, ぎょうせい, 東京, 250pp.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
仲地邦博・久貝勝盛・岡徹・砂川友弘・金子進・真壁靖人・西原武則, 2014. サシバの現状と保護. 宮古野鳥の会40周年記念誌. 106pp.  
下地 豊, 2014. サシバの里を目指して. バーダー28(09). 30.  
高原建二・細川太郎・村田尚史・具志堅ひな子・山本英康, 2014. 沖縄本島北部(名護市)におけるサシバ*Butastur indicus*を含むワシタカ類の飛来状況について. やんばる学研究会会誌(3) : 80-87.  
榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.

執筆者名 : 高原建二

和名 : リュウキュウオオコノハズク

分類名 : フクロウ目 フクロウ科  
 学名 : *Otus lempiji pryeri* (Gurney, 1889)  
 英名 : Collared Scops-owl  
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 全長約 25 cm。北海道から九州まで分布する亜種オオコノハズク (*O. l. semitorques*) に似ているが、本亜種は羽色が赤錆色がかかる暗褐色の地に複雑な横斑や縦斑が見られる。耳羽は長めで、後頸部は灰色がかかる黄褐色で首輪上に見える。目は赤みがかかる橙色。足指に羽毛がないことが本亜種の特徴である。

近似種との区別 : コノハズクに似るが本種はやや大型で、目の色が赤みがかかる橙色であるのに対しコノハズクは黄色。鳴き声ではコノハズクが「ブッポーソー」とか「コホー」と鳴くのに対し、本種は「ウオツ、ウオツ」または「ポウ、ポウ」と聞こえる声で鳴く。

分布の概要 : 沖縄島とその属島の屋我地島、慶良間諸島の阿嘉島、八重山諸島の石垣島と西表島に生息分布する。沖縄島では北部の国頭地域や本部半島、名護市から恩納村などの森林地域、沖縄島中部の沖縄市や島南部の那覇市などの残存する森林地域に生息する。沖縄島南部では那覇市の都市公園等にある残存林などで繁殖したことが知られている。また、八重山諸島の石垣島、西表島などの常緑広葉樹林の大径木が繁茂する薄暗い森林に生息する。最近沖縄島北部の本部半島や恩納村で地上営巣例が見られる(嵩原, 1994・嵩原, 2002)。宮古島は迷鳥としての飛来とされ、与那国島でも記録が見られるが、亜種は不明である。

種オオコノハズクは、中国本土から海南島、ベトナム、タイ、マレー半島、大スンダ列島、ボルネオまで、そして、さらに中国東北部からアムール、ウスリー、朝鮮半島、サハリン、日本、台湾まで分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 種オオコノハズクは、北海道から本州、四国、そして奄美諸島まで全国的に留鳥として生息するオオコノハズク *O. l. semitorques* と、新潟県に迷鳥として記録が見られるサイメロオオコノハズク *O. l. ussuriensis*、本亜種 *O. l. pryeri* の 3 亜種が見られる。国外では中国、インド、フィリピンなどに 16 亜種があるとされる。

生態的特徴 : 夜間、林道沿いや畜舎周辺などにでてきて、ネズミ類や小鳥類、昆虫類を捕らえて餌にする。最近の食性に関する調査では、同所的に生息するリュウキュウコノハズクとの餌の競合を避けるため、食性が昆虫類を含めより広く、またサイズの大きい哺乳類や鳥類にシフトしているとの指摘がある(Toyama and Saitoh, 2011)。人が近づくと嘴を打ち鳴らして警戒するが、なかなか飛び立たない。繁殖時期は 4 月から 5 月頃で 1 腹の卵数は 3 個から 4 個である。

生息地の条件 : 採餌や休息地となるまとまった低地や山地の広葉樹林帯が必要である。また営巣するためには樹洞をもつような大径木が数多く出現する林齢のすすんだ森林も不可欠。

学術的意義・評価 : 南西諸島の一部に生息し、南西諸島南部が国内での分布の南限地域にあたる。

*Otus* 属の種分化を考える上で重要な地域個体群であると考えられるが、生息地域は局所的である。

生存に対する脅威 : 森林伐採、農地造成、ダム建設等の開発による生息地となる森林地域が漸減している。

特記事項 : 日本産鳥類目録では従来、種オオコノハズクの学名に *Otus bakkamoena* を用いていたが、目録改訂第 6 版と同 7 版では *O. lempiji* が採用されている。分類学的にはインド、スリランカ、ヒマラヤ、アッサムで生息するものが *O. bakkamoena* で、中国以東が *O. lettia* とする見解も見られる。最近の扱いは、日本産はロシア沿海地方から韓国に至る地域に分布を持つ *O. semitorques* とされ、日本産は亜種名が *O. s. ussuriensis*、琉球列島産は *O. s. pryeri* とする考え方が見られるなど、分類学的に確定されていない面がある。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCN は種 *O. semitorques* として評価。本県改訂は亜種リュウキュウオオコノハズクを選定している。

原記載 : Gurney, 1889. Ibis, 302 (Naha, Okinawa I.)

参考文献 : Brazil M. 1991. The Birds of Japan, Christopher Helm and A & C Black, London.

Brazil M. 2009. Birds of East Asia, China, Taiwan, Korea, Japan and Russia. Princeton University Press. Princeton and Oxford. 528 pp.

環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.

嵩原建二, 2014. リュウキュウオオコノハズク. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 204-205.

黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.

Mikkola H. 2012. Owls of the world a photographic guide. Christopher Helm. London .512pp.

宮古野鳥の会編, 2000. 25 周年記念誌. 平良市, 66pp.

日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録 改訂第 5 版. 学習研究社, 東京, 120pp.

日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. リュウキュウオオコノハズク. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 292-326.

沖縄野鳥研究会編, 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会.

沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.

嵩原建二, 1994. リュウキュウオオコノハズクの地上営巣例について. すくみ. ち第 31 号, 今帰仁村教育委員会, 今帰仁村.

嵩原建二, 2002. 沖縄島で留鳥として生息する希少な 3 亜種の繁殖記録について. 沖縄県立博物館紀要, (28): 1-11.

Toyama M. and Saitoh T. 2011. Food niche differences between two syntopic scops owls on Okinawa

Island, Japan. Journal of Raptor Research, 45(1): 79-87.  
琉球新報社編, 1983. 写真集沖縄の野鳥. 誠文堂新光社, 東京.

執筆者名 : 高原建二

和名 : **ハヤブサ**  
分類 : ハヤブサ目 ハヤブサ科  
学名 : *Falco peregrinus japonensis* Gmelin, 1788  
英名 : Peregrine Falcon  
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 頭部から背中、尾にかけて灰黒色で、喉から胸、腹部、翼の下面にかけては灰白色で黒褐色の横斑がある。若鳥は上面が褐色を帯び下面は黄白色で黒褐色の縦斑がある。  
近似種との区別 : チゴハヤブサはハヤブサより小さく翼がより細長く下腹に赤褐色の模様がある。  
分布の概要 : 東シベリアからオホーツク湾沿岸、カムチャツカ、サハリン、朝鮮半島等に分布している。日本では九州以北で繁殖している。県内では冬鳥。  
生態的特徴 : 巣は険しい海岸の絶壁等の岩だに作る。卵は3~4個産む。抱卵日数は約29日、ふ化後40日前後で巣立つとされる。中型の鳥類を襲って餌にする。適当な岩場や高い木立の枯れ枝などでじっと止まって餌を待つ習性がある。  
生息地の条件 : 険しい海岸の絶壁、森林、湿地や水田周辺の狩り場。  
現在の生息状況 : 県内ではごく少数が越冬し、水田や農耕地、干潟周辺などで見られる。  
学術的意義・評価 : 水田や農耕地、干潟周辺で鳥類を捕食し、食物連鎖の頂点に位置している。  
生存に対する脅威 : 農薬使用によって餌となる鳥類が汚染され、さらにそれらを捕食したハヤブサに農薬被害がでている例があるとされる。  
特記事項 : 国内希少野生動物種 (1993年)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。IUCNカテゴリー : Least Concern (LC) \* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種ハヤブサを選定している。  
原記載 : Gmelin, 1788. Syst. Nat., 1(1): 257 (Japan).  
参考文献 : 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生動物 - レッドデータブック - 脊椎動物編. 日本野生動物研究センター, 東京.  
小林桂助, 1983. 原色日本鳥類図鑑. 保育社, 大阪, 65.  
日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録 改訂第5版. 学習研究社, 東京, 26.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
高野伸二, 1982. 日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京, 244.  
沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ハヤブサ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生動物 - レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 306. より引用。

執筆者名 : 高原建二

和名 : **サンショウクイ**  
分類 : スズメ目 サンショウクイ科  
学名 : *Pericrocotus divaricatus divaricatus* (Raffles, 1822)  
英名 : Ashy Minivet  
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 全長約20cm。体は細く、尾が長い。雄は頭頂から後頸および耳羽の一部が黒く、額は白色。嘴と過眼線は黒色で、頬以下の下面は白色。背及び肩羽、上部雨覆は暗灰色で風切は黒く、白色の翼帯がある。尾は黒色で外側尾羽白色。雌は頭上から背が灰色で額の白色部は小さい。  
近似種との区別 : 亜種リュウキュウサンショウクイは頭上から上面が灰黒色で、額の白色部は狭く、眉斑状となる。胸は暗灰色。  
分布の概要 : ウスリーから中国東北部、朝鮮半島北部で繁殖し、中国南部から東南アジアで越冬する。日本では夏鳥として、本州および四国に渡来し、繁殖する。渡り際には各地を通過する旅鳥である。  
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 亜種リュウキュウサンショウクイは九州南部から南西諸島に留鳥として生息する。最近、四国や本州の一部にも生息地を拡大している。  
生態的特徴 : 国内の繁殖地では、巣は地上から数m以上の大きな横枝にイネ科植物の枯茎や細い枝、スギやヒノキの樹皮などを用いて作り、外部にウメキゴケをクモの糸で貼り付けて作る。一腹産卵数は4~5個で、卵は青灰色の地に暗褐色や灰色の斑点がある。抱卵は雌が行い、巣立ちまでの日数は約14日。  
生息地の条件 : 平地や山地の大きな落葉樹のある樹林に生息する。県内では山地森林部の広葉樹林で見られる。  
現在の生息状況 : 本土では夏鳥として飛来し繁殖するが、最近かつて生息していた場所での生息確認ができなくなっていることが指摘されている。これは食物となる飛翔性の昆虫の減少や越冬地である東南アジアの生息環境の悪化が影響しているとされる。県内では春と秋に通過する旅鳥である。環境省編 (2014) に準拠しVUと評価した。秋期には10個体ほどの群れをつくり、森林地域に渡来するが、国内で繁殖した個体か、大陸産かは不明であり、今後の繁殖地に関する調査が必要である。  
学術的意義・評価 : 県内における渡来数は少ないが、本種の渡りを考える上で重要である。  
生存に対する脅威 : 森林性の鳥であり、森林の改変や伐採はその生息に大きな影響を与えることが考えられる。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は基亜種サンショウクイを選定している。  
 参考文献 : 金井 裕, 2014. サンショウクイ, レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 210-211.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄野鳥研究会編, 2010. 改訂版沖縄の野鳥. 新星出版, 那覇. 367pp.  
 榎葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版, 647pp.

執筆者名 : 高原建二

和名 : **オリヤマガラ**  
 分類 : スズメ目 シジュウカラ科  
 学名 : *Poecile varius olivaceus* (Kuroda, 1923)  
 カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 全長約 14 cm。頭部と喉が黒色。額と頬は赤栗色。背と翼は青黒色。  
 近似種との区別 : イシガキシジュウカラとは本種が胸から腹が赤っぽいことで区別できる。  
 分布の概要 : 八重山諸島 (西表島、石垣島)。  
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島にはアマミヤマガラ *P. v. amami*、台湾にタイワンヤマガラ *P. v. castanet-ovenstris* が分布している。  
 生態的特徴 : 人を恐れることが少なく近くで観察することができる。冬季はイシガキシジュウカラやリュウキュウキビタキと混群を作ることがある。  
 生息地の条件 : 鬱蒼と茂った森林地域。シジュウカラに比べ、森林依存度は高いものと思われる。  
 現在の生息状況 : 西表島ではやや標高の高い常緑広葉樹の林内で見られる。石垣島では於茂登岳や野底岳などのやや標高の高いところに少数が生息している。  
 学術的意義・評価 : 大東諸島にはかつて近似亜種ダイトウヤマガラ *P. v. orii* が生息していたが、絶滅してしまった。本種は日本に分布の中心があり、なお島嶼ごとに多くの亜種に分類されている。本種の分布様式を考える上で重要である。八重山諸島固有亜種。  
 生存に対する脅威 : 人的な改変等による森林の伐採など生息環境の変化が懸念される。  
 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは *Sittiparus varius* Temminck & Schlegel, 1848 として掲載し、種として評価。本県改訂は種ヤマガラの亜種オリヤマガラを選定している。

原記載 : Kuroda, 1923. Bull. Brit. Orn. Club, 43: 90 (Iriomotejima, South Ryukyus).  
 参考文献 : 花輪伸一, 2014. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 231.  
 五百沢日丸他, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版.  
 環境省編, 2002. オリヤマガラ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 2 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 220.  
 真木広造・大西敏一, 2000. 日本の鳥 590. 平凡社.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. オリヤマガラ. “沖縄島の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 325.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄島の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 大谷 力, 2004. 沖縄県石垣におけるヤマガラの観察記録. 日本鳥学会誌, 53(2): 104-106.  
 山階芳麿, 1980. 復刻版 日本の鳥類とその生態 第1巻. 梓書房, 東京.

執筆者名 : 庄山 守\*・高原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における庄山による記載内容を一部見直した。

和名 : **アカヒゲ**  
 分類 : スズメ目 ヒタキ科  
 学名 : *Luscinia komadori komadori* (Temminck, 1835)  
 英名 : Ryukyu Robin (Satsunan islands subspecies)  
 カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形態 : 全長 14 cm。雄は眼先から胸にかけて黒く、頭上から上面は赤橙色。嘴は黒色。下面は白く、脇に大きな黒斑がある。額は黒色。雌は頭部から上面にかけて赤褐色で、下面は汚白色。胸と脇腹に黒褐色の細かな斑がある。  
 近似種との区別 : 亜種ホントウアカヒゲの雄は、脇腹に黒い斑紋がでないことで本亜種と区別できる。  
 分布の概要 : 男女群島やトカラ列島、奄美諸島とその周辺島嶼に分布している。夏から秋にかけては薩南諸島や大隅半島でも観察されることが知られている。県内では冬期に宮古諸島や八重山諸島の石垣島、西表島、与那国島、波照間島に渡来し、越冬することが知られている。  
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 八重山地方には酷似した別亜種ウスアカヒゲ *L. k. subrufus* が生息するとされているが、日本鳥学会編(2012)の「目録改訂第7版」では「絶滅」としている。  
 生態的特徴 : 下層植生の発達した常緑広葉樹林や二次林、寺社林、屋敷林、リュウキュウチク林などに生息する。地上で昆虫類やクモなどを捕らえ、餌にしている。縄張り性があり、通常は一夫一妻で繁殖する。



〈鳥類〉

枯れ葉やツル、樹皮などを利用し、椀状の巣をリュウキュウチクや広葉樹の樹上と樹洞、幹の割れ目などにかける。1腹卵数は1~5個で平均3卵。

生息地の条件：下層植生の発達した常緑広葉樹林や二次林などの他、県内では坪所のある御嶽林などに生息。  
現在の生息状況：最近トカラ列島に生息する繁殖集団が渡りをする事が知られ、先島諸島で冬季に見られる個体は、この北部地域からの渡り個体である可能性が指摘されている（関，2005）。このことから、沖縄島でも本亜種の旅鳥としての保護や観察記録がある。沖縄諸島の沖縄島と久米島などでは旅鳥で、宮古諸島の宮古島と多良間島、八重山諸島の石垣島、西表島、与那国島、波照間島などでは越冬個体の観察例が見られる。

学術的意義・評価：日本特産亜種として貴重である。  
生存に対する脅威：奄美大島やトカラ列島同様に、旅鳥として通過する中継地となる沖縄島では外来種のマングース、越冬地となる宮古島では外来種のイタチが定着しており、こうした小型ほ乳類による捕食の影響が考えられる。

特記事項：本亜種と亜種ホントウアカヒゲとは遺伝的分化の程度が大きいことが指摘されている（Seki et al 2007・西海 2014）。国指定天然記念物（1970年）。国内希少野生動物種（1993年）。宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。IUCN カテゴリー：Near Threatened (NT)\* \*IUCNは独立種 *Larvivora komadori* と分類して評価。本県改訂は種アカヒゲの基亜種アカヒゲを選定している。

原記載：Temminck, 1835. In Temminck and Laugier's Planches col. oiseaux, livr. 96: pl.570 ("Korea," error for Ryukyu Islands, restricted to North Ryukyus by Kuroda, 1923).

参考文献：環境庁編，1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター，東京。

黒田長禮，1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社，東京。

日本鳥類保護連盟編，1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟。

真木広造・大西敏一・五百澤日丸，2014. 日本の野鳥 650. 平凡社，東京，788pp.

西海 功，2014. 増えたり減ったり、日本の固有種の今昔. BIDER, 28 (08) : 4-5.

日本鳥類目録編集委員会編，2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会，帯広，345pp.

日本鳥学会編，2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会，三田，438pp.

沖縄県環境保健部自然保護課（編），1996. アカヒゲ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ”，沖縄県環境保健部自然保護課，那覇，324.

沖縄野鳥研究会編，1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版，浦添。

砂川栄喜，2011. 沖縄宮古の野鳥 亜熱帯の水辺. ボーダーインク，那覇，238pp.

榛葉忠雄，2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.

関 伸一，2005. レッドリストの生き物たち. 19, アカヒゲ. 森林技術, No. 756. 32-33.

関 伸一，2014. アカヒゲ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編，ぎょうせい，東京，p214-215.

Seki S.-I and T.Ogura, 2007. Breeding origins of migrating Ryukyu Robins *Erithacus komadori* Inferred from mitochondrial control region sequences. *Ornithological Science*, 6:21-27.

高原建二，1998. 波照間島の鳥類記録. 波照間島総合調査報告書，沖縄県立博物館。

高原建二・砂川栄喜・比嘉邦昭・宮城国太郎・高良淳司・金城輝男・仲地邦博・長嶺 隆，2008. 沖縄県内における2003年から2006年までの希少な鳥類の飛来と希少な繁殖記録について. 南島文化. (30) : 127-144.

宇山大樹，2011. 野鳥の記録と那国島（2002年3月～2007年1月の678日間の観察記録）. 文一総合出版，223pp.

山階芳麿，1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房，東京。

執筆者名： 高原建二

## 5) 準絶滅危惧 (NT)

和名： オオヒシクイ  
分類： カモ目 カモ科  
学名： *Anser fabalis middendorffii* Severtzov, 1873  
英名： Bean Goose  
カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

形態： ガン類では最大クラスで全長 90~100 cm。頭部から頸にかけて暗褐色。嘴は黒褐色で、先端部近くには橙色の斑がある。上面は暗灰褐色で、羽縁は淡褐色。翼上面は暗褐色で、雨覆は灰色。胸から脇は暗褐色で、羽縁は淡褐色。下腹から下尾筒は白く、尾は黒褐色で上尾筒は白色。足は橙色。

近似種との区別： マガンの嘴はピンク色で、基部は白色。成鳥は腹部に不規則な黒斑がある。  
分布の概要： 本亜種はシベリアからバイカル湖周辺、アムール北部までのタイガ帯で繁殖し、冬季には中国東部と韓国で越冬する。日本にはカムチャツカ半島の個体群が渡来するとされ、北海道北部のサロベツ原野などを中継地として局地的に飛来する。亜種ヒシクイは主に宮城県伊豆沼などで越冬するが、亜種オオヒシクイは日本海側に多く飛来するとされる。

生態的特徴： 国内では冬鳥として、水田跡や湖沼、湖などに飛来する。冬季は主に植物食で、水性植物の葉や茎、水田の落ちモミなどを餌にしている。本亜種は嘴や頸が長く、湿地での採食に適している形態があ

る。  
**生息地の条件** : 水田跡や湖沼、湖、タイモ栽培地、イグサ栽培地など。  
**現在の生息状況** : 県内でもごく少数が迷鳥として渡来し、水田やタイモ栽培地などでしばらく滞在することがある。一カ所に長く留まらず、場所を変えて越冬することがある。  
**生存に対する脅威** : 水田やタイモ栽培地、イグサ栽培地の減少傾向が見られる。また、越冬地の農薬による汚染も懸念される。  
**特記事項** : 国指定天然記念物 (1971年)。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は種ヒシクイの亜種オオヒシクイを選定している。  
**参考文献** : 呉地正行, 2014. オオヒシクイ. “レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 225.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
**執筆者名** : 高原建二

**和名** : マガン  
**分類** : カモ目 カモ科  
**学名** : *Anser albifrons albifrons* (Scopoli, 1769)  
**英名** : Greater White-fronted Goose  
**カテゴリー** : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

**形態** : 全長 72 cm. 雌雄同色。頭部から頸にかけては暗褐色。嘴はピンクでその基部は白い。上面は暗灰褐色で、羽縁は淡褐色。翼上面は暗褐色で、雨覆は灰色。下面は淡褐色で、腹部には不規則な黒斑がある。下尾筒は白色。足は橙色。幼鳥は嘴基部に白斑はなく、嘴に黄色味があり、腹部に黒斑はない。

**近似種との区別** : カリガネは小さく、眼の周りに明瞭なアイリングがある。また、より嘴は短く、嘴基部の白色部は額まで達する。

**分布の概要** : ユーラシア大陸、北米、グリーンランド西部のツンドラ地域で繁殖し、冬季には南に渡る。国内には主に冬鳥として渡来し、主に東北地方と本州日本海側で越冬する。特に宮城県伊豆沼では多数が越冬することでよく知られている。

**生態的特徴** : 低地の沼沢地、水田跡、干潟などに渡来する。植物食で水性生物の根茎、葉、あるいは水田で落ち穂、草の葉などを採食する。

**生息地の条件** : 低地の沼沢地、水田跡、干潟など。  
**現在の生息状況** : 県内に渡来するガン類の中では観察例が比較的多く、毎年のごく少数が県内各地に飛来する。秋季から冬季に水田や河川、牧草地、草原などに渡来するが、長く留まらない。  
 なお、本州における主たる越冬地での個体数は、1970~1971年の越冬期は全国的に約3,700個体であったが、1997~98年の越冬期では約3万1千羽、2011~2012年の越冬期には約20万羽に達し、増加傾向にあるとされている。

**学術的意義・評価** : 県内における渡来数は少ないが、本種の渡りを考える上で重要である。  
**生存に対する脅威** : 水田の畑地化の進行や干潟の埋め立てなど、生息地の減少傾向がある。

**特記事項** : 国指定天然記念物 (1971年)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は基亜種マガンを選定している。

**原記載** : Baird, 1858. In Baird, Cassin et Lawrence, Rep. Expl. Surv. R. R. Pacific, 9: 762. (Fort Thorn, New Mexico).  
**参考文献** : 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
 呉地正行, 2014. マガン. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 224.  
 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.  
 環境省編, 2002. マガン. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 2 鳥類”. 自然環境研究センター, 東京, 229.  
 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
 日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. マガン. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 317.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 2005. マガン. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 79-80.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
 鈴木勝利・嶋田哲郎, 2012. 宮城県北部の湖沼におけるマガン個体数の季節変化. 伊豆沼・内沼研究報告 6号, 63-69.  
 榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.  
 山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

**執筆者名** : 高原建二

和名 : カイツブリ  
 分類 : カイツブリ目 カイツブリ科  
 学名 : *Tachybaptus ruficollis poggei* (Reichenow, 1902)  
 英名 : Little Grebe  
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 全長 26 cm。日本産カイツブリ類では最小。翼と尾は短い。雌雄同色。繁殖羽では頭上は黒褐色で、喉から頬と前頸は赤褐色。嘴は短めで黒く、先端は淡黄色で尖る。嘴基部に淡黄色の斑がある。虹彩は黄白色。胸から背は黒褐色で、尾の周辺は白色。翼上面は一様に黒褐色で、白斑はない。

近似種との区別 : ミミカイツブリとカンムリカイツブリはともにやや大きく、頸は長く、虹彩は赤色で区別できる。  
 分布の概要 : ヨーロッパからインド、東南アジア、中国、朝鮮半島まで、ユーラシア大陸温帯域に広く分布し、その一部は渡りを行う。日本では北海道から南西諸島で繁殖する留鳥であるが、北日本では夏鳥。

生態的特徴 : 潜水を得意とし、小魚や小エビ、水性昆虫などを餌として利用する。水面に水草を積みからませた浮き巣を作り、子育てをする。卵の数は1腹2~数個。雌雄交代で抱卵し、約20日間抱卵する。雛は早成性。

生息地の条件 : ダム湖や池沼、河川などの淡水域。

現在の生息状況 : 留鳥および一部冬鳥。県内各地のダム湖や池、河川などの淡水域で少数が生息し、沖縄諸島と宮古諸島では繁殖記録が見られる。しかしながら、八重山諸島では冬期に渡来し、越冬する個体が主体であると思われる。沖縄諸島では冬期は渡来するのもあり、海岸や河口、ダム湖などで見られることもある。

学術的意義・評価 : 県内における生息数は少ないが、本亜種の生息分布を考える上で重要である。

生存に対する脅威 : 生息地となるダム湖や農業用ダムは増加したが、繁殖地となる池沼や河川などの淡水域の埋め立て、改修等人為的開発の影響が懸念される。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は種カイツブリの亜種カイツブリを選定している。

原記載 : Reichenow, 1902. Journ. 50: 125 (Chihli, China).

参考文献 : 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. カイツブリ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 314.  
 沖縄県環境保健部自然保護課(編), 2005. カイツブリ. 改訂“沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.  
 山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.  
 日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.

執筆者名 : 高原建二

和名 : ダイトウカイツブリ  
 分類 : カイツブリ目 カイツブリ科  
 学名 : *Tachybaptus ruficollis kunikyonis* (Kuroda, 1927)  
 英名 : Borodino Islands Glabe  
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 全長 26 cm、亜種カイツブリと羽色に明確な違いは認められないが、亜種ダイトウカイツブリは嘴がやや長い傾向がある。大東諸島には、全身が白い個体が複数、1970年代から現在に至るまで観察され続けている。単なる白化(アルビノ)ではなく、目の色や嘴、脚の色は通常色のカイツブリと同様である。

分布の概要 : 北大東島と南大東島の池沼に生息する固有の亜種である。

現在の生息状況 : 池沼地域には人為的に移入されたティラピア類が多く、繁殖しているため稚魚も非常に多く、採餌環境は良好と推察される。また、大東諸島には雛の捕食者となりうるハシブトガラスが生息せず、同様に雛を捕食することがあるオオクチバスも池沼地域に生息していない。そのため繁殖成功を妨げる要因は少ない。繁殖生態についてはよくわかっていない。

生存に対する脅威 : 人為的な生息地の改変等で生息環境は減少傾向にあるが、カイツブリが多く生息する大池や月見池など広い開放水面を持つ池の環境には大きな変化は認められない。個体数に関する正確な情報はないが、池沼地域は限られており環境収容力は小さく、個体数はあまり多くない。そのため絶滅の渦に巻き込まれる可能性があるかと推察される。

特記事項 : 白色個体が個体群の中に長期にわたり世代を重ねて維持されている要因を遺伝学的、生態学的に解明することは学術的な価値が大きい。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は種カイツブリの亜種ダイトウカイツブリを選定している。

原記載 : Kuroda, 1923. Bull. Brit. orn. club, 43: 120. (Minami-daitojima, Daito Is.).

参考文献 : 姉崎 悟・高原健二・松井 晋・高木昌興, 2003. 大東諸島産鳥類目録. 沖縄県立博物館紀要, 29: 25-54.

黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇.

執筆者名 : 嵩原建二\*・高木昌興(追補) \*前回改訂版(2005)における嵩原による記載内容を一部見直した。

和名 : **アナドリ**  
 分類 : ミズナギドリ目 ミズナギドリ科  
 学名 : *Bulweria bulwerii* (Jardine & Selby, 1828)  
 英名 : Bulwer's Petrel  
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 全長約 27 cm。全体的に黒褐色だが、大雨覆に淡色帯がある。尾は長いくさび型。嘴や脚は黒色。  
 近似種との区別 : ミズナギドリ科のその他の種よりも明瞭に小さい。ウミツバメ科の種はいずれも尾が角型に切れ込む。

分布の概要 : 太平洋、インド洋、大西洋の熱帯から亜熱帯に広く分布する。日本では宮崎枇榔島を北限として、伊豆諸島、小笠原群島(聳島列島、父島列島、母島列島、西之島)、硫黄列島(南硫黄島)、奄美諸島(ハンミヤ島)、八重山諸島(仲ノ神島)で繁殖が確認されている。尖閣諸島(黄尾島)でも繁殖記録がある。

生態的特徴 : 海洋島に繁殖分布し、岩礁の間隙やサンゴ塊の下などで営巣するほか、他の海鳥類の巣穴を利用することもある。一腹卵数は1卵で、卵は白色か淡い褐色。大きさは、長径40~47mm、短径30~33mmほどである。県内で唯一確実な繁殖が確認されている仲ノ神島では、周辺海上に成鳥が飛来し始めるのが4月下旬から5月上旬、巣穴には6月中旬から7月中旬に卵が、7月下旬には雛が確認されている。成鳥は夜間に帰島し、早朝明るくなる前に採餌に出る。採餌海域や餌生物については不明。

生息地の条件 : 海洋性の無人島で、大きな岩の重なる転石帯を有する。  
 現在の生息状況 : 岩の間隙の奥に入り込んで営巣することが多く、巣および卵や雛を見つけることが非常に困難。仲ノ神島では海岸の転石帯から102 m頂上周囲や稜線にある砂岩帯などに、数巣から十数巣程度の小集団で繁殖している。1981年から1984年に成鳥66羽に標識され、繁殖個体数は多くても100羽程度と推定されている。同島における近年の繁殖規模については全く分かっていない。

生存に対する脅威 : 繁殖地の仲ノ神島は天然記念物に指定され、立ち入りが規制されており、人為的な減少要因はない。小笠原諸島ではクマネズミによると思われるアナドリの捕食被害が報告されている。仲ノ神島でもクマネズミやサキシママダラが生息しているが、現在のところ海鳥個体群に影響を及ぼすほどの捕食例は観察されていない。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。  
 参考文献 : 堀越和夫・鈴木 創・佐々木哲郎・千葉勇人, 2009. 外来哺乳類による海鳥類への被害状況. 地球環境, 14 : 103-105.  
 清棲幸保, 1978. 日本鳥類大図鑑III (増補復刻版). 講談社, 東京.  
 河野裕美・安部直哉・真野 徹, 1986. 仲ノ神島の海鳥類. 山階鳥類研究所研究報告, 18 (1) : 1-27.  
 Brooke, M., 2004. Albatross and Petrels across the world. Oxford, New York.  
 宮島幹之助, 1990. 沖縄県下無人島探検談. 地学雑誌, 12 : 585-596.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

執筆者名 : 河野裕美・水谷 晃

和名 : **アオツラカツオドリ**  
 分類 : カツオドリ目 カツオドリ科  
 学名 : *Sula dactylatra personata* Gould, 1846  
 英名 : Blue-faced Booby, Masked Booby  
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 雌雄同色。頭、胸、体上部から翼背面は、翼の風切羽と尾羽が黒褐色である以外は白色。顔の裸出部は暗濃青色、嘴は黄色、脚は青灰色である。

分布の概要 : 熱帯から亜熱帯海域に広く分布する。沖縄では、尖閣諸島南小島と北小島で繁殖が確認されている。近隣の八重山諸島仲ノ神島では、夏季に、幼鳥羽から成鳥羽へ換羽中の個体が毎年飛来するが繁殖には至らない。他に小笠原諸島西之島で少数の繁殖例がある。

生態的特徴 : 他のカツオドリ類よりも外洋性の傾向が強く、岩礁性島嶼で繁殖し、飛び立ちやすい崖淵や岩棚に営巣することが多い。しかしサンゴ洲島の砂上や灌木の周囲など、平らな場所にも営巣することがある。熱帯の繁殖島では一年を通して営巣し繁殖期は不明瞭。非繁殖期も周辺海域に留まることが知られている。尖閣諸島での繁殖期等の詳細な状況は不明。普通2卵を産下し、無条件兄弟殺しにより一腹子数は1。抱卵日数は約44日、育雛日数は約120日、巣立ち後世話期間は約150日、繁殖開始年齢は2~3年とされている。

生息地の条件 : 外洋性島嶼やその周囲の大きな岩礁等で小ないし中規模のコロニーを形成して繁殖する。飛び立ちやすい崖の縁辺や岩棚、斜面に営巣することが比較的が多いが、人為的攪乱の少ない営巣地では海

〈鳥類〉

- 現在の生息状況 : 岸や平坦な部分にも営巣する。尖閣諸島の継続的な調査は行われていないが、1970年代には生息確認され、1990年代には1991年3月、1992年4月、1994年4月にカツオドリの営巣地のなかで、本種の雛と幼鳥が確認されている。2001年3月には南小島で多数の繁殖と成鳥107羽を、2002年2月には南小島で成鳥87羽と雛22羽を、同年5月には北小島で約50番いの繁殖が確認されている。尖閣諸島では緩やかな繁殖地拡大の傾向が見られるようである。八重山諸島の仲ノ神島海鳥繁殖地には、2000年頃までは毎年1羽から7~8羽の換羽中の亜成鳥が飛来していたが、最近では20~30羽の亜成鳥群が飛来し、集団で休息するようになった。
- 特記事項 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種アオツラカツオドリを選定している。
- 原記載 : Gould, 1846. Proc. Zool. Soc. London : 21 (Australia).
- 参考文献 : 千葉勇人・川上和人・鈴木 創・堀越和夫, 2007. 小笠原諸島における海鳥類の繁殖分布. 山階鳥学誌, 39:1-17(英文).  
池原貞雄・下謝名松栄, 1971. 尖閣列島の陸生動物. “尖閣列島学術調査報告書”, 琉球大学編, 琉球大学, 85-114.  
池原貞雄・安部琢哉・城間 俣, 1978. 尖閣列島・南小島を訪ねて. 沖縄生物学雑誌, 16:39-44.  
Kohno, H., 2000. Visits of immature Blue-faced and Red-footed Boobies to Nakanokamishima, South Ryukyus, Japan. Bull. Inst. Oceanic Res. & Develop., Tokai Univ., (21): 111-117.  
河野裕美, 2002. アオツラカツオドリ. “改訂 日本の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブック― 2 鳥類”, 環境省編, 自然環境研究センター, 東京, 144-145.  
河野裕美・水谷 晃, 2013. 仲ノ神島におけるアオツラカツオドリとアカアシカツオドリの飛来状況 (1986-2013年). 沖縄生物学会誌, 52: 97(P-20).  
正木 任, 1941. 尖閣群島を探る. 採集と飼育, 3: 102-111.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
高良鉄夫, 1954. 尖閣列島の動物相について. 琉球大学農学部学術報告, 1: 57-74.  
高良鉄夫, 1969. 尖閣列島の海鳥類について. 琉球大学農学部学術報告, (16): 1-13.
- 参考資料 : 沖縄テレビ放送, 2002. 尖閣諸島南小島と北小島における2002年2月25日-27日及び5月7日-8日の素材映像.  
沖縄テレビ放送, 2003. 風によって復活への離陸 尖閣諸島のアホウドリ. 2003年8月17日放映.
- 執筆者名 : 河野裕美・水谷 晃

- 和名 : カツオドリ
- 分類 : カツオドリ目 カツオドリ科
- 学名 : *Sula leucogaster plotus* (Forster, 1844)
- 英名 : Brown Booby
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態 : 頭部、頸、胸、体上面は一律に黒褐色。腹と翼下面は白色。羽衣は雌雄同色だが、顔の裸出部や足色が異なり、雄は黄緑色だが雌は黄色みが強い。幼鳥は腹の白色部に褐色斑が混じる。
- 分布の概要 : 沖縄県の八重山諸島仲ノ神島と尖閣列島南小島・黄尾嶼、および鹿児島県のトカラ列島と草垣諸島などで繁殖する。仲ノ神島では2009年に、東部太平洋のカリフォルニア湾からメキシコ沖に分布するとされる亜種シロガシラカツオドリ *S. l. brewsteri* Goss, 1988 の雄1羽が分散飛来し、初記録された。2011年からは雄2羽が飛来するようになった。このうちの1羽が、2012-2014年に亜種カツオドリ *S. l. plotus* と思われる雌と番形成し、雛を単立させた。亜種シロガシラカツオドリ *S. l. brewsteri* の雄の頭部から頸部が白色であることで容易に識別できるが、両亜種の雌の外観上の差異は認められず、雌の分散飛来の有無は明らかでない。
- 生態的特徴 : 仲ノ神島における産卵期は、早い個体では2~3月だが6~7月でも少数だが産卵する個体がいる。産卵の同調性は低い。一腹卵数は1~3だが、主に2卵を産下する。抱卵日数は約45日、約100日の育雛期間を経て単立ちする。兄弟間の無条件兄弟殺しが行われ、一腹子数は1。幼鳥は単立ちした後約1~3ヶ月の独立期間を要し、親鳥から補助給餌を受けながら飛翔・飛び込み潜水採食技術を発達させる。繁殖期の採餌範囲は周囲50キロメートル以内であり、飛び込み潜水深度は約4メートル以浅である。主にトビウオ類、次いでサヨリ類、アジ類、サバ類などの魚類とトビイカ幼若個体を採食する。幼鳥は9~11月には仲ノ神島から渡去し、フィリピン南部周辺海域に渡る個体が多い。幼鳥が出生島・仲ノ神島へ初帰還するのは早くも2年だが、普通は繁殖が可能になる3~4年である。
- 生息地の条件 : 外洋性島嶼、あるいは島嶼周囲の属島や大きな岩礁等でゆるやかなコロニーを形成して繁殖する。飛び立ちやすい崖の縁辺や岩棚、斜面に営巣することが比較的が多いが、人為的攪乱の少ない営巣地では海岸や平坦な部分にも営巣する。
- 現在の生息状況 : 仲ノ神島の繁殖個体数は1980年代には200番い前後であったが、最近では2010年代では1,000番い前後にまで増加傾向を示している。尖閣諸島の正確な生息数は不明だが、仲ノ神島よりはるかに多く、数千羽は生息していると推定されている。
- 生存に対する脅威 : 仲ノ神島海鳥繁殖地は天然記念物ならびに鳥獣保護区特別保護地区に指定され、上陸が制限されているため繁殖環境は安定している。
- 特記事項 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種カツオドリを選定している。

- 原 記 載 : Forster, 1855. Descr. Anin., ed. Licht. : 278 (Near New Caledonia).
- 参 考 文 献 : del Hoyo, J., Elliott, A. & Sargatal, J. 1992. Handbook of the Birds of the World. Vol. 1. Lynx Editions, Barcelona.
- 岸本浩和・河野裕美, 1989. 仲ノ神島(琉球列島)で繁殖中の海鳥類の食餌動物. 東海大学海洋研究所研究報告, (10):43-64.
- 河野裕美, 1991. 仲ノ神島で兄弟殺し カツオドリ. 週間朝日百科 動物たちの地球 14 鳥類 I ペンギン・ペリカン・ウハカ”, 朝日新聞社, 東京, 56-57.
- 河野裕美, 1992. 仲ノ神島で繁殖する海鳥類の重要な食餌動物として出現するトビイカ幼若個体の分布様式について. 日本鳥学会 1992 年度大会講演要旨集, 71.
- 河野裕美, 1993. 仲ノ神島におけるカツオドリの標識研究, 帰還・繁殖年齢・生存率と移動(予報). 日本鳥学会 1993 年度大会講演要旨集, 19.
- 河野裕美, 1995. 仲ノ神島の海鳥をみつめて, 特にカツオドリの繁殖と個体群の現状について. 沖縄生物学会第 32 回講演要旨集, 16.
- Kohno, H., 2000. Visits of immature Blue-faced and Red-footed Boobies to Nakanokamishima, South Ryukyus, Japan. Bull. Inst. Oceanic Res. & Develop., Tokai Univ., (21): 111-117.
- 河野裕美・安部直哉・真野 徹, 1986. 仲ノ神島の海鳥類. 山階鳥類研究所研究報告, 18(1) : 1-27.
- 河野裕美・水谷 晃, 2011. 日本におけるカツオドリ亜種 *Sula leucogaster brewsteri* の初記録(英文). 山階鳥類学雑誌, 42 : 147-153.
- 河野裕美・水谷 晃, 2015. 日本におけるシロガシラカツオドリ *Sula leucogaster brewsteri* の初繁殖行動(英文). 山階鳥類学雑誌, 46 : 108-118.
- Kohno, M. & Mizutani, A., 2014. The 30-years seabird population trend on Nakanokamishima, in the south Ryukyus, Japan. Ornithological Science, 13 (Supplement): 213 (P04-083).
- 河野裕美・水谷 晃・菅原 光・村越未来・筒井康太・依田 憲, 2013. カツオドリのモニタリング手法の提案 -雛の羽衣パターンによる齢査定とそれに基づく繁殖期の推定-. 東海大学沖縄地域研究センター所報, 西表島研究 2012, 29-44(和英文).
- Kohno, H. & Yoda, K., 2011. The development of activity ranges in juvenile Brown Boobies *Sula leucogaster*. IBIS, 153(3): 611-615.
- 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.
- 関 伸一・所崎 聡・溝口文男・高木慎介・仲村 昇・ファーガス・クリスタル, 2011. トカラ列島の鳥類相. 森林総合研究所研究報告, 10(4) : 189-229.
- Yoda, K. & Kohno, H., 2008. Plunging behavior in chick-rearing Brown Boobies. Ornithological Science, 7:5-13.
- 依田 憲・河野裕美, 2009. 巣立ったカツオドリを追って. 日本バイオロギング研究会編「WAKUWAKU ときめきサイエンスシリーズ 1 バイオロギング -最新科学で解明する動物生態学」, 184-187.
- Yoda, K., Kohno, H. & Naito, Y., 2004. Development of flight performance in the brown booby. Proc. R. Soc.Lond B (Suppl.), 271 : S240-S242.
- Yoda, K., Murakoshi, M., Tsutsui, K. & Kohno, H., 2011. Social interactions of juvenile brown boobies at sea as observed with animal-borne video cameras. PLoS One, 6(5): e19602.

執 筆 者 名 : 河野裕美・水谷 晃

- 和 名 : ヨシゴイ
- 分 類 : ペリカン目 サギ科
- 学 名 : *Ixobrychus sinensis sinensis* (Gmelin, 1789)
- 英 名 : Yellow Bittern
- カ テ ゴ リ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : 全長 36 cm。頭頂と風切は黒く、背面は黄褐色。体下面は淡黄褐色。雌雄はよく似ているが、雌の頭頂は赤褐色に黒い縦斑、体下面には褐色の縦斑がある。日本産最小のサギ類。
- 近似種との区別 : 県内で同所的に生息するリュウキュウヨシゴイが全体に明るいレンガ色であるのに対し、ヨシゴイは黄土色で飛行時には風切羽の黒色が特徴的である。
- 分布の概要 : 九州以北に渡来し繁殖する夏鳥である。琉球列島ではこれまで冬鳥とされているが、近年、南大東島では少数が周年生息し繁殖が確認された。宮古諸島池間島でも少数が周年生息し、巣立ち雛が確認された。
- 生態的特徴 : アシ原や水田などで身をひそめ、小魚やカエル類、昆虫などを餌にしている。5~6 月頃が繁殖期で、本土の繁殖地では 5~6 個の淡青緑色の卵を産み、抱卵期間は約 18 日である。県内の繁殖地では抽水植物群落に営巣するため、巣の発見は積極的に探索しない限り困難である。その詳しい生態や分布、個体数は不明である。
- 生息地の条件 : アシ原、水田、湿地など。
- 現在の生息状況 : 沖縄諸島や八重山諸島では繁殖は確認されておらず冬鳥と思われる。現在繁殖が確認されているのは大東諸島の南大東島と宮古諸島の池間島で、これらの島では留鳥であろう。今後、他の島でも繁殖確認が行われる可能性がある。
- 学術的意義・評価 : 通常、県外では夏鳥であるが、県内では冬鳥または一部で留鳥として生息しており、本種の生態や分布を考える上で重要である。
- 生存に対する脅威 : 湿地の改変や埋め立て、河川の改修等。
- 特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \* IUCN は種として評価。本県改訂は基亜種ヨシゴイを選定している。
- 原 記 載 : Gmelin, 1789. Syst. Nat., 1(2): 6432(China).

参 考 文 献 : 環境省, 2014. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, 東京.  
松井 晋・高木昌興・上田恵介, 2006. 南大東島におけるヨシゴイの初営巣記録. 日本鳥学会誌, 55: 29-31.  
宮古野鳥の会編, 2014. 宮古野鳥の会 40 周年記念誌. 106pp.  
砂川栄喜, 2011. 沖縄 宮古の野鳥 亜熱帯の水辺、山野の鳥. ボーダーインク, 那覇.  
山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執 筆 者 名 : 高木昌興

和 名 : リュウキュウヨシゴイ  
分 類 : ペリカン目 サギ科  
学 名 : *Ixobrychus cinnamomeus* (Gmelin, 1789)  
英 名 : Cinnamon Bittern  
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 : 全長 40 cm。雄は頭部から上面にかけて一様に赤褐色。嘴は細めで黄色く、先端は尖る。嘴峰は黒色。虹彩は黄色で、瞳の後方は黒色になる。繁殖盛期には眼先が赤い婚姻色になる。喉と側頭上部には白斑があり、前頸から下面は淡赤褐色で中央に褐色の縦斑がある。脚は緑黄色。雌は頭上が暗褐色で、上面は暗赤褐色。上面には淡褐色の斑が散在する。

近似種との区別 : ヨシゴイは小さく、体上面は黄褐色。オオヨシゴイ雌は本種幼鳥に似るが、頭部から上面は赤褐色で、風切は黒褐色。

分布の概要 : インドから東南アジア、中国東部、台湾までの南アジアに広く分布する。国内で留鳥として奄美以南の南西諸島に生息し繁殖するサギ類である。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁種のヨシゴイは大東諸島と宮古諸島の池間島では留鳥と考えられるが、その他の県内各地では旅鳥もしくは冬鳥と考えられる。

生態的特徴 : 県内各地の水田や河川沿い、湿地、マングローブ林、アシ原などで見られるが群れをつくらない。餌は魚類、カエル類、貝類、昆虫類などを食べる。繁殖期は5~6月で草むらなどの地上やアシの茎の間に草の葉や茎を集めて巣をつくり、2~5個の卵を産む。雌が抱卵し雛をかえす。

生息地の条件 : 水田やタイモ栽培地、イグサやフトイ栽培地など。

現在の生息状況 : 県内では本種の生態調査が実施されたことがなく、詳しい生態や分布個体数は不明。数はそう多くはない。

学術的意義・評価 : 東洋区系の鳥類に属し、国内における北限種としての生息地拡大の例として貴重である。

生存に対する脅威 : 近年コンクリートによる河川改修や湿地の埋め立て、水田等の畑地化の進行で生息地の減少傾向が見られる。

特記事項 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

原 記 載 : Gmelin, 1789. Syst. Nat., 1(2): 643(China).

参 考 文 献 : 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.

黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.

日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.

日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. リュウキュウヨシゴイ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 316.

沖縄県環境保健部自然保護課(編), 2005. リュウキュウヨシゴイ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 79.

沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.

榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.

山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執 筆 者 名 : 原戸鉄二郎\*・嵩原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における原戸による記載内容を一部見直した。

和 名 : チュウサギ  
分 類 : ペリカン目 サギ科  
学 名 : *Egretta intermedia intermedia* (Wagler, 1829)  
英 名 : Intermediate Egret  
方 言 名 : サーザー(シラサギ類)  
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 全長 68 cm。中型の白サギ類で全身が白色。雌雄同色。口角の食い込みは眼の下まで。繁殖羽では嘴は黒色で、眼先は黄色。胸と背にはレース状のかざり羽を生じる。足と趾は黒色。繁殖盛期には眼先が黄緑色なり、虹彩は赤色味を帯びた婚姻色となる。非繁殖期の嘴は黄色。その先端がわずかに黒いものもいる。

近似種との区別 : ダイサギはより大きく、嘴や頸、足は長い。口角は眼より後方まで食い込む。コサギはより小型で、非繁殖羽でも嘴は黒く、趾は黄色。

- 分布の概要： インドから東南アジア、中国東部、挑戦半島で繁殖し、北方のものは冬季に南に渡る。日本では本州から九州に夏鳥として渡来し、繁殖する。南西諸島では旅鳥、または冬鳥。
- 生態的特徴： 水田や湿地、農耕地などで生息し、魚類、甲殻類、昆虫類などを利用する。ダイサギやコサギのように干潟にはあまりでない。林や竹やぶなどで他のサギ類と混合したコロニーを形成して繁殖する。巣は枯れ枝を集めて皿状の巣をつくり、淡青色無斑の卵を4〜5個産卵する。雌雄で6〜7週間抱卵と育雛を行う。なお、県内では繁殖例はみられない。
- 生息地の条件： 水田や湿地、農耕地などで生息する。ダイサギやコサギに比べ、農耕地など乾燥した場所も利用する。
- 現在の生息状況： 県内では繁殖せず、旅鳥や冬鳥として渡来し、水田やタイモ栽培地、湿地、農耕地などで生息する。群れを作らず、単独でいることが多い。なお、渡りの際には群れをなすこともある。
- 学術的意義・評価： 県内における渡来数は少ないが、本種の渡りを考える上で重要である。
- 生存に対する脅威： 水田の休耕地化や湿地環境の埋め立て等の進行による生息地の減少。
- 特記事項： 旅鳥や冬鳥として普通に渡来する種であるが、中継地や越冬地の一部としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト2014の категорияに準拠した。  
宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。  
IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は基亜種チュウサギを選定している。
- 原記載： Wagler, 1829. Isis, 659. (Java).
- 参考文献： 藤巻裕蔵, 2014. チュウサギ. レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 224.  
環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.  
環境省編, 2002. チュウサギ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 2鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 229.  
“日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 2鳥類”, ぎょうせい, 東京.  
黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. チュウサギ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 316-317.  
沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.  
山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.  
日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.
- 執筆者名： 原戸鉄二郎\*・髙原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における原戸による記載内容を一部見直した。

和名： カラシラサギ  
 分類： ペリカン目 サギ科  
 学名： *Egretta eulophotes* (Swinhoe, 1860)  
 方言名： Chinese Egret  
 カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

- 形態： 全長 65〜68 cm. 中型のサギ類で、全身白色。雌雄同色で繁殖羽では後頭に長い房状の冠羽があり、胸や背にはかざり羽がある。目は青緑色で嘴は黄色。足は黒色で趾はコサギと同様に黄色。非繁殖羽では嘴の基部以外は黒色で、冠羽やかざり羽が無くなる。
- 近似種との区別： コサギ繁殖羽は頭部に長い冠羽が2本あり、嘴は黒色で眼先は黄色または赤色。非繁殖羽では嘴の基部まで黒色。クロサギの白色型は嘴が淡黄色味を帯びるがやや太く、足が短い。
- 分布の概要： ロシア沿海地方や朝鮮半島、中国東部で繁殖し、冬季にフィリピンやボルネオ島北部、マレー半島で越冬する個体が多い。日本では春秋の渡り期に全国の河口や干潟で旅鳥として記録されるが、繁殖地に近い九州や沖縄地方では記録が多く、その記録も増加傾向にあるとされている。
- 生態的特徴： 河口や干潟で活発に動き回りながら、甲殻類や魚類などを捕らえて餌にする。翼をバツ、バツと半開きする行動がしばしば見られる。繁殖地ではコサギやアマサギと同所的に繁殖コロニーを形成し、樹上に枯れ枝を集め巣づくりする。
- 生息地の条件： 河口干潟、湿地などの環境。
- 現在の生息状況： 世界的に生息分布が局地的で繁殖地での総個体数は2,600〜3,400羽とされている。県内では1から数羽が数少ない旅鳥及び迷鳥として飛来し、春から初夏に見られることが多い。時には冬季に飛来し、しばらく滞在することがある。
- 学術的意義・評価： 生息分布が局地的であり、総個体数も少ないとされる。
- 生存に対する脅威： 河口干潟や湿地の埋め立てや改変等により、渡り期の生息地が減少傾向にある。
- 特記事項： 数すくない旅鳥もしくは迷鳥として渡来する種であるが、中継地の一部としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト2014の категорияに準拠した。IUCN カテゴリー：Vulnerable (VU)。
- 参考文献： 藤井 幹, 2014. カラシラサギ. レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 224.  
沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.



執筆者名： 高原建二

和名： リュウキュウヒクイナ  
分類： ツル目 クイナ科  
学名： *Porzana fusca phaeopyga* Stejneger, 1887  
英名： Ryukyu Ruddy Crane  
カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態： 全長 23 cm。雌雄同色。夏羽では頭頂から上面にかけては暗緑褐色。額から顔、胸から腹にかけては赤褐色で、喉はやや淡い。嘴は暗灰色で、先端は尖る。虹彩は赤色。下腹から下尾筒にかけては白黒の横縞模様で、足は赤色。なお、亜種ヒクイナより本亜種のほうがより暗色とされるが、野外での識別には困難さがある。

近似種との区別： オオクイナはより大きく、頭部が赤褐色で、下胸から下部に横縞がある。足は灰黒色。  
分布の概要： 県内各地に留鳥として生息するが、数は少ない。なお、亜種ヒクイナ *P.f. erythrothorax* は本土では九州から北海道まで夏鳥として渡来し、本州中部以南で越冬するものがある。

生態的特徴： 本亜種の生態的な調査研究等がされることがなく、詳しい生態や生息個体数は不明であるが、基本的に繁殖生態は亜種ヒクイナと同様と考えられる。ヒクイナの繁殖期は 5~9 月で、なわばり性があり、巣は湿地や水田の草、アシ、イネなどの中に水草の葉や根、イネなど積み上げて造るとされる。亜種リュウキュウヒクイナは畑そばのチガヤ草原での営巣例がある。亜種ヒクイナは卵の数は 1 腹 4~9 個。雌雄交代で抱卵し、約 20 日で孵化。餌は水性昆虫とその幼虫、軟体動物、水性植物の若葉とされている。おそらく、リュウキュウヒクイナも同様な繁殖生態であろう。

生息地の条件： 水田や湿地、河川沿い、タイモ栽培地、イグサ栽培地などで生息。  
現在の生息状況： 県内各地の水田や湿地、河川沿いなどで生息し繁殖している固有亜種。数は少なく、草かげに隠れるように暮らしているため見られる機会もまれである。3~4 月にはキョ・キョ・キョ・キョ・・・とすだいに速くなり、物をたたくような繁殖期特有の鳴き声を夕方から夜間にかけて聞くことができる。

学術的意義・評価： 南西諸島に生息する固有亜種として重要である。  
生存に対する脅威： 沖縄島では外来種のマングースが定着し、本種は地上近くで営巣するため、卵や雛等が捕食され、個体数を減らしている可能性が高い。宮古諸島では外来種のイタチにより捕食等の影響が考えられる。

特記事項： 別亜種のヒクイナ *P.f. erythrothorax* も冬鳥として渡来しているといわれているが、野外での識別は難しい。IUCN カテゴリー： Least Concern (LC)\* \*IUCN は種として評価。本県改訂は亜種リュウキュウヒクイナを選定している。

原記載： Stejneger, 1887. Proc. U. S. Nat. Mus., 10: 394. (Yaeyama Is., Ryukyus).  
参考文献： 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.  
日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. リュウキュウヒクイナ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 318.  
沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.  
山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名： 原戸鉄二郎\*・高原建二(追補) \*前回改訂版 (2005) における原戸による記載内容を一部見直した。

和名： ツルクイナ  
分類： ツル目 クイナ科  
学名： *Gallinula cinerea* (Gmelin, 1789)  
英名： Water Cock  
カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態： 雄 42~43 cm、雌 33 cm。雄繁殖羽は頭部から胸や下面は黒色。嘴は黄色で、額板は赤く、額板上部は角状に突出する。体下面は黒色で羽縁は褐色。足は黄緑色。雌は頭上が黒褐色で、顔から胸、下面は黄褐色。体上面は黒褐色で、羽縁は黄褐色。雄の非繁殖羽は雌に似るが、額板がある。

近似種との区別： エリマキシギの幼羽は雌および雄非繁殖羽に似ているが、嘴は細く、体は小さい。  
分布の概要： パキスタンやインドから東南アジア、中国東部、台湾と中国東北部、ウスリー南部で繁殖し、北方のものは冬季に南に渡る。国内では稀な旅鳥であるが、県内では、八重山諸島の石垣島の一部地域では留鳥として繁殖している。石垣島以外では数少ない冬鳥もしくは迷鳥。

生態的特徴： なわばり性を持ち、繁殖期は 6~9 月。草の間にイグサやアシ、ガマなどの葉や茎を使い、皿状の巣を造る。1 腹 3~6 個の卵を産み、約 24 日で孵化する。餌は主に草の若芽や種子、水性昆虫、バッタなどを食べる。単独かつがいで生活する。

生息地の条件： 水田や河川とその河川沿いの湿地など。

現在の生息状況 : 石垣島以外の八重山諸島の島々や沖縄諸島、宮古諸島では渡り鳥として冬期に水田や河川沿いなどで見られることがあるが、数は少ない。大東諸島では迷鳥。  
 学術的意義・評価 : 国内では唯一、石垣島でのみ繁殖しているクイナ類である。  
 生存に対する脅威 : 繁殖地である石垣島の水田や湿地環境の改変、水田の休耕地化と畑地化などの進行。冬鳥として渡来する県内各地の水田や河川、河川沿いの湿地の改変や、水田、イグサ栽培地、タイモ栽培地の休耕地化と畑地化などの進行に生息地の減少。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。  
 原記載 : Gmelin, 1789. Syst. Nat., 1(2): 702. (ex Latham, China).  
 参考文献 : 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
 日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ツルクイナ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 319.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.  
 山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名 : 原戸鉄二郎\*・髙原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における原戸による記載内容を一部見直した。

和名 : ヒメアマツバメ  
 分類 : アマツバメ目 アマツバメ科  
 学名 : *Apus nipalensis kuntzi* Deignan, 1958  
 英名 : House Swift  
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 該当なし

全長 13 cm、沖縄島北部の国頭村や本部町、八重山諸島の石垣島と西表島などで少数が繁殖しているが、局地的である。また、継続的に調査した観察記録の報告例がない。建造物の軒やスラブ下に半円筒状の羽毛や泥を丸めた巣をつくり小コロニーを形成することもある。県内では一部は留鳥と考えられるが、大部分は旅鳥と考えられ、春と秋の渡りの時期には複数の群を観察することもある。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC) \* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種ヒメアマツバメを選定している。

原記載 : Blyth, 1849. Jour. Asiat. Soc. Bengal, 18(2): 807. (Penang).  
 参考文献 : 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
 日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ヒメアマツバメ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 323.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名 : 原戸鉄二郎\*・髙原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における原戸による記載内容を一部見直した。

和名 : オオジシギ  
 分類 : チドリ目 シギ科  
 学名 : *Gallinago hardwickii* (Gray, 1831)  
 英名 : Latham's Snipe  
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 雌雄同色。頭頂は黒褐色で、頭中央線は黄白色。顔は淡褐色で、過眼線は黒褐色。頬にも黒褐色の線がある。嘴はまっすぐで長く、先端は黒色で基部は淡褐色。頸から胸は褐色で、黒褐色の縦斑がある。背及び肩羽は黒褐色で、淡褐色斑が混在し、肩羽の羽縁は黄白色。上部雨覆は淡褐色。尾羽は赤褐色で、黒褐色斑が混在し、通常 16~18 枚。

近似種との区別 : チュウジシギはやや小さく、側頸から側胸や雨覆がより暗色。尾羽は通常 20~22 枚。タシギは小さく、過眼線は太く、頭部の大きさと比較して嘴は長めである。翼の裏が白く、次列風切先端が白色。

分布の概要 : 日本やロシア沿海地方、サハリン、千島列島で繁殖し、主にオーストラリア東部とタスマニアなどで越冬する。日本では本州中部以北に夏鳥として渡来し、繁殖する。春秋の渡り期には本州以南の水田や湿地などを中継地として利用する。県内でも旅鳥として通過する。

生態的特徴 : 繁殖地は本州中部の高原地域と東北地方や北海道の平地の草原。地上にさら形の巣をつくり、4 卵を産む。卵は黄褐色の地に黒褐色の斑がある。餌は昆虫類、クモ、ミミズなどの他、植物の種子も利用する。繁殖期にはズピーヤク、ズピーヤクと鳴きながら飛び回り、急降下するとザザザ・・・と大きな音を出すことで知られる。

生息地の条件 : 水の張った水田や湿地環境。

現在の生息状況 : 県内では主に春秋の渡り期に通過する数少ない旅鳥である。県内各地の水田やイグサ栽培地、タイ

モ栽培地、湿地などで見られる。

- 学術的意義・評価 : 県内における渡来数は少ないが、本種の渡りを考える上で重要である。  
生存に対する脅威 : 渡り期の中継地となる水田の畑地化や湿地の埋め立てなどが進行している。  
特記事項 : 旅鳥として渡来する種であるが、数が少なく、中継地の一部としての本県でも保護を図る必要があり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリーに準拠した。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。  
参考文献 : 藤井 幹, 2014. オオジシギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 29.  
黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版, 647pp.

執筆者名 : 高原建二

和名 : ハマシギ  
分類 : チドリ目 シギ科  
学名 : *Calidris alpina* (Linnaeus, 1758)  
英名 : Dunlin  
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 全長 20 cm. 雌雄同色。嘴は長く黒色で、中央から先端にかけてやや下に湾曲する。繁殖羽は頭上  
が茶褐色で、黒色の細い縦斑がある。顔は淡褐色で不明瞭な眉斑がある。上面は茶褐色で、黒色の  
斑が混在する。喉から下面は白色で、胸に黒色の細い縦斑があり、腹部には大きな黒色斑がある。  
飛翔時の翼上面には白色の翼帯があり、尾は灰色で、中央尾羽は黒色。足も黒色。非繁殖羽は頭部  
から上面は一樣に灰褐色で、下面は白色。幼鳥は全体的に褐色味があり、腹部は白色の地に黒褐色  
の縦斑がある。

近似種との区別 : サルハマシギはやや大きく、嘴と足はより長い。また腰は白い。  
分布の概要 : ユーラシアと北米のツンドラ地域で繁殖し、冬季には地中海沿岸、アフリカ西海岸から中東、中国  
南部及び北米の沿岸地方に渡り、越冬する。国内では旅鳥または冬鳥として、各地の干潟などに渡  
来する。

生態的特徴 : 繁殖地であるツンドラ地域では湿った草原で営巣し、4卵を産む。雌雄ともに抱卵し、抱卵日数は  
約 22 日間とされる。繁殖期の餌は昆虫類が主体である。渡り期や越冬地では干潟にせわしく嘴を  
差し込み、ゴカイ類や小型の甲殻類などを餌にしている。

生息地の条件 : 干潟、砂浜海岸、河川、水田、埋め立て地の水溜まりなど。  
現在の生息状況 : 県内各地に主に冬鳥として渡来する。以前は数十羽内外の群れで見られる機会が多かったが、最近  
では小群や単独が多い。

学術的意義・評価 : 県内における渡来数は最近減少傾向であるが、本種の渡りを考える上で重要である。  
生存に対する脅威 : 冬季の生息地となる干潟の埋め立て、砂浜海岸や河川の改変改修、水田の畑地化や放棄などが進行  
している。

特記事項 : 旅鳥や冬鳥として渡来する種であるが、中継地や越冬地の一部としての本県でも保護を図る必要が  
あり、環境省レッドリスト 2014 のカテゴリーに準拠した。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

参考文献 : 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
守屋年史, 2014. ハマシギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類,  
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 229.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版, 647pp.

執筆者名 : 高原建二

和名 : リュウキュウクロアジサシ  
分類 : チドリ目 カモメ科  
学名 : *Anous stolidus pullus* Bang, 1901  
英名 : Brown Noddy  
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 額から後頭にかけて灰白色、目先は黒褐色でそれ以外の全身は暗褐色である。尾は浅い凹状。嘴は  
黒く、足は黒褐色である。幼鳥や若鳥は成鳥に似るが頭部の灰白色は前額だけか、あるいは頭上部  
におよぶ場合でも斑状で成鳥のようになめらかな色調でない。

近似種との区別 : 日本では、小笠原群島、硫黄列島、南鳥島で繁殖する *A. s. pileatus* と八重山諸島仲ノ神島で繁殖す  
る本亜種 *A. s. pullus* が生息する。稀に飛来するヒメクロアジサシ *Anous minutus* は、本亜種より一  
回り小さい。嘴は細長く、額から頭頂の白色部は本亜種よりもはっきりしており、体色の黒味も強  
い。また飛翔中のアナドリと混同しやすいが、少し小さく、翼上面に淡色帯を有し、額から頭頂部  
の白色を欠くことで区別できる。

- 分布の概要** : 熱帯から亜熱帯海域に分布する。沖縄県では、尖閣諸島北小島・南小島と八重山諸島仲ノ神島、宮古島沿岸のフデ岩とグンカンパナリで繁殖する。
- 生態的特徴** : 仲ノ神島における本種の繁殖生態の概要は次の通り。繁殖島の周辺海域には4月中旬頃に飛来し、下旬に営巣地となる岩棚に降りる。主に5月上旬ないし中旬頃に産卵開始、同調性は弱い。一腹卵数は1卵である。仲ノ神島での抱卵日数は明らかでないがおよそ35日前後。孵化後55～65日齢で巣立ちし、主に10月中には渡去する。同島で成鳥3羽に装着したジオロケータの記録では南シナ海やスルー海で越冬していた。仲ノ神島の本亜種は魚類とイカ類を採食するが、その割合は個体数比で9対1、重量比では7対3である。主要な餌生物はカタクチイワシ科、ヒメジ科、トビウオ科の魚類とアカイカ科のイカ類である。
- 生息地の条件** : 沿岸から外洋性の島嶼で繁殖する。主に崖の岩棚や海岸転石帯の岩上、灌木の周囲、海浜性草本の上等に営巣する。
- 現在の生息状況** : 2009年～2015年までの環境省によるモニタリングサイト1000による調査では、宮古島のフデ岩とグンカンパナリでは、成鳥1,261～1,335羽432～486巣と成鳥359～556羽136～218巣が各々記録された。仲ノ神島では、2012年と2015年の環境省による同調査で、島の西側半分で成鳥1,676～3,257羽790～830巣が記録された。尖閣諸島における近年の生息状況は不明。
- 生存に対する脅威** : 仲ノ神島では天然記念物に指定され、立ち入りが規制されており、人為的な減少要因はない。それ以外の繁殖地では、磯釣り、マリンレジャー、バードウォッチング、写真撮影等による立ち入りが報告され、その頻度増加による営巣中止あるいは営巣地放棄が懸念される。
- 特記事項** : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は種クロアジサシの亜種リュウキュウクロアジサシを選定している。
- 原記載** : Scopoli, 1786. Del. Flor. Faun. Insubr., 2: 92. (Philippines).
- 参考文献** : 環境省自然環境局生物多様性センター, 2013. 平成24年度 モニタリングサイト1000海鳥調査報告書。  
自然環境局生物多様性センター, 2016. 平成27年度 モニタリングサイト1000海鳥調査報告書。  
岸本浩和・河野裕美, 1989. 仲ノ神島(琉球列島)で繁殖中の海鳥類の食餌動物. 東海大学海洋研究所研究報告, (10): 43-64.  
河野裕美, 1992. 仲ノ神島で繁殖する海鳥類の重要な食餌動物として出現するトビイカ幼若固体の分布様式について. 日本鳥学会1992年度大会講演要旨集, 71.  
河野裕美・安部直哉・真野 徹, 1986. 仲ノ神島の海鳥類. 山階鳥類研究所研究報告, 18(1): 1-27.  
Kohno, H. & Kishimoto, H., 1991. Prey of the Bridled Tern *Sterna anaethetus* on Nakanokamishima Island, South Ryukyu, Japan. Jpn J. Ornithol. 40(1): 15-25.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県文化環境部自然保護課(編), 2005. 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 - レッドデータおきなわ. 沖縄県文化環境部自然保護課, 沖縄.

**執筆者名** : 河野裕美・水谷 晃

**和名** : マミジロアジサシ  
**分類** : チドリ目 カモメ科  
**学名** : *Sterna anaethetus Scopoli, 1786*  
**英名** : Bridled Tern  
**カテゴリー** : 準絶滅危惧 (NT)                      環境省カテゴリー: 該当なし

**形態** : 額から目の上にかけて細い白色部分がある。過眼線から頭頂、後頭部にかけては黒色で、背、翼上面、腰、尾は暗灰褐色である。喉から胸にかけては白色で灰色味を帯びる。嘴と脚は黒色である。巣立ち幼鳥と若鳥は、前額から頭頂にかけては白色の混じる斑状で、背から翼上面の色彩はおよそ3タイプある：一様に暗灰褐色、あるいは羽縁が茶色ないし白色、背の羽縁だけが茶色ないし白色で翼上面は暗灰褐色。

**近似種との区別** : 本種の繁殖地のある八重山諸島には近似種のセグロアジサシ *S. fuscata* が繁殖分布するので、飛翔個体の識別には注意を要する。セグロアジサシの頭頂から後頸、背、翼上面にかけては一様に黒色で、頭部と翼背面がつながるのに対して、本種では頭部が黒色のキャップ状で後頸が白く、暗灰褐色の翼背面とに分かれる。また額から目上に連なる白色部分の長さに差異があり、セグロアジサシは短く目の上まで、マミジロアジサシは目の後端までであることで識別できる。繁殖地では、セグロアジサシが開けた平らな場所に高密度で規模の大きなコロニーを形成し、草上あるいは地上に直接営巣するのに対して、マミジロアジサシは海岸線の大きな転石帯や岩場の岩陰に営巣するので容易に識別できる。

**分布の概要** : 太平洋、大西洋、インド洋の熱帯から亜熱帯に広く分布する。4～7亜種に分類されるが、一致した見解が得られていない。日本に生息する亜種は *S. anaethetus anaethetus* とされ、オーストラリアからマレーシア、インドネシア、フィリピン、台湾、日本にかけて広く分布する。日本では徳之島を北限として、与論島、沖縄島沿岸離島、宮古諸島のフデ岩やグンカンパナリ、八重山諸島の仲ノ神島や石西礁湖ハマ島で繁殖する。また1972年7月に尖閣諸島赤尾嶼で約1,000羽の本種が観察されており、その後も1984年8月、1991年5月に北小島の海岸断崖部や沿岸で観察されているので繁殖している可能性がある。

**生態的特徴** : 海洋島に繁殖分布し、巣は海岸転石帯や斜面、あるいは上部の岩の重なる岩陰の隙間につくる。巣材はあまり使わず、少数の小石やサンゴ礫片等を置く。国内最大の繁殖地である仲ノ神島では5月上旬に営巣地に渡来し、中旬から6月上旬に1卵を産下する。繁殖集団内での産卵の同調性は低い。

〈鳥類〉

抱卵日数は約 28～30 日、巣立ち日数は約 55～60 日である。9 月中旬までに、ほとんどの成鳥と巣立ち幼鳥は渡去する。基本的に沿岸採食性で、同島の本種の食餌動物は、魚類 93.1%、イカ類 6.4%、昆虫類 0.5% であり、主にトビウオ科、ニシン科、マツダイ科、アジ科等の 6cm 以下の幼魚を食べていた。また本種は、仲ノ神島で繁殖する海鳥類の中でも、漂流物や流藻に随伴する生態的特性がある魚類を最も多く食べていた。

**生息地の条件** : 海洋性の無人島や岩礁の大きな岩の重なる転石帯のある海岸、斜面や頂上部の岩場等の岩と岩の小さな隙間や岩陰に営巣する。

**現在の生息状況** : 2005～2015 年の環境省モニタリングサイト 1000 により、沖縄島沿岸離島で成鳥 30～212 羽 0～93 巣が、2009～2015 年の同調査により宮古島のフデ岩とグンカンパナリで成鳥 76～97 羽と 191～283 羽が各々記録された。仲ノ神島では、2012 年と 2015 年の同調査により、島の西側半分で 502～561 羽が記録された。また、これ以前に行なわれた同島の主要営巣地全域での調査では、成鳥 980～1,650 羽 (推定 2,000 羽以下)、巣立ち幼鳥 200～300 羽が計数されたこともある。石西礁湖ハマ島フデ岩では、2009 年の巣立ち期に成鳥 98 羽と幼鳥 20 羽が記録された。尖閣諸島における近年の生息状況は不明。

**学術的意義・評価** : 本亜種の分布の北限域として重要である。また本種は、コロニー規模や営巣地選択などの面から、熱帯性アジサシ類の中でも、沿岸の開けた岩礁に営巣するエリグロアジサシやベニアジサシと海洋性の島嶼に高密度大規模で営巣するセグロアジサシ等との中間的な生態を有し、アジサシ類の適応や分化を考察するうえでも独特な位置にあると考えられる。

**生存に対する脅威** : 仲ノ神島では天然記念物に指定され、立ち入りが規制されており、人為的な減少要因はない。それ以外の繁殖地では、釣り、マリンレジャー、バードウォッチング、写真撮影等による立ち入りが予想される。岩陰や隙間に営巣するため、卵や雛は見つけ難いが、その頻度増加による営巣中止あるいは営巣地放棄が懸念される。

**特記事項** : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

**原記載** : Scopoli, 1786. Del. Flor. Faun. Insubr., 2 : 92 (Panay I., Philippines)。

**参考文献** : 安部直哉・真野 徹, 1980. 日本におけるマミジロアジサシの繁殖. 山階鳥類研究所研究報告, 12 (3) : 45-53.

安部直哉・真野 徹・久貝勝盛・山本 晃, 1982. マミジロアジサシの新繁殖地と体の計測値. 山階鳥類研究所研究報告, 14 (1) : 72-76.

環境省自然環境局生物多様性センター, 2010. 平成 21 年度 モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書.

環境省自然環境局生物多様性センター, 2013. 平成 24 年度 モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書.

環境省自然環境局生物多様性センター, 2016. 平成 27 年度 モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書.

岸本浩和・河野裕美, 1989. 仲ノ神島 (琉球列島) で繁殖中の海鳥類の食餌動物. 東海大学海洋研究所研究報告, (10) : 43-64.

河野裕美, 1997. 6. マミジロアジサシ. “日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料”, (社) 日本水産資源保護協会, 東京, 579-583, 589-590.

河野裕美, 1998. 13. マミジロアジサシ. “日本の希少な野生水生生物に関するデータブック (水産庁編)”, (社) 日本水産資源保護協会, 東京, 414-415.

河野裕美・安部直哉・真野 徹, 1986. 仲ノ神島の海鳥類. 山階鳥類研究所研究報告, 18 (1) : 1-27.

Kohno, H. & Kishimoto, H., 1991. Prey of the Bridled Tern *Sterna anaethetus* on Nakanokamishima Island, South Ryukyu, Japan. *Jpn J. Ornithol.* 40(1) : 15-25.

久貝勝盛・山本 晃, 1981. 宮古群島の鳥類目録. 沖生教研会誌, 沖縄生物教育研究会, 那覇, 14 : 15-29.

日本鳥類目録編集委員会 (編), 2000. 日本鳥類目録 (改訂第 6 版). 日本鳥学会, 北海道, 345pp.

沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. マミジロアジサシ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 309-310.

Simpson, D. M., 1973. Seabird colonies on the rocky islands of Sento Shoto, 28°48'N, 123°36'E, and Sekibo Sho Islet, 25°55'N, 124°34'E (marked sometimes as Raleigh Rock on British Admiralty Charts. *Sea Swallow*, 22 : 29.

**執筆者名** : 河野裕美・水谷 晃

**和名** : セグロアジサシ

**分類** : チドリ目 カモメ科

**学名** : *Sterna fuscata nubilosa* Sparman, 1788

**英名** : Sooty Tern

**カテゴリー** : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

**形態** : 額から眼の上までは白色。過眼線と頭頂から背、翼上面にかけて黒色。腰と尾は褐色味のある黒色で最外尾羽の外弁は白い。喉と頬以下の下面は白色。尾は深い燕尾。嘴と脚は黒色。幼鳥から若鳥は下腹から下尾筒は白く、そのほかは全身黒褐色。背、雨覆の羽縁は灰白色。

**分布の概要** : 沖縄県では、八重山諸島仲ノ神島と尖閣諸島北小島・南小島で繁殖している。これらの繁殖地では 1880 年代から 1900 年代ははじめにかけて断続的に大規模な羽毛等の採取が行われ、その後も 1970 年代末まで卵採取が行われた。仲ノ神島では、1970 年代まで本種の営巣地として最適な上部中央平坦地に主コロニーが形成されない繁殖年があり、稜線や海岸の狭い草地に小さな副コロニーが分かれ

て形成された。卵採取が行われなくなった1980年以降には、主コロニーに加えて、最多15ヶ所の副コロニーが形成された。2003年繁殖期にはじめて副コロニーがなくなり、上部中央平坦地の主コロニーだけになり、さらに2004年には主コロニーがさらに中央平坦地に続く緩やかな斜面に向かって拡大するようになった。

**生態的特徴** : 仲ノ神島における本種の繁殖生態の概要は次の通り。2月末から3月頃、近海に渡来。4月下旬に営巣地に降り、5月上旬までに1卵を産む。産卵の同調性は高い。同島での正確な抱卵日数は明らかでないが約30日前後。孵化してから平均64日で巣立ち、8月末に成鳥と幼鳥のほとんどが渡去する。9月上旬まで少数が残ることもあるが15日を越えない。仲ノ神島のセグロアジサシは主に魚類（個体数比58%、重量比28%）とイカ類（42%、72%）を採食し、アカイカ科、トビウオ科、サバ科、カタクチイワシ科、アジ科、サヨリ科、イトウダイ科、ヒメジ科などが重要な食餌生物である。

**生息地の条件** : 外洋性島嶼で繁殖し、草丈の低い海浜草本の生えた広く平らな場所に高密度で営巣する。

**個体数の動向** : 1980年まで、仲ノ神島では人為攪乱の影響により、雛生産には大きな年差があった。幼鳥数は1975年には100羽以下、1977年約2,000羽、1978年499羽、1979年281羽、1982年1,796羽、1983年2,525羽であり、以降、毎年1,500~2,500羽の幼鳥が巣立った。サブコロニーが形成されなくなり、メインコロニーだけが形成されるようになる2000年代以降には、2003年の4,945羽を最大として、年差はあるものの3,000から4,000羽以上の幼鳥が巣立つようになった。

メインコロニーで計数される成鳥についても、サブコロニーが多く形成された1990年代後半までは年差が大きく、782~5,978羽であったが、メインコロニーに集中するようになった2000年代以降には5,000羽以上が計数されるようになり、2009年に最大1,041羽が記録された。

**現在の生息状況** : 仲ノ神島では1980年まで、主に外国漁船によるセグロアジサシの卵採取が頻繁に行われ、メインコロニーの形成される場所も一定せず、海岸潮干帯上部の草地、稜線や鞍部等、10ヶ所以上の小さなサブコロニーが形成されていた。2003年に初めて全てのサブコロニーが消失し、島の中央上部の平坦地にメインコロニーだけが形成された。2004年には、さらにメインコロニーが拡大する傾向が観られた。

**生存に対する脅威** : 仲ノ神島は、1972年、国の天然記念物に指定され上陸が規制されている。同島には海鳥の卵や雛を捕食する可能性のあるサキシママダラとクマネズミが生息している。これまで顕著な影響は認められていないが、クマネズミの生息数の把握は困難だが、未ふ化卵や営巣放棄等の継続的な観察が必要と思われる。

**特記事項** : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種セグロアジサシを選定している。

**原記載** : Sparrman, 1788. Mus. Carlsnianum, fasc. 3, No. 63 ("Finlandia" error for India).

**参考文献** : 安部直哉・河野裕美・真野 徹, 1986. 仲ノ神島で繁殖するセグロアジサシの個体数と雛（幼鳥）数の推定. 山階鳥類研究所研究報告, 18 (1) : 24-40.

岸本浩和・河野裕美, 1989. 仲ノ神島（琉球列島）で繁殖中の海鳥類の食餌動物. 東海大学海洋研究所研究報告, (10) : 43-64.

河野裕美, 1992. 仲ノ神島で繁殖する海鳥類の重要な食餌動物として出現するトビイカ幼若固体の分布様式について. 日本鳥学会 1992年度大会講演要旨集, 71.

Kohno, H., 1998. Occurrence of the schizochroismic Sooty Tern juveniles on Nakanokamishima, South Ryukyus, Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol., 30 : 47-49.

河野裕美・安部直哉・真野 徹, 1986. 仲ノ神島の海鳥類. 山階鳥類研究所研究報告, 18 (1) : 1-27.

河野裕美・安部直哉・真野 徹, 1986. 台風8211号による仲ノ神島のセグロアジサシの斃死について. 山階鳥類研究所研究報告, 18 (1) : 41-50.

河野裕美・長谷川英男・子安和弘, 1995. 仲ノ神島海鳥繁殖地に棲息する野生ネズミの消化管内容物と寄生ぜん虫. 沖縄島嶼研究, (13) : 29-39.

Kohno, H. & Kishimoto, H., 1991. Prey of the Bridled Tern *Sterna anaethetus* on Nakanokamishima Island, South Ryukyu, Japan. Jpn J. Ornithol, 40(1) : 15-25.

Kohno, M. & Mizutani, A., 2014. The 30-years seabird population trend on Nakanokamishima, in the south Ryukyus, Japan. Ornithological Science, 13 (Supplement): 213 (P04-083).

Kohno, H. and Ota, H., 1991. Reptiles in a seabird colony : herpetofauna of Nakanokamishima Island of the Yaeyama Group, Ryukyu Archipelago. Island Studies in Okinawa, (9) : 73-89.

水谷 晃・河野裕美, 2011. 八重山諸島における海鳥研究の現状. 海洋と生物 194, 33(3) : 225-232.

日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

**執筆者名** : 河野裕美・水谷 晃

**和名** : ミサゴ

**分類** : タカ目 ミサゴ科

**学名** : *Pandion haliaetus haliaetus* (Linnaeus, 1758)

**英名** : Osprey

**カテゴリー** : 準絶滅危惧 (NT)

**環境省カテゴリー** : 準絶滅危惧 (NT)

**形態** : 背、翼の上面は黒褐色で下面は白色である。頭に短い冠羽を持ち、胸に黒褐色の帯がある。嘴と脚は灰黒色である。

**近似種との区別** : カンムリワシの若鳥はミサゴに比べて背面がかなり白っぽい。

**分布の概要** : 日本では沖縄を除いてほぼ全国的に繁殖している。県内では越夏個体もしばしば見られるが、営巣

〈鳥類〉

- 確認がされておらず、主として冬鳥であると考えられる。
- 生態的特徴： 巣は樹上や岩や崖の上に向け1腹卵数は1~4個。抱卵日数は37日前後で育雛期間は約53日である。餌は主に魚類。
- 生息地の条件： 営巣地とその周辺に餌を採ることのできる海岸や湖沼等が必要である。
- 現在の生息状況： 少数が県内各地の海岸で越冬する。海岸や大きな河川、ダム湖などで採食するため行動圏は広い。
- 学術的意義・評価： 一属一種である。海洋汚染や開発等によって個体数が減少している。
- 生存に対する脅威： 主たる生息地である海岸の他、河口部や湖沼等が人間活動の拡大によって埋め立て等が進行している。また、農薬の使用による魚類の汚染と二次的な汚染が懸念される。
- 特記事項： 宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。  
IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は基亜種ミサゴを選定している。
- 原記載： Linnaeus, 1758. Syst. Nat., ed. 10, 1: 91. (Sweden).
- 参考文献： 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.  
環境省編, 2002. ミサゴ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック- 2 鳥類”, 自然環境研究センター, 東京, 230.  
穴田 哲, 2014. ミサゴ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 225.  
小林桂助, 1983. 原色日本鳥類図鑑. 保育社, 大阪, 73.  
中村登流・中村雅彦, 1995. 原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編), 保育社, 大阪, 265pp.  
日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録 改訂第5版. 学習研究社, 東京, 22.  
日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. ミサゴ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 305-306.  
高野伸二, 1982. 日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京, 234.
- 執筆者名： 岡 徹\*・嵩原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における岡による記載内容を一部見直した。

- 和名： リュウキュウコノハズク
- 分類： フクロウ目 フクロウ科
- 学名： *Otus elegans elegans* (Cassin, 1852)
- 英名： Elegant Scops Owl
- 方言名： チコホー
- カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 該当なし

全長 22 cm、福岡県宗方郡沖ノ島に以南の南西諸島の常緑広葉樹林に留鳥として生息している。同所的に生息するオオコノハズクに比較すると森林性が強い。沖縄島では主に北部の山林に生息し、南部ではほとんど繁殖が確認されていない。伊是名島には多く生息するが、伊平屋島には少ない。座間味島、阿嘉島、慶留間島、久米島にも生息する。先島諸島では開けた林にも生息している。沖縄島北部ではノグチゲラ *Sapheopipo noguchii* の古巣を営巣場所とする。広葉樹の樹洞の利用頻度が高い。昆虫を主に捕食する。沖縄島以北と宮古島以西、すなわち慶良間海峡を挟んだ地域間では鳴き声の特徴が明確に異なる。例外的に伊是名島、伊平屋島、座間味島、阿嘉島、慶留間島、久米島には、宮古島以西の鳴き声の特徴を持つものが多い。類似種との識別として、コノハズクはリュウキュウコノハズクより小型である。コノハズクの鳴き声は「ブッ・キョッ・キョー」と聞こえるのに対し、リュウキュウコノハズクは「コホ」、または「コッ・コホ」と聞こえる。鳴き声が明瞭に異なることから、雄の識別は鳴いている場合は容易である。羽色に基づいた識別は難しいが、リュウキュウコノハズクの羽衣の模様はコノハズクに比して大きく粗く見える。オオコノハズクは大きく虹彩の色がオレンジ色で、黄色のリュウキュウコノハズクとは明らかに異なる。県内では冬季にコノハズクの渡来が確認されているが、野外観察で本種との外部形態による識別は困難である。産卵開始時期は概ね5月である。

- 特記事項： IUCN カテゴリー：Near Threatened (NT)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は種リュウキュウコノハズクの基亜種リュウキュウコノハズクを選定している。
- 原記載： Cassin, 1852. Proc. Acad. Nat. sci., Philad., 6: 185 (At sea near Japan, 29°47'N., 126°13' 30"E.: Ryukyus).
- 参考文献： 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. リュウキュウコノハズク. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 322-323.  
沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄島の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇.  
高木昌興, 2007. 島々に生きるリュウキュウコノハズク. フクロウ -その生態と行動の神秘を解き明かす-, 文一総合出版, 東京.  
Takagi M, 2011. Vicariance and dispersal influenced the differentiation of vocalization in the Ryukyu Scops Owl. *Ibis* 153: 779-788.  
Takagi M, 2013. A typological analysis of hoots of the Ryukyu Scops Owl *Otus elegans* across island populations in the Ryukyu Archipelago and the two oceanic islands. *Wilson Journal of Ornithology* 125: 358-369.  
Takagi M, Saitoh T, Yamaguchi N, Okabe H, Nishiumi I, Takeishi M., 2015. A breeding record of the Ryukyu Scops Owl on Okinoshima, in northernmost Fukuoka, Japan. *Ornithological Science* 14: 53-59.

Toyama M & Saitoh T, 2011. Food-niche Differences Between Two Syntopic Scops-Owls on Okinawa Island, Japan Journal of Raptor Research, 45(1): 79-87. 2011  
 Toyama M, Kotaka N, Koizumia I, 2015. Breeding timing and nest predation rate of sympatric scops owls with different dietary niche breadth. Canadian Journal of Zoology, 93: 841-847.  
 山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名 : 高木昌興

和名 : リュウキュウアオバズク  
 分類 : フクロウ目 フクロウ科  
 学名 : *Ninox scutulata totogo* Momiyama, 1931  
 英名 : Ryukyu Hawk Owl  
 方言名 : マヤージクク  
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 該当なし

全長 29 cm。県内ではほぼ全域に留鳥として一年中生息する。琉球列島に固有の亜種である。森林棲ではあるが、畑地や公園などの開けた環境にある狭小な樹林を中心に行動する個体が多く、選好する環境の幅は広い。主に大径木の樹洞に営巣するため、大径木が残されている神社や御嶽に生息していることが多い。地上営巣や建物への営巣も確認されている。卵は白い球形で一腹卵数は2~4卵である。昆虫類を飛翔しながら捕食する。夜間、街灯の周囲に集まる昆虫を飛びながら捕獲するところを観察されることが多い。

特記事項 : IUCN カテゴリ : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種リュウキュウアオバズクを選定している。  
 原記載 : Momiyama, T. 1931. Amoeba, 3, nos. 1-2, p. 68.  
 参考文献 : 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. リュウキュウアオバズク. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 326.

執筆者名 : 高木昌興

和名 : カワセミ  
 分類 : ブッポウソウ目 カワセミ科  
 学名 : *Alcedo atthis bengalensis* Gmelin, 1788  
 英名 : Common Kingfisher  
 方言名 : カーラカンジュー  
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 該当なし

形態 : 全長 17 cm。雌雄ほぼ同色で、頭部は青緑色で、耳羽は橙色。喉と前頸、耳羽の後方は白色。嘴は黒いが、雌は下嘴が赤味を帯びる。肩羽や翼上面は青緑色で、上背から上尾筒にかけて光沢のある青色を呈する。尾も青色。下面は橙色で、足は鮮やかな赤色。幼鳥は全体にくすんだ羽色で、足は黒色味がある。

近似種との区別 : 近似種なし。  
 分布の概要 : 全国的に留鳥として生息し、県内でも各地の河川や池沼、ダム湖などに留鳥として生息し繁殖するが、数は少ない。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : アカショウビンは夏鳥として東南アジアから渡来する。  
 生態的特徴 : 川べりの木の枝にとまって魚をねらい、ダイビングして捕らえる。縄張り性をもち、水辺の土手に0.5~1 mの横穴を嘴で掘り営巣する。卵数は4~7個。雌雄交代で抱卵し、19~20日が抱卵期間。年2回繁殖することもある(高原ら, 2016)。

生息地の条件 : 水のきれいな河川、池沼、ダム湖など。  
 現在の生息状況 : 県内各地の河川や池沼、ダム湖等で生息している。最近、川の汚れにも強い外来種のテラピア等が市街地の河川でも生息し、こうした餌資源が得られるため都市河川でも見られることがある。また、河川改修等で巣づくりを行う河岸の土壁が無くなり、河川から遠く離れた森林地域の林道法面等で巣穴を掘ることがしばしば見られる。

学術的意義・評価 : 河川域の生態系上位種として重要である。  
 生存に対する脅威 : 河川が汚染を受け、餌となる魚類の生息が減少したり、営巣場所となる河岸の土壁が河川改修などにより減少していることで、個体数は減少しているものと考えられている。

特記事項 : IUCN カテゴリ : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種カワセミを選定している。

原記載 : Gmelin, 1788. Syst. Nat., 1(1): 450 (Bengal).  
 参考文献 : 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
 日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. カワセミ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 323.



沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版, 647pp.  
嵩原建二・比嘉邦昭・渡邊康志, 2016. 恩納村における鳥類の記録とその生息状況について. 恩納村博物館紀要, 第9号: 1-28.  
山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名: 小高信彦\*・嵩原建二(追補) \*前回改訂版(2005)における小高による記載内容を一部見直した。

和名: リュウキュウコゲラ  
分類: キツツキ目 キツツキ科  
学名: *Dendrocopos kizuki nigrescens* (Seebohm, 1887)  
英名: Japanese Pygmy Woodpecker  
カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

全長約 15 cm、沖縄島と屋我地島に留鳥として生息する沖縄固有亜種であるが、沖縄島周辺の古宇利島や浜比嘉島など沖縄島周辺の島にも生息している。基亜種コゲラよりも小さく、色もより黒みを帯びる。種小名の *nigrescens* は「黒っぽい」の意。第二次世界大戦以後は山林の焼失や都市化などの開発で特に沖縄島の南部や屋我地島で生息面積が減少したとされる。近年は、沖縄島中部から北部の常緑広葉樹林を中心に生息するが、最近では沖縄島南部の市街地近くにある緑地公園で繁殖が確認されたり、住宅地近くでも観察されるようになった。

特記事項: IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)\* \*IUCNは種 *Picoides kizuki* として評価。本県改訂は種コゲラの亜種リュウキュウコゲラを選定している。  
原記載: Seebohm, H. 1887. *Yungipicus kizuki nigrescens*, subsp. n., Ibis 177 (Yagaji Is.)  
参考文献: 青柳 克, 2016. 沖縄南部地域におけるリュウキュウコゲラの繁殖記録. 沖縄生物学会誌, (53): 85-87.  
石田 健, 1993. 日本全国のコゲラを比べる. BIRDER, 7巻第4号, 文一総合出版, 東京.  
日本野鳥の会, 2004. 生物多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 山梨.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課(編), 2005. リュウキュウコゲラ. “改訂沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 91.  
沖縄野鳥研究会, 2010. 改訂版 沖縄の野鳥. 新星出版, 沖縄.

執筆者名: 小高信彦

和名: アマミヤマガラ  
分類: スズメ目 シジュウカラ科  
学名: *Poecile varius amamii* (Kuroda, 1922)  
英名: Varied Tit  
カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

全長約 14 cm、トカラ列島から奄美群島、沖縄島にかけて留鳥として生息する日本固有亜種である。第二次世界大戦による山林の焼失や戦後の都市化等の開発で沖縄島中南部の生息面積が減少したとされる。沖縄島北部の常緑広葉樹林では普通に見られる。日本国内に分布するヤマガラは、現在8亜種に分類されているが、最近の分子系統学的研究では、沖縄島以北に生息する7つの亜種は遺伝的に近いグループであることが示されている。八重山諸島に生息するオリイヤマガラ *P. v. olivaceus* は、他の地域のどのヤマガラとも大きく遺伝配列が異なり、色も独特であることが指摘されている。今後、亜種区分等分類の見直しが行われる可能性がある。

特記事項: IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)\* \*IUCNは *Sittiparus varius* Temminck & Schlegel, 1848 として掲載し、種として評価。本県改訂は種ヤマガラの亜種アマミヤマガラを選定している。  
原記載: Kuroda, 1922. *Annot. Zool. Japon.*, 10: 117. (Amami-Oshima, North Ryukyus).  
参考文献: 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.  
日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
日本野鳥の会, 2004. 生物多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 山梨.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課(編), 1996. アマミヤマガラ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 325.  
沖縄県環境保健部自然保護課(編), 2005. アマミヤマガラ. “改訂沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 93.  
沖縄野鳥研究会, 2010. 改訂版 沖縄の野鳥. 新星出版, 沖縄.  
Saitoh T, Sugita N, Someya S, Iwami Y, Kobayashi S, Kamigaichi H, Higuchi A, Asai S, Yamamoto Y & Nishiumi I, 2015. DNA barcoding reveals 24 distinct lineages as cryptic bird species candidates in and

around the Japanese Archipelago. *Molecular Ecology Resources*, 15(1): 177-186.  
山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名 : 小高信彦

和名 : **イシガキシジュウカラ**  
分類 : スズメ目 シジュウカラ科  
学名 : *Parus minor nigriloris* Hellmayr, 1900  
方言名 : ミイフクトンナー・エーンマクラー (石垣島)、イツクラマ (西表島)  
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 全長約 14 cm。頭と喉が黒く、頬の白が目立つ。背は暗青灰色、下面は灰色。  
近似種との区別 : オリヤマガラと比較すると、本種は赤色味がないことで区別できる。  
分布の概要 : 八重山諸島 (西表島、石垣島)。  
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島にオキナワシジュウカラ *P.m.okinawae* が分布している。  
現在の生息状況 : 常緑広葉樹、海岸林、集落周辺でも繁殖する。  
学術的意義・評価 : 固有亜種。  
生存に対する脅威 : 森林伐採など環境の変化。  
特記事項 : IUCN カテゴリー : **Least Concern (LC)** \* \*IUCNは *Parus minor* を *Parus major* Linnaeus, 1758 に包含して種として評価。本県改訂は種シジュウカラの亜種イシガキシジュウカラを選定している。  
原記載 : Hellmayr, 1900. *Orn. Monatsbr.*, 8: 139. (Isigakijima, South Ryukyus.)  
参考文献 : 五百沢日丸他, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版.  
真木広造・大西敏一, 2000. 日本の鳥 590. 平凡社.  
日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. イシガキシジュウカラ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータおきなわ -”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 325.  
日本鳥学会編, 2000. 日本鳥類目録 (改訂第 6 版). 土倉事務所, 京都, 345pp.  
沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.

執筆者名 : 庄山 守\*・嵩原建二(追補) \*前回改訂版 (2005) における庄山による記載内容を一部見直した。

和名 : **シロガシラ**  
分類 : スズメ目 ヒヨドリ科  
学名 : *Pycnonotus sinensis sinensis* (Gmelin, 1789)  
英名 : Lesser Chinese Bulbul  
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 全長 18.5 cm。雌雄同色。頭部は黒褐色で、後頭部に大きめの白斑と耳羽に薄い白斑が出るが、個体により後頭部の白斑が狭く、黒褐色部分が大きい個体 (黒頭タイプ) もいる。背から尾にかけては灰褐色で、翼上面および尾羽の外弁は黄褐色。腹から下尾筒にかけては縦に黄色の線が明瞭にでる。喉は白く、胸は薄い灰褐色で、下面から下尾筒は汚白色。  
近似種との区別 : 国内では本種のみが生息し、他種との区別は容易。沖縄島産シロガシラは腹の黄色線が明瞭ではない。  
分布の概要 : 国外では中国南部、台湾、ベトナム北部などに留鳥として生息する。国内では八重山諸島にのみ留鳥として生息する。  
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁種のヒヨドリは、県内各地に留鳥として生息する。  
生態的特徴 : 平地の森林や農耕地、集落近くに生息し、昆虫や果実類などを餌にしている。縄張り性があり、繁殖期は 4~7 月で、低い枝に枯れ葉やススキの枯れた穂などを使って皿状の巣を造る。卵は淡い紅色または淡紫色の地に斑点があり、卵の数は 3~4 個である。非繁殖期には小群をつくり行動する。  
生息地の条件 : 平地の森林や林縁、農耕地、市街地など。  
現在の生息状況 : 八重山諸島の石垣島、西表島、小浜島、与那国島、波照間島などに留鳥として生息しているが、数はそう多くはない。  
学術的意義・評価 : 中国南部や台湾、ベトナムなどに起源をもつ東洋区系の種であり、国内で留鳥として北限的に生息し、本種の分布拡大や島嶼への適応様式を知る上で貴重である。  
生存に対する脅威 : 森林環境の改変等。  
特記事項 : 本亜種は以前、亜種ヤエヤマシロガシラ *P.s.orii* とされていた。最近の研究によると、本亜種と中国大陸の福建省以北に生息する基亜種との分類学的な比較では、同基亜種の南部地域に生息する集団との形質的な形質に分化が見られず、ヤエヤマシロガシラは基亜種のシノニムである可能性を指摘する見解も見られる (Yamazaki, 2008)。このことから日本鳥学会編 (2012) では、シロガシラ *P.s.-inensis* に変更されている。今回の改訂ではこれに準拠した。なお、沖縄島南部及び周辺離島で生息するシロガシラの個体群は、1970年代に人為的な持ち込み個体が元になったものと考えられ、日本鳥学会編 (2012) では「亜種不明」としている。IUCN カテゴリー : **Least Concern (LC)** \* \*IUCN は種として評価。本県改訂は基亜種シロガシラを選定している。  
参考文献 : 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 脊椎動物編. 日本

野生生物研究センター, 東京.  
 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
 日本鳥類保護連盟編, 1988. 鳥 630 図鑑. 日本鳥類保護連盟.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ヤエヤマシログシラ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 324.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.  
 Yamasaki T., 2008. Taxonomic status of populations of the Light-vented bulbul *Pycnonotus sinensis* (Gmelin, 1789) (Passeriformes: Pycnonotidae) in Taiwan and the Southern Ryukyus. Zoological Studies, 45:168-179.  
 山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名 : 高原建二

和名 : **ダイトウヒヨドリ**  
 分類 : スズメ目 ヒヨドリ科  
 学名 : *Hypsipetes amaurotis borodinonis* (Kuroda, 1923)  
 英名 : Borodino Islands Bulbul  
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 全長 28cm、亜種リュウキュウヒヨドリより体のサイズが少し大きい。胸の部分の色彩が亜種ヒヨドリよりもレンガ色に近いが、亜種リュウキュウヒヨドリほどには赤色味は強くない。  
 分布の概要 : 大東諸島に生息する固有亜種である。樹林地に数多く生息する。繁殖生態に関する情報は得られていない。  
 生存に対する脅威 : 移入されたネコとイタチによる巣内雛の捕食による繁殖失敗が懸念される。  
 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC) \* \*IUCN は種として評価。本県改訂は亜種ダイトウヒヨドリを選定している。  
 原記載 : Kuroda, 1923. Bull. Brit. orn. club, 43: 120. (Minami-daitojima, Daito Is.).  
 参考文献 : 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇, 335pp.  
 山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名 : 高原建二\*・高木昌興(追補) \*前回改訂版(2005)における高原による記載内容を一部見直した。

和名 : **ダイトウメジロ**  
 分類 : スズメ目 メジロ科  
 学名 : *Zosterops japonicus daitoensis* Kuroda, 1923  
 英名 : Borodino Islands White-eye  
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

全長 12cm、大東諸島に生息する固有亜種である。亜種リュウキュウメジロに似るが、喉の黄色が眼の下に達し、眼先の上の黄色の斑が大きく鮮やかで顕著である。外部形態各部位が全体に大きい。生息数は多い。低木から高木、庭木まで様々な樹木に営巣する。営巣樹の周辺 5~10m 四方が防衛範囲となり、採餌はその範囲外でも行う。南北大東島は、島自体の面積が限定されており、樹林地の減少はそのまま個体数の減少を招くと考えられる。そのため、大規模な樹林地の伐採などには注意を要する。また人家付近に営巣することも多く、人為的に移入されたネコやイタチによる巣内雛の捕食、ネズミによる卵の捕食が個体群にダメージを与える可能性がある。地上性の捕食者が生息しない大東諸島で進化した亜種ではあるが、地上からの捕食を免れる適応行動を発達させている。繁殖経験を積んだ成鳥は捕食者のタイプを認識し営巣場所変化させたり、巣への出入り行動を変化させたりすることが出来る。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC) \* \*IUCN は種として評価。本県改訂は亜種ダイトウメジロを選定している。  
 原記載 : Kuroda, 1923. Bull. Brit. orn. club, 43: 120. (Minami-daitojima, Daito Is.).  
 参考文献 : 堀江明香・松井晋・高木昌興 2005. 南大東島における亜種ダイトウメジロの 11 月の育雛. 日本鳥学会誌 54: 58-59.  
 Horie S & Takagi M 2012. Nest positioning by male Daito White-eyes *Zosterops japonicus daitoensis* improves with age to reduce nest predation risk. Ibis 154: 285-295.  
 黒田長禮, 1980. 新版鳥類原色大図説. 講談社, 東京.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. ダイトウメジロ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 325-326.  
 沖縄野鳥研究会編, 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版, 浦添.  
 沖縄野鳥研究会編, 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇.  
 茂田良光・高田蘭草. 2016. 世界のメジロ図譜 増補改訂版. 全国野鳥密猟対策連絡会, 不破.

山階芳麿, 1980. 日本の鳥類とその生態. 梓書房, 東京.

執筆者名: 高木昌興

## 6) 情報不足 (DD)

和名: リュウキュウガモ  
 分類: カモ目 カモ科  
 学名: *Dendrocygna javanica* (Horsfield, 1821)  
 カテゴリ: 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ: 該当なし

形態: 全長約 41 cm。小型のカモで足が長く飛翔時に足が尾を越える。額から後頸は褐色、背は灰黒色で赤褐色の羽縁がある。

近似種との区別: 日本産のカモで飛翔時に足が尾を越えるのは本種だけである。

分布の概要: インドからミャンマー、マレー半島、インシシナ半島、中国南部、台湾、スマトラ、ジャワ、ボルネオの各島に留鳥として生息する。国内では留鳥として琉球諸島（沖縄島、石垣島、黒島、西表島）に生息するとされている。

生態的特徴: 森林やマングローブ林の沼地、河岸などに生息し、雨期の繁殖期には分散して営巣する。非繁殖期には群で生活する。地上だけでなく、樹上でも営巣し、サギなどの古巣を利用することもある。1腹の卵数は6~10個で抱卵日数は約28日間。主に植物食で穀類、特に米を好む。また、淡水性の貝類も食する。泳ぐだけでなく潜水もする。

生息地の条件: 森林、湿地、水田、マングローブ林、河川。

現在の生息状況: 日本鳥学会編 (2012) では、50年以上確実な記録はないとしている。

学術的意義・評価: 東洋区系のカモ類で国内における目撃記録は極めて少ない。

生存に対する脅威: 森林伐採、湖沼の埋め立てなど環境の変化。

特記事項: 日本鳥類学会編 (2012) では、付録「最近50年以上国内で記録のない種・亜種」に、絶滅種とされるリュウキュウカラスバト等と同様に掲載されている。IUCN カテゴリ: Least Concern (LC)。

原記載: Horsfield, 1821. Trans. Linn. Soc. London, 13, p. 200.

参考文献: 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
 真木広造・大西敏一, 2000. 日本の鳥 590. 平凡社.  
 日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
 日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. リュウキュウガモ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 326.  
 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 2005. リュウキュウガモ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 95-96.

執筆者名: 庄山 守\*・嵩原建二(追補) \*前回改訂版 (2005) における庄山による記載内容を一部見直した。

和名: ヘラサギ  
 分類: ペリカン目 トキ科  
 学名: *Platalea leucorodia leucorodia* Linnaeus, 1758  
 英名: Spoonbill  
 カテゴリ: 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ: 情報不足 (DD)

形態: 雌雄同色。大型で全身が白色の水鳥。嘴は黒色で長く、先端はヘラ状である。嘴の先端は黄色。眼先は青白色の皮膚が細く裸出し、喉は黄色の皮膚が露出する。足は黒く長い。繁殖期には後頭部に房状の黄色の冠羽があり、胸も黄色になる。幼鳥の嘴はピンク色味があり、風切の羽縁は黒色。

近似種との区別: クロツラヘラサギはやや小さく、眼先と嘴基部の皮膚が裸出し、嘴から眼まで一様に黒く見える。

分布の概要: ヨーロッパから中国北東部、ウスリーまでユーラシア大陸の中緯度地域で広く繁殖し、3亜種に分けられている。冬季には熱帯アフリカや南アジア、中国東南部で越冬する。国内では稀な冬鳥として九州地方に渡来する。県内でも稀な冬鳥もしくは迷鳥として渡来し、ごく少数が越冬する。しばしばクロツラヘラサギとの混群を形成することがある。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 近縁種のクロツラヘラサギは、朝鮮半島黄海側の群島と中国の一部で繁殖し、冬季には主に中国南東部や台湾で越冬する。

生態的特徴: 干潟や水田、湿地で小型の魚類、甲殻類、水性昆虫類を餌にする。嘴を左右に振り、浅い水中の餌を探す動作は特徴的である。

生息地の条件: 越冬期の生息地となる干潟や水田、湿地。

現在の生息状況: 県内ではほぼ毎年のように数少ない冬鳥もしくは迷鳥として1~2羽が渡来する。近縁種のクロツラヘラサギより越冬個体はかなり少ない。

学術的意義・評価: 県内への渡来数は少ないが、本種の渡りを考える上で重要である。

生存に対する脅威: 干潟の埋め立てや水田の畑地化などの減少傾向は越冬期の生息地の減少につながる。

<鳥類>

特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種ヘラサギを選定している。

参考文献 : 黒田長久編, 1984. 決定版生物大図鑑 鳥類. 世界文化社, 東京.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄野鳥研究会編, 2010. 沖縄の野鳥. 新星出版, 那覇, 335pp.  
榛葉忠雄, 2016. 日本と北東アジアの野鳥. 生態科学出版. 647pp.  
高野茂樹, 2014. ヘラサギ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 233.

執筆者名 : 高原建二

和名 : ツミ  
分類 : タカ目 タカ科  
学名 : *Accipiter gularis gularis* (Temminck & Schlegel, 1844)  
英名 : Japanese Sparrow Hawk  
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態的には亜種リュウキュウツミ *A. g. iwasakii* とほとんど変わらないが、虹彩の色彩は、雄が暗赤色、雌が黄色で、雌雄とも目の周りが黄色である。本亜種は沖縄県内では、沖縄島に留鳥として生息し、渡りは行わないものと思われる。県外では北海道から奄美諸島にかけて広く生息しているが、春秋期の渡り期には本土産と考えられる亜種ツミが渡ってくる。したがって、八重山諸島でも冬季にこうした飛来個体が見られる (鳥学会編, 2012)。これは沖縄諸島や宮古諸島でも同様である。

平地から山地の森林に生息し、3~6月前後にリュウキュウマツやモクマオウなど高い木立で営巣繁殖する。主に小鳥類を捕食するが、昆虫や小型ほ乳類なども食べる。リュウキュウマツが植栽された公園でも繁殖が見られるが、周辺にまとまった広葉樹林が不可欠。近年、沖縄島南部の市街地での繁殖例が増えている。農耕地造成やリゾート開発等による森林伐採は生息地を減少させる要因になる可能性がある。

特記事項 : 本書では日本鳥学会編 (2012) に準拠して、八重山諸島に留鳥として生息する個体群を除き亜種ツミ *A. g. gularis* として評価掲載した。本亜種は、県内では一部秋期に渡り個体も見られることから、留鳥として生息する個体群については、今後分類学的な検討やさらなる生息調査等が望まれる。

IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)\* \*IUCNは種として評価。本県改訂は亜種ツミを選定している。宮古島市自然環境保全条例では亜種リュウキュウツミを保全種 (2005) としているが、宮古諸島で秋期や冬季にみられる個体は亜種ツミの飛来個体が該当するものと考えられる。

原記載 : Mishima, 1962. *Tori*, 17(79/80): 219-221. (Ishigaki I., S. Ryukyus.).

参考文献 : 宮古野鳥の会編, 2014. 宮古野鳥の会 40 周年記念誌. 106pp.  
森岡照明・叶内拓哉・川田 隆・山形則男, 1998. 図鑑日本のワシタカ類第2版. 文一総合出版, 東京.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄野鳥研究会編, 2010. 改訂版 沖縄の野鳥. 新星図書出版, 那覇市, 367pp.  
砂川栄喜, 2001. 宮古諸島の野鳥. ニライ社, 那覇市. 111pp.  
高原建二・久貝勝盛・瀬名波任, 1995. 久米島の鳥類について. 久米島総合調査報告書, 沖縄県立博物館, 65-95.  
高原建二, 2001. 沖縄島中南部の市街地で繁殖したツミとリュウキュウサンショウクイについて. 沖縄県立博物館紀要, 27: 45-50.  
高原建二・細川太郎・村田尚史・具志堅ひな子・山本英康, 2014. 沖縄本島北部 (名護市) におけるサンバ *Butasatur indicus* を含むワシタカ類の飛来状況について. やんばる学研究会会誌, (3) : 80-87.

執筆者名 : 高原建二

和名 : コトラツグミ  
分類 : スズメ目 ヒタキ科  
学名 : *Zoothera dauma iriomotensis* Nishiumi & Morioka, 2009  
方言名 : アヤブリ (トラツグミ)  
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

形態 : 全長約 29 cm. 頭部から上面は黄褐色で黒い鱗状斑がある。下面は白く黄褐色と黒い鱗状斑がある。

近似種との区別 : 別亜種トラツグミは外側尾羽先端に白斑があるが、本亜種は白斑がない。

分布の概要 : 八重山諸島 (西表島)。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : オオトラツグミ *Z. d. major* が奄美大島に留鳥として生息。トラツグミ *Z. d. aurea* は県内には冬鳥として少数が渡来する。

生息地の条件 : 鬱蒼と茂った森林。

現在の生息状況 : 西表島にまれな留鳥として生息するとされているが、近年の目撃情報はない。比較的新しい情報としては、1984年1月14日に西表島祖納で得られた個体がある (我孫子市鳥の博物館蔵)。1984年以降、確実な観察例はないが、最近、西表島におけるイリオモテヤマネコ生態調査用の自動撮影装置

置に本亜種が撮影され、その生息が確認されている。しかしながら、本改訂版作成に伴う現地調査では生息を確認することができなかった。

学術的意義・評価 : 日本ではきわめて確認例が少ないが、八重山諸島に特産する固有の亜種として 2009 年に再分類された (Nishiumi and Morioka 2009)。

生存に対する脅威 : 森林伐採など環境の変化。

特記事項 : 山階鳥類研究所には次の 2 点の標本が収納されている。1936 年 7 月 12 日 : 西表島祖納、1933 年 4 月 1 日 : 台湾阿里山。1984 年以降、直接観察がされていないため、引き続き情報不足(DD)とした。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原記載 : Bonaparte, 1857. Rev et Mag. Zool., p. 205.

参考文献 : 五百沢日丸他, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版。  
西海 功 2014. コトラツグミ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 240.  
Nishiumi I. and H. Morioka, 2009. A New Subspecies of *Zoothera dauma* (Aves, Turdidae) from Iriomotejima, Southern Rkyukyus, with Comments on *Z.d.toratugumi*.  
真木広造・大西敏一, 2000. 日本の鳥 590. 平凡社。  
日本鳥類目録編集委員会編, 2000. 日本鳥類目録 改訂第 6 版. 日本鳥学会, 帯広, 345pp.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.  
沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 1996. コトラツグミ. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータおきなわ”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 沖縄, 326.  
山階芳麿, 1980. 復刻版 日本の鳥類とその生態 第 2 巻. 梓書房, 東京。

執筆者名 : 庄山 守\*・高原建二(追補) \*前回改訂版 (2005) における庄山による記載内容を一部見直した。

和名 : ウスアカヒゲ

分類 : スズメ目 ヒタキ科

学名 : *Luscinia komadori subrufus* (Kuroda, 1923)

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

形態 : 全長約 14 cm でスズメ大。雄成鳥の頭上、翼、背面、尾羽は明るい赤橙色。額から喉、胸部は黒色。腹部と脇は灰白色で、脇に黒斑がある。

近似種との区別 : 雄個体の額にある黒色部の幅は広いことと上面の色が淡い点で他の亜種と異なると考えられている。

分布の概要 : 八重山諸島 (与那国島) で 1921 年 10 月 13 日の雄成鳥 1 個体の採集記録が知られるのみ。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 基亜種のアカヒゲ *L. k. Komadori* は男女群島やトカラ列島、奄美諸島とその周辺島嶼に分布している。沖縄島にはホントウアカヒゲ *L. k. Naniyei* が生息する。

生態的特徴 : 不明。

生息地の条件 : アカヒゲやホントウアカヒゲと同様に鬱蒼と茂った森林と考えられる。

現在の生息状況 : 与那国島に留鳥として生息するとされているが、近年の確認や繁殖記録の情報はない。

学術的意義・評価 : 八重山諸島 (与那国島) の特産亜種として重要である。

生存に対する脅威 : 生息地が与那国島のみという局在的で分布域が狭く、生息環境である森林伐採など環境の変化。

特記事項 : 八重山諸島に留鳥として生息すると考えられているが、確実な繁殖記録もなく、1 個体の採集記録のみである。最近、八重山諸島には本亜種と形態的にごくわずかな差しか見出されていない渡り性を有する亜種アカヒゲが越冬していることが明らかになっている。したがって、その繁殖地も知られておらず、亜種アカヒゲとの形態的な差がごくわずかであることなどから、その独立亜種としての存在自体が疑問視されることが指摘されている (梶田, 2014)。日本鳥学会編 (2012) では、「絶滅」として扱っているが、その根拠は明確にされていない。このことから、本書ではそのランクを決定する情報が不足していることから当面情報不足として掲載することにした。なお、本亜種は種の保存法に基づく国内希少野生動植物種 (1993 年)。国指定天然記念物 (1970 年)。

原記載 : Kuroda N. 1923. *Icoturus komadori subrufus*, subsp. nov. Bull. Orn. Club, 43: 106.

参考文献 : 梶田 学, 2014. ウスアカヒゲ. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-2 鳥類. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 240.  
日本鳥学会編, 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 三田, 438pp.

執筆者名 : 高原建二